

535
204



始



8. 8. 20

永井柳太郎著

世界政策十講

東京白揚社出版

大正
14. 7. 16
内交

535-204

序

本書は余の世界政策に關する新舊講演中、會心の稿十篇を收めたものである。最も舊き稿は大戦争前に屬し、其中に引用せられたる人にして今日は既に故人となつた者もある。假へばウイルソン前大統領の如き、加州のアイリツシユ大佐の如きそれである。然し講演の當時生きて居た人は、凡て其儘として、殊更に「故ウイルソン」とか、「故アイリツシユ大佐」とか訂正することなく、其代り各稿の末尾に其年月を附記して置いた。

今日各國政府並に人民の最も苦心しつゝある大問題は、内に在

つては社會政策、外に在ては世界政策である。最近列國の内閣交
迭史は、畢竟するに、社會政策乎、世界政策乎、其孰れかに關す
る政府對人民の衝突史にあらざるはない、而して社會政策問題と
世界政策問題とを通じて、内外を一貫するは、即ち人格尊嚴の自
覺を基とする時代精神そのものである。

今や人類は階級意識より全體意識へ、外に在ては一人種專制よ
り人類共存へと、其進化の道程を辿りつゝある。本書は専ら世界
政策上に於ける時代精神の進化を論ずるを目的とする。其方面の
研究者に對して、他山の石たるを得ば幸である。

大正十四年五月三十日

永井柳太郎

目次

一	力の外交乎、法の外交乎……………	一
二	第一義に生くる國家は強し……………	三三
三	帝國主義外交と其崩壞……………	四七
四	世界米文化主義と世界文化主義との對立としての日米問題……………	六三
五	光は東方より……………	一四
六	亞細亞の黎明期と我外交……………	三五
七	東西文化の生理的考察……………	一五一
八	太陽沒せざる二大帝國……………	二〇七
九	世界戦後の植民思想……………	二七五
十	産めよ殖えよ地に満てよ……………	三〇七

世界政策十講

永井柳太郎著

一 力の外交乎、法の外交乎



今日の生活に於てはあらねばならぬ事、即ち(What ought to be)と、現在ある事即ち(What is)とが餘りに隔絶して居る。凡そ人間として、多少の程度の差こそあれ、人道的觀念を持たぬ者はない。進歩したる民族に至つては、何れも人類は同胞として親愛すべき者なる事を信じて居る。宗教がそれを教へ、哲學もそれを説き、歌人もそれを歌ひ、政治家も亦それを理想とする。然るに現實の生活を顧れば國內的にも、國

際的にも、それと正反對の事實が到る所に行はれて居る。其あらねばならぬ事と、現在ある事との相異が餘りに甚しき事が人類の深刻なる懊惱の原因である。

國內に於ては貴族對平民の軋轢が絶えない。資本家對労働者の闘争が日々に激烈となりつゝある。國際間に於ても亦民族對民族、人種對人種の生存競争が屢々砲火の間に行はれる。人類は昔も今も依然として戦ひつゝある。トルストイは斯くの如き人類の悲劇は二の原因に基くと考へた。第一は暴力の行使である。政治界に於ても、産業界に於ても、其他の諸方面に於ても最も強き支配力は暴力である。甲の國と乙の國との關係も亦暴力に依つて決せらる。然るに人類は尙未だ暴力を以て人間の生活を支配する事が良心の自由と矛盾する大罪惡である事に就いて深刻なる自覺を持たぬ。第二は他よりも卓越し自己の意思に他を服従せしめんとする慾求である。人類は個人的には他人を支配し、團體的には他團體を左右せんとする強き慾望があつて、或は富に依り、或は兵力に依り、或は權勢に依つて其慾望を遂げんとして、競争する。之れが暴

力の行使よりは更に根本的なる罪惡であつて、此二大罪惡の結合は必ず人類の墮落となり、又自殺となる。故に人類は此二大罪惡から脱出し、無我愛の心境に向上するに非れば國內的にも、國際的にも到底眞の生命に充實したる社會を建設する事は出来ぬと云ふて居る。併しトルストイの所謂無我愛が徹底し、人類が自己に對する愛を以て隣人を愛するに至るは何時の事であらうか。

二

千八百八十年モルトケ將軍は當時のハイデルベルヒ大學の國際法教授たりしブルンチユリーが戰爭を非難したるに對し、同教授に與へたる書中に於て「永遠の平和は夢なり、而も惡夢なり、戰爭は宇宙間に於ける萬物を支配する法則より出る所にして神の攝理なり、人間の最高の徳性、即ち勇敢、忍耐、忠誠、犠牲等の發達は總て戰爭の賜物にして、戰爭なかりせば全世界は唯物主義の泥中に惑溺するを免れざらん」

と云ふて居る。フオン・デン・ホルツ將軍も亦、其名著「武裝の國民」に於て、モルトケ將軍と同じ思想より、戦争は如何なる時代にも断絶せざる事を論じ「世界の各國民が各々其祖先より繼承せる政治的及び社會的理想を實現せんとし、又其子孫の爲めに自由且つ十分なる發展の餘地を確保し置かんと欲する限り、其間に衝突の起るは必然にして其結果戦争は止むを得ざるなり、苟も人間の存する所必ず生存競争あるべく、生存競争のある所必ずや戦争あらん。恒久的平和と云ふが如きは未來は知らず現世に於ては不可能の事なり。」と云ふた。此思想は嘗に獨逸の軍人のみならず他國にも其共鳴者を有するのであるが、私は之等の人々に共鳴する程人類の道德及び能力に就いて悲觀的でない。

人類の生存する所に常に生存競争あるは事實である。此事實を否認する事は出來ぬが、併し生存競争の手段其物は文化の發達と共に次第に進化する事を忘れてはならない。譬へば奴隷賣買の如き十九世紀の中葉に至るまでは正當なる貿易として基督敎國

民の間にも之れを公認した。然るに文化の發達と共に、貿易の意義も亦變遷し、今や奴隷賣買は犯罪を以て目せらるゝに至つた。戦争も亦之れと同じである。今日は國際間の利害及び感情の衝突を決する最後の手段として戦争は已むを得ぬとせられて居るけれども、人類の徳性及び智識の進歩と共に戦争以外の手段に依つて其衝突を解決するに至るは必然の順序であつて、戦争を以て總ての時代と總ての人類に共通する生存競争の唯一の手段なりと信ずるは、生存競争あるを知つて進化あるを忘れたる者である。國際法學者にして又外交家なるデビッド・ジエーン・ヒルが其著「近代國家を基礎とする世界組織」に於て「人動々もすれば平和の理想を一の空想に過ぎずと云ふ。然れども戦争のみ現實にして平和は空想なるや。歴史は過去に於ける戦争の時期は平和の時期に比して遙かに短かりし事を實證するに非ずや。然らば戦争と平和と孰れがより多く現實なる。今や全人類は戦争に依る事なく法律の觀念に基きて總ての國際争議を解決せん事を希望し、其方法を案出するに苦心しつゝあり。何人か平和は絶望なり

と豫言し得る者ぞ」と云ふたのは大に味ふべきである。

併し之れと同時に私は戦争が常に罪惡で、平和が如何なる場合にも尊重すべきであると信せぬ。近來平和論者の云ふ所を聞くに、平和を人生の最高目的なるかの如くに考へ、平和のためには何者をも犠牲とすべきやうに云ふ。併し平和は手段であつて、決して目的でない。平和は、畢竟するに、還境並に心境の安靜を意味するのであるが人生の最大目的は與へられたる生命の完成であつて、平和は其完成に必要な條件の一種に過ぎない。凡そ人間の生命なるものは孤立したる存在ではない。宇宙の大生命と有機的に連絡したる實在であつて、其本源的生命を自覺する事が即ち眞實なる自我の發見である。而て其眞實なる自我の自由にして且つ充實したる發展が、應て生命の完成となる。人類の生活に於ける幾多の問題も、結局は生命の完成に對する努力に歸するのであつて、學術的に云へば「自我の發展」、宗教的に云へば「永遠の生命」が實に人生の總ゆる目的中の最大目的である。我々が平和を要求するのは平和其事が人

生の最大目的であるからではない。平和が人間の生活の最大目的たる生命の完成に必要な場合に於てのみ必要なのである。故に平和の必要並びに其價値は、相對的であつて、絶對的ではない。生命の保存と其自由なる發展のために平和が必要であると共に又戦争が必要の事もある。即ち或國民又は或民族が人類生命の保存及び完成に必要な道義を無視し、人類文明の大本を蹂躪するに於ては、之れと戦ふて其生命を防護する事が即ち人生の最大目的に一致するのである。ワシントンの獨立戦争、リンコルンの奴隸解放戦争は此意味に於て孰れも人類生活の最大目的に一致したるものであつて、其道徳的價値は平和のそれに何等讓る所がない。故に私共の要求する平和は常に國際正義の上に立脚したる平和でなくてはならぬ。國際正義を基礎とせざる平和は假令それが實現するとしても、弱國が強國のために壓伏せられたる場合の産物に過ぎぬのであるから、相互に對等の人格を認めたる國家間の平和と同一に論ずる事は出来ぬ。それは奴隸の主人に對する沈黙と同一であつて斯くの如き平和の存在は人類の進歩に

非ずして反つて墮落である。

三

ノルマン・エンゼルは千九百十年名著「大^{グレート}幻^{イリュージョン}影」を公にした。彼は此書に於て侵略政策の反つて侵略國に有害なる事を論じ、次の四箇條を立證せんとした。第一は強國必しも一等國に非ずと云ふ事である。白耳義や和蘭や諾威は其陸海軍の強大なる事に於て到底獨逸や埃甸國や露國の敵でない。けれども其國中に於ける産業の發達せるため世界の經濟界に於ける信用は遙かに之等の諸強國を凌駕し、公債を募集するにしても其利廻りは常に低廉である。「ロンドンの市場に於て獨逸の三步利付公債が八十二磅なるに拘はらず、白耳義の三步利付公債は九十六磅を上下し、露國の三步半利付公債が八十一磅なるに反して諾威の三步半利付公債百二磅を越え、有名なる英國コンソル公債の如きも英國が南阿弗利加を征服し、世界に有數なる大金礦を獲得したる時

代より次第に下落し始め、英國戰國艦が未曾有の大多數に對したる今日に於て最も甚しく、遂に七十七八磅代となつた」と云ふて居る。第二に如何に莫大なる賠償金を取つてもそれは決して取つた國の利益にならぬと云ふ事である。「莫大な償金を取れば勢ひ取つた國の物價が暴騰する。物價が暴騰すれば貿易は逆調となり、其結果反つて産業界に動搖を惹起する。加ふるに戰敗國は一時に莫大なる償金を支拂ふ事に依りて自ら購買力は激減せざるを得ない、隣國の購買力が激減すればそれ丈けその國に對する輸出も亦激減するではないか」と云ふのである。第三は領土の獲得も亦之を獲得した國に何等の利益をも與へずと云ふ事である。「英國の殖民地の大部分は事實に於て英國と同盟を組織する獨立國に異らぬ。外國が通商上に於て英國を利益すると同一の意味に於て英國を利益するのみで、其他に何等の特別なる經濟的利益を與へない。故に經濟的に論ずれば英國は正式に殖民地との關係を絶つ事に依り國防費を減ずる丈けそれ丈け利益を受けるのである」と云ふて居る。第四に戰爭は富の破壊であるから勝敗孰

れの場合にも常に損失を意味すると云ふのである。「近代國家は相互に經濟關係が密接且つ複雑である。故に敵國の産業を破壊すれば自國の商人は結局貧民を相手に商賣をすることゝなるから自國の産業も亦直接及び間接に打撃を受けざるを得ぬ」と斯様に云ふのである。

エンゼルの議論中には首肯する事能はざる點がないではない。(拙著「社會問題と殖民問題」二五五——二七一頁参照)けれども侵略が經濟上より見て到底收支償はぬ事業である事は、何人も之を承認せざるを得ぬ。殊に現代の戦争が勝者及び敗者の双方にとつて富の大破壊を意味し、双方の國民生活に殆んど堪え難き苦痛を與ふる事は今度の世界戦争がエンゼルの議論以上に明白に之を立證した。だから國民自身が外交關係を支配し得る程度に民衆政治の發達したる國々にあつては今後侵略のため猥りに干戈を動かす事はあるまいけれど、併しそれのみで直ちに平和の時代が來ると速断する事は出來ない。侵略の有害無益なる事が立證せられ、戦争の慘害に對する自覺が發

達しても、國際間に尙未だ利害及び感情の衝突が實在し、而かも其利害及び感情の衝突を解決すべき平和的手段が發見されない限り、戦争の危険も亦實在する。

四

今日の日本には華府會議に於て軍備制限の行はれた事が世界平和に對する確實なる保障であるかの如く解して居る人が多い。軍備制限は各國民の負擔を輕減する上に於て多少の貢献はあつたに相違ないが、軍備を必要ならしむる原因其物を除去したのではない。軍備の存在は必しも戦争の原因ではない。同様に軍備の縮少は必しも永遠に亘る世界平和の保證とはならぬ。何となれば戦争の主要なる原因は常に國際間に於ける經濟的衝突であつて、軍備も亦専ら之がために必要とせらるゝからである。今日までの實例に就いて見るも戦争勃發の直接原因は多く經濟問題の國際爭議に其端を發して居る。フランク・サイモンド氏が最近の「レビュー・オブ・レビュー」紙上に於て

「世界的に軍備の制限を協定すると云ふ事は決して悪い事でない。併しそれは世界平和と云ふ大なる理想より見れば枝葉の問題である。同時に太平洋上に於ける海軍力の制限も亦些末の問題である。眞の世界的の平和はこれらの軍備問題の背後に横つて居る經濟問題に係つて居る。即ち經濟問題が本質的な問題で、軍備問題は第二次的の意義を有するものである。」と云ふたのは確に卓見である。

世界戦争後の國際的經濟競争は世界戦争前のそれに比して其激烈なる事に於て毫も異つては居らぬ。寧ろ各交戦國が戦争のために受けたる瘡痍から一日も早く恢復せんと焦つて居る丈けそれ丈け其競争は激烈である。過般の華府會議にしても其使命は専ら世界各國の軍備制限に存するとされて居るのであるが、之れは皮相の觀察であつて、少しく其裏面に立入つて詮索するならば、我々は其背景に極東、殊に支那に於ける各關係列強の富源開發及び販路擴張に對する大暗闘の事實を認めざるを得ない。露國の「共產黨員が倫敦の「デーリー・ヘラルド」紙に寄書して華府會議の真相を論評し「米

國が米國のために選んだ二大市場は、支那と露西亞とである。米國は既に其敵手たる英國及び佛蘭西を支那に於ける第二流の勢力に追ひ落す事に成功した。今や機會均等を高唱する事に依て日本をも亦同様の地位に陥れやうとかがつてゐる。日本は戦利品として支那の最も價值ある部分を贏ち得たが、此戦利品を米國の剝奪より防ぐためには英國の援助が唯一の頼みである。然し英國は實に其希望の焦點として一大アングロ・サクソン組合を作るべく華士頓に出掛けて行つたのである。」と云ふたのは言奇激なりと雖も、其間多少の眞理なしとせぬ。

世界戦争後の世界に於ける最強國たる米國が、今尙經濟的帝國主義の舊思想より脱し得ない事は、世界の一大不安である。武力的帝國主義は其本家たる帝政獨逸の滅亡と共に滅亡したとしても、經濟的帝國主義は屢々戦争を挑發する危険性を有する事に於て、多く武力的帝國主義に異なつて居ない。米國が最近ハイチ、サント・ドミンゴの兩共和國を占領した事は何を意味するであらうか。ウイルソン大統領が講和會議に臨

みて民族自決主義を提唱しつゝありし間に、米國海軍はハイチ及びサント・ドミンゴ兩共和國を占領し、今日と雖も猶その軍隊を撤退しない。更に昨年十月十八日には阿弗利加のライベリア共和國に對しても亦五百萬弗を貸し付けたのであるが、之れは雜誌「ネーション」が本年五月三十日號に於て論評した通り、實はライベリア共和國の主權買收費である。此借款の結果ライベリアの支配權は事實に於て米國の大統領の指名したる財務委員の手に歸し、米國は實にライベリアの豫算を左右し得るのみならず、又軍隊及び警察隊の編成を決定するの權を掌握したのである。米國は嘗てキューバやポルトリコを半屬國となし、メキシコ及びニカラガに於ける反米政府を顛覆し、今又之等の國々を占領するのは其背後に帝國主義の思想が實在するにあらざるや疑はしむるものがある。ハーデンク大統領の所謂「米國第一」なる言葉は、其實質に於て、ウドイツランド、ユーバーアムスイルヘルム二世の所謂「獨逸最上」と同一意義であるまいか。

佛國首相ブリアンは華府會議に於て米國々務卿ヒューメの提出したる陸軍々備縮少

の議に忍従する能はずとして、遂に脱退を言明したのであるが、彼は其言明中恆久平和の要諦は、軍備制限よりも世界に於ける不安の諸要素を除去するに在る事を痛論し「軍備制限と云ふ事は其本質に於て物質的であると同時に道德的であらねばならぬ。表面上相互に講和會議の條約を遵守して居るやうでも事實上復讐、憎惡、攻撃の精神に炎えて居ては軍備制限は無意義である。」と云ふたのは、流石に慧眼と云ふべく、眞に平和を愛する者の事業は、第一に戦争の原因となるべき各種の國際的衝突を如何にして除去すべきや、第二に國際的衝突の起れる場合、如何にして之を戦争に依らずして解決すべきやと云ふ事の研究であらねばならぬ。

五

嘗て歐洲人が世界統一を夢見た時代があつた。アレキサンダーは武力に依り、羅馬基督教會の力に依り、各々其夢想を遂げんとした。アレキサンダーの夢想は彼自身

死に依つて消滅し、羅馬人の基督教帝國に對する憧憬は宗教改革に基く法王の權力の失墜と、封建制度の破壊に伴ふ國民的感情の勃興と、マキアベリズムの政治思想の普及との爲めに雲散霧消し、ヨーロッパは再び大小幾多の國家に分裂して十五世紀の末葉より約三世紀間に亘り慘憺たる戰亂の巷と化した。茲に於て宗教家や、思想家や、詩人の間には再び恒久平和の基礎を確立せんとする思想を生じ、大小幾多の國家の對立を認むると同時に、之れを連合して平和同盟を組織せしめん事を考ふるに至つた。之れが近世の所謂國際主義の運動となつたのであるが、此國際主義に立脚する平和思想は大體に於て次の三種の形式をとつて現れた。

第一は全ヨーロッパの中央に各國家の外交關係を管理すべき權能を有する機關を設け各國家をして其外交問題の解決に關しては其命令に服従せしむべしとする思想である。斯くの如き思想の代表者として最も顯著なるは、佛蘭西王アンリ四世の重臣ネリ公であつた。彼はヨーロッパが一世紀以上殆ど繼續的に中古時代に於て見るべか

らざる程大規模の戰爭に禍ひせられたるを悲み、再び其災害を繰り返す事なきやう新ヨーロッパの建設を計畫したのである。彼は一人の主權者が恣まゝに其意志に隨つてヨーロッパを左右する事を危険なりとし、羅馬時代の世界帝國の思想に反對した。而して内政に關しては完全なる自治權を有する多數の獨立國家の自發的協同に依つて保障する平和に非れば眞の平和に非る事を信じた。彼は此信念に基きて露西亞及び土耳其の兩帝國を除外したる残りのヨーロッパを六の國際團體に分ち、各團體に其所屬國家間の外交關係を統整すべき代表委員會を設置すると同時に、又毎年順次に各團體の首府に於て全ヨーロッパの代表委員總會を開き、専ら全ヨーロッパの平和及び進歩に必要な各種の提案を審議する事とした。之れ一方に於て文明國家間の平和的協同を促進すると同時に他方に於て國民生活の獨特なる要求に適應せんとしたもので、當時主張せられた此種の計畫中最も進歩したものであつたけれども、不幸にして未だ其實驗の機會を得ずして死んだ。

スリー公の思想よりも更に進歩したものは、同じく佛蘭西のサン・ピエルの國際聯盟案である。サン・ピエルは宗教家であると同時に千七百十三年のウトレヒト講和會議に際しては、佛國全權委員の隨員として參列し、外交家たるの經歷をも兼ね有したのであるが、ウトレヒト會議より歸りて後、直ちに一書を公にして歐洲國際聯盟の必要を論じたのである。彼は歐洲諸國は其道德的基礎に於て全く單一の社會なる事を信じ、其共通せる道德的觀念に基きて制定せられたる法律は以て歐洲諸國の外交關係をも統整するに足ると考へたのであつた。茲に於て彼は歐洲諸國の主權者間に恒久的の平和同盟を締結すると同時に、其各主權者を代表する全權委員に依つて組織せられたる常設列國會議を開催し、其調停及び仲裁に依つて歐洲諸國間に發生する一切の重大なる外交問題を解決すべく、若し仲裁に際し其判決に服従する事を肯せざる國家ある時は、須く之れを平和同盟より除外し、残りの諸國は共同して其除外せられたる國を平和の攪亂者として討伐すべしと云ふのである。此國際聯盟に關する意見は當時三十年戦争、

スペイン王位繼承戦争の後を受けて平和に戀々たりし歐洲人に非常なる感動を與へた。ライプニッツは大に此計畫を賞揚して、歐洲諸國が直ちに其實現に努めん事を勸告し、後年ルツソー及びポルテールも亦之れに賛意を表した。只ルツソーは斯くの如き聯盟を實現して其効果を收むる前に各國は一度革命を経過して其人民の生活状態を新になし置くの必要ある事を主張したるに於て異つて居るけれども、國際聯盟の思想其者に對しては、全然共鳴したのであつた。斯くの如くにしてサン・ピエルの思想は歐洲の平和運動に重大なる影響を與へたのであつたが、當時の各國政府は此卓越した思想に對しても何等の注意を拂ふ事なく依然として慘憺たる戦争を繰り返し、其極人民の生活は荒廢し、其不平不満は遂に爆發して佛蘭西革命となつたのである。

第二の形式は國際法に依つて國際間の外交關係を整理し、以て戦争を豫防すべしとの思想である。此思想は國際法學者の元祖として知らるゝユーゴー・グロシユースに初まる。彼は自ら三十年戦争の慘狀を目撃し、國際間の諸問題を國內に於けると均しく、

法理に基きて平和に解決するの必要を痛感し、千六百二十五年其名著「デューレ、ベリ、エト、パシス和戦法規」を公にして其國際法に關する思想を發表した。彼は曰く「今や基督教國を通じて野蠻人すら恥辱とする程慘忍なる戰爭を猥りに行ふて怪まず、凡そ人の生命及び自由を武器に依つて保持せんとするは大なる矛盾にして、人は武器をとつて立つや反つて生命及び自由を蹂躪する戦慄すべき傾向を有す」と。彼は人類を支配する一切の法律及び習慣を其國民に特有なる社會の必要に應じて發生したるものと、萬人の認容する共通なる道理の命令に基きて規定したるものと二種に大別し、後者の前には各國は平等である事を信じた。而して此一般に認容せられたる道理の法則に依つて各國の外交關係を律する事が其理想であつた。此思想は當時の學者及び思想家の間に多大の共鳴を生じ、獨逸に於てはハイデルベルヒ大學の國際法教授として又「アイ、ユレ、レ、ナ、チ、ユレ、レ、エ、ト、ケ、ン、シ、ン自然法及び國際法」の著者として有名なるブーフエンドルフや、フロ、テ、ラ、ジ、エ、ン瑞西に於ては「人民法」の著者として有名なるヴァツテルの如きを初めとして多數の人々が其宣傳に努めたのであつた。

た。

第三の形式は必要に應じて歐洲諸國の間に列國會議を開催し、隨時に起り來る外交問題を隨時に解決する事に依つて、歐洲の統一と其平和とを促進せんとする思想である。例へば千六百四十八年のウエストファリア講和會議の如きは其思想の最も顯著なる發現である。ウエストファリア條約に依り三十年戰爭の原因たりし歐洲の新敎國の宗教的獨立は確認せられたのであるが、それと同時に羅馬帝國の皇帝と其諸侯と佛蘭西王との間に恒久平和の維持に關する條約が締結せられ、初めて獨立の主權者が互に平和のために共通の規約を遵守する事となつたのである。此種の列國會議は近代文明の特産物であつて、中世時代に於ては見る事を得なかつたのである。

斯くの如く十七、十八兩世紀には國際平和に對する熱望が種々なる形式に於て國際主義の思想となつて現れた。カントの「ツァイム、エウ、アイ、ゲン、フリー、デン恒久平和論」を見ても當時第一流の人々が如何に此問題の解決に苦心したるかを推察する事が出来る。ラスカセスはセントへ

レナに於けるナポレオンとの會話を公にしたるものゝ中で、ナポレオンも亦歐洲に於ける恒久平和の確立に苦心したる事を述べ「ナポレオン自身の談話に依るも彼の歐洲征服の眞目的は、十七八兩世紀に於ける無法なる戦争のために崩壊したる歐洲大陸を、新に國民主義の基礎に立つ數箇の新國家に分割し、更に之れ等の新國家をして佛蘭西を中心とする聯邦を組織せしめ、佛蘭西に於て時々聯邦會議を開催し、以て歐洲に於ける恒久平和の基礎たらしめんとするに存したり」と云ふて居る。之れ等の事實に徴しても三十年戦争、スペイン王位繼承戦争、七年戦争、等相次いで流血の慘事を演じた事が如何に歐洲人の平和思想を刺戟したるかを想像し得るのであるが、併し戦争を豫防する具體的方法に關する研究に至つては未だ幼稚なる状態にあつた。

六

今日までの經驗では戦争を豫防する目的を以て設立せられたる同盟又は聯合にして

其目的を達したるものは殆どない。千八百四十六年に羅馬皇帝、其諸侯及び佛蘭西王の間に締結せられたる國際聯盟、千七百十一年に英國と佛蘭西との間に締結したる平和條約、千八百十五年、英國、佛蘭西、普魯西、奧太利及び露西亞の間に構成せられたる國際聯盟、ヘーグに開催せられたる千八百九十九年と千九百七年と前後二回の平和會議、及び世界戦後三十二箇の對獨斷交、交戦國を中心として組織せられたる國際聯盟等が其重要なるものであるが、其内國際聯盟は最後のものを除き、聯盟各國が其運命を國際聯盟の保護に托するの誠意なく、各々絶對自由の主權を主張して止まざりしがために失敗に終つた。

千八百十八年エキス・ラー・シャベルに於て英・佛・普・奧・露の五箇國間に締結せられたる國際聯盟は頗る重大なる意義を有したものであるが、併し此聯合も前述の各國國際聯盟に共通なる原因の外、尙次の如き特殊の原因があつて其健全なる發達を妨げられた。それは第一に此條約が現状維持に重きを置き過ぎ、當時既に獨逸國內に勃興しつ

ありし如き國民主義の運動をまでも抑壓せんとした事である。第二に此種の聯盟は君主の聯合でなく、人民自身の聯合でなければ永久なる繼續を期し難きに拘はらず、此聯盟は君主のみの間に於て、主として君主の利益を擁護する目的を以て締結せられた事である。第三に聯盟に参加したる國々の内部に於て民權自由の運動が勃發した場合に、各聯盟國の君主が其國の内政に迄も干渉して之を鎮壓せんとした事である。

第一回及び第二回の平和會議が國際平和の進歩に多大の貢獻ありし事は否認する事が出来ぬ。殊に其貢獻中最も重大なるものは仲裁々判所の設立である。併しヘーグ仲裁裁判所が司る所は、猶未だ條約の解釋上より生ずる權利の爭議を決するに止まり、國際間の利益上に於ける爭議に及ばぬのである。加ふるに其權利の爭議と雖も、之れが仲裁をヘーグ仲裁々判所に求むると否とは總て各國政府の隨意となつて居るから之れがために如何なる程度まで戰爭の危険を豫防し得べきかは疑問である。其後米國政府が英國及び佛蘭西等の政府を誘ふて總括的仲裁條約なるものを締結し小は條約上の

爭議より大は國家獨立上の衝突に至るまで苟も外交手段を以て決し能はざるものは總て之れを仲裁々判の判決に待たんとしたのは、從來の仲裁々判に比して確に一步を進めたものであつたけれども、遺憾ながら此條約は米國上院の批准を得る事が出来なかつたために其効力を生ずるに至らずして消滅した。

最近の國際聯盟は國際平和の保障と、國際紛争の解決とに就いて從來の如何なる計畫よりも遙かに進歩したものであるに相違ない。然し之れが如何なる程度まで將來の戰爭を豫防し得べきやは猶ほ試験時代に屬する。國際聯盟は其目的たる戰爭豫防の手段として、一方に於ては聯盟各國に軍備制限の義務を課すると同時に、他方に於て國際紛争を解決するため三の機關を設けた。第一は仲裁々判所である。第二は聯盟理事會及び聯盟總會である。第三は常設國際司法裁判所である。仲裁々判所は一般に條約の解釋、國際法上の問題、國際義務の違反となるべき事實の存否、並びに右違反に對する賠償の範圍及び性質に關する紛争の如き法律的性質を具備する問題を處理する事が

目的である。聯盟理事會及び聯盟總會は聯盟各國間に國交斷絶に至る虞ある紛争發生し、而も之れを仲裁々判に附し得ざる場合に於て紛争當事國双方の間に立ちて其和解に努むる。常設國際司法裁判所は國際的性質を有する一切の紛争にして、其紛争當事國の附托に係るもの、裁判をする權能を有すると同時に聯盟理事會又は聯盟總會の諮問する一切の紛争又は問題に對して意見を提出するものとなつて居る。聯盟國の中で若し其規約に反し、國際紛争發生の場合之れ等の機關に依りて規定の手續を経る事なく、猥りに他の聯盟國に對して戦争を開始するか、又は聯盟理事會若しくは聯盟總會に於ける全會一致の決議に従ふことを承認したる對手の國に對して、戦争をなす場合は當然他の總て聯盟國に對して、戦争の行爲に出でたものと見做され、他の總ての聯合國は之れに對する第一段の制裁として、直ちに其國に對する總ゆる通商上、金融上の關係を斷絶し、又其國民と聯盟國民との一切の交通を禁止すると同時に、聯盟國たると否かを問はず他の總ての國々の國民と、其違反したる國民との間の金融上、

通商上、及び個人的の交通をも出來得る限り妨害すべく、それで猶ほ効力なき場合は第二段の制裁として兵力に訴へ違約國を懲るるのである。

けれども此國際聯盟の規約が如何なる程度迄世界の平和を保障し得べきかは猶ほ大なる疑問である。第一に國際聯盟の發議者たる米國が、其主權を拘束せらるゝが如き義務を負ふを欲せず、既に國際聯盟より脱退した。第二に米國以外にも國際聯盟に加入せざる國家頗る多く、之等の諸國の間に於て又は之れ等の諸國と國際聯盟に屬する國家との間に於て國際的紛争を生じたる場合に、國際聯盟は之れを解決すべき何等の權能を有しない。第三に國際聯盟が規定したる國際仲裁々判なるものは其實質に於て多く舊來の國際仲裁々判に異なる所なく、各國は各々其獨立又は興廢に關すと認むべき重大問題は、譬へ仲裁々判所の判決を仰ぐも之れに服従せざるの自由を保留する事が出來る。第四に聯盟總會は聯盟國全部の代表者を以て組織せられるのであるが、聯盟總會の開催は稀であるに反し、頻繁に開催せられ、事實上國際聯盟の專務たる地位にあ

る聯盟理事會は所謂五大國の代表者と聯盟總會より選出したる四ヶ國の代表者によつて組織せらるゝのであるから、勢ひ國際聯盟の意志は五大國の意志に左右せらるゝ事多く、國際法上多年の習慣たる各國平等の原則に反するので、五大國以外の國々の反感を挑發する危険がある。現にベルトラント・ラッセルの如きも此缺點を指摘して、「今日の如き國際聯盟は某々大軍國が其共同的帝國主義を遂行せんとする一種の機關に過ぎざるのみ」と痛罵して居る。第五に國際聯盟は人民の聯盟であつて其根底は四民平等の理想に存するに拘はらず、人種差別撤廢案の如きものを否決すると共に、モンロー主義の如きものを認め、聯盟の理想と聯盟の實際との一致せざる事を既に曝露して居る。これらの事實に依つて見ても國際聯盟は尙未だ試験時代に屬するものであつて、之れに依つて世界不安の要素は、未だ一掃せられたりと云ふ事が出来ない。

七

レオン・ブルジョアは其國際聯盟論に於て「法の外交を以て力の外交に代らしめざるべからず」と論じたが、實に其言の通り世界が法律的に組織せられずんば世界平和は不可能である。世界を法律的に組織するには國際裁判の權威を確立する外はない。而して國際裁判の權威を確立するためには勢ひ各國家の主權を制限せざるを得ぬ。若し各國家が絶對自由の主權を固執し、如何なる場合に於ても其制限を受くる事を肯せざるに於ては世界は永久に無政府である。

如何なる國民と雖も今日は單に自國內の生産物のみにて生活する事は出来ない。輸出と同時に又必ず輸入を必要とする。故に經濟生活は其根底に於て國際的であつて、譬へ外國の製造業なればとて管理の法宜しきを失すれば直ちに其惡影響を受くるのである。斯くの如く今日の國際生活は密接なる物質的連帶關係を有するのであるけれども、然し世界平和の眞の根底となるべきものは單なる物質的の連帶關係でなく、平等にして自由なる各國民の友愛と協力とを基礎とする道德的結合でなくてはならぬ。國

家間の道徳的結合が鞏固となり、相互に他の自由を尊重し、其進歩を扶くる事になれば、物質的の連帶關係は愈々密接とならざるを得ない。隣國を自由に且つ十分に發展させればそれは自國にとつても必ず利益となる事は、少しく冷靜に國際生活の實狀を觀察するものゝ直ちに認識する所である。譬えば日本が支那の自由を尊重し、其文化の進歩を扶けた結果、支那が一層富裕に、一層人口が多く、而て生産力の一層盛大なる國となれば、日本は支那からの輸入に依つても、又支那の市場への輸出によつても従來よりは一層大なる利益を得るに相違ない。殊に支那が常に其生産業のみならず、其一般の文化に於て自由且つ高尚なる發展を遂ぐるに至れば其恩恵を受くる者は獨り日本に止まらず實に全世界に及ぶ。之れに對し支那の自由が蹂躪され、其文化の進歩が妨害せらるれば、支那人の精神は萎縮し、其生活は貧困となり、又病的となり、其隣邦たる日本は云ふまでもなく、全世界も亦損害を蒙らざるを得ぬ。國家の偉大は個人の場合に於けると同じく、其取り得る物に依らずして、與へ得る物に依つて定まる

のである。此「受くる者より與ふる者は幸なり」と云ふ道徳的信念が全人類を支配し、各國家が世界平和のために喜んで其絶對自由の主權を「生命の完成」の祭壇に捧ぐるに至るまで、全世界は戦争の脅威より脱出する事が出来ない。(大正十二年正月稿)

二 第一義に生くる國家は強し

一

國家にも個性がある。恰も個人が一箇の單位であつて、特定したる目的を有し、其目的を遂げんとして生活するやうに、國家も亦一箇の單位であつて、夫れ自身の目的を有し、其目的を完成するが爲めに存立する。個人が自己の生存、自己の目的及び自己の關係を意識しつゝ生くるやうに、國家にも亦同じ種類の意識がある。さうして個人が自己決定力を有し、自己の生存目的のために、自己の選擇に依て其行爲を決するやうに、國家も亦自己決定力を有し、政府とか議會とか云ふ機關の決議に依つて自己の意志を發表し、其發表したるものを行ふ。結局國家も個人と均しく人格を有する。従つて國家の生活は正不正を判斷し、權利義務の主體たり得る事に於て、毫も個人に

異なる所はないけれども、併し國家は個人が道德的人格であると同じ意味に於て道德的人格であり得ない。國家には個人の道德の眞髓である感情の働くべき餘地が、皆無ではないけれども、甚だ狭い。個人の道德は東洋では孝を基とし、西洋では戀愛を中心として居るが、孝は親子の間に於ける切つても切れぬ情愛に根ざし、戀愛は異性に對する燃ゆるが如き本能より發する。國家は人格を有するけれども他の國家に對して斯くの如き情熱を持ち能はぬ。だから個人と國家とは同じ人格者であるけれど、其生活の目的が異なるのである。個人の生活目的は複雑である。人に依つて違ふ。各々其慾望に従ひ、各々其智識に依り、各々其遺傳の儘に、又各々其環境に應じ、個々別々の理想を望み、思ひ思ひの目的を追うて生くる。併し國家の目的は單一である。固より歴史哲學上より之を見れば、古今東西の國は皆獨特の目的を持つて存立したと云へぬ事はない。假へば雅典は學藝のために、羅馬は征服のために、英國は憲政のために、佛蘭西は自由のため存立したとも云へるが、それは其國々に於ける國民の歴史的信念

に過ぎぬ。正確なる科學的見地より見たる國家の目的とは云へない。科學的見地から見た國家の目的は結局各個人の生存を保障し、各個人をして各々其最深且つ最大なりと信ずる生活目的に徹底せしむるに必要な社會狀態の建設にありと云はねばならぬ。近代の政治學者の國家の生存目的に關する意見は、大體に於て、さう解釋する事に於て一致して居る。だから國家の生存目的は個人の夫れの如く複雑であり得ないと同時に、又國家の人格は個人の夫れと同じ程度に道德的であり得ない。國際法の大家ブ「フエンドルフは十七世紀の昔夙に「國家は道德的人格者なり」と喝破し、「だから國家は總ての善人が行ふ所を行はねばならぬ。」と云うたけれども、それは確かに云ひ過ぎて居る。國家は道德的人格には相違ないが、併し其主體は正義ジヤスティスである。正義は道德の一部であるが、全部でない。道德の他の一部は何かと云ふに、愛である。而して愛の最大要素は感情であるが、國家に其感情の完きを望む事は出來ない。だから國家と國家との關係は結局正義の實現を以て其目的とするのであつて、人類文化が進歩すれば

する程、正義の觀念は國際間の問題を決定する上に益々重大なる勢力となるに相違ない。現にデヴィッド・ヒル教授の如きも其著「近世國家論」に於て國際問題は窮極する所遂に國際裁判に依つて解決せらるゝ時代の來るべき事を豫想し、「外交家の任務は益々多忙を加ふべしと雖も、而も其多忙の性質は變るであらう。何となれば外交は人類文化の進歩と共に陰謀を其主要なる手段とする時代より、正義を内容とする法理の適用時代に移るべければなり。」と云つて居る。

二

然らば國際間の出來事には感情より發したるものがないかと云ふに、決してさうではない。恰も個人が生活上の目的を有し、道德上の理想を抱いて居るに拘はらず、屢々自己の内に在る他の生活目的に反する慾望感情のために、其目的を悖り、其理想に反するが如き行爲に出づるやうに、國家も亦其内に在る國民の感情や慾望のため同じ

矛盾に陥る事がある。譬へば宗教的及び人種的反感のために國際的正義の蹂躪せらるゝ場合が夫れである。回教國たるトルコ、基督教國たるギリシヤ、ルーマニア、セルビア、ブルガリア等の間に於ては十字軍以來の宗教的反感が歴代傳承せられて、それが屢々虐殺となり、動亂となり、戦争となつて勃發し、國際的正義の實現を妨げた事は著しい。白色人種と有色人種との間にも亦人種的反感に基く排斥、凌辱、憎惡、復讐の暗黒なる歴史が存在するのであつて、日本が大戦後の講和會議に際し、國際聯盟の規約中に人種的差別撤廢を意味する條項を挿入せん事を主張したるは、即ち全人類を此暗黒なる歴史より解放し、人種的反感に代ふるに國際的正義を以て國家と國家との關係を律せんと欲したる精神に出でたものである。大戦後の講和會議に於ける人種差別撤廢の提案と云ひ、又民族自決主義の確認と云ひ、孰れも國際關係が人類文化の進歩と共に、次第に合理化せんとする趨勢ある事の證據であるが、併し國際關係の合理化を妨げる事に於て、宗教的又は人種的反感よりも更に有力なるものは排他的經濟

主義の觀念であると思ふ。

ウキリアム・ペルトソンは「生物學上の事實と社會の組織」と云ふ講義の中で、生物學者の立場から極力人間の他受的感情を否認し、「文明の進歩の動機として、人類に最も普遍なる力は只富を蓄積せんとする慾望のみ。人間は平等なり」と云ふ如き觀念や、總ての人は其生活のために均等の機會を得ん事を要求すると云ふ如き主張は共に事實に非ず、何となれば人間は、如何なる點に於ても、決して平等にあらざるのみならず、總ての人は何れも出來得る限り自己を他より卓越したる地位に置かん事を熱望し、毫も他と對等の者として同一視せらるゝ事を欲せざればなり。」と云うて居るが、私は決して斯う云ふ風に人間の生活動機の經濟的解釋の普遍性を信ずる事は出來ない。人間が富を蓄積せんとする慾望も、富の蓄積其事が動機ではなく、人間としての生存目的が他に在つて、其目的を遂ぐる手段として富が必要である所から其慾望が起るのである。従て人間の生活目的に對する思想の進歩と共に、ペルトソンの主張するが如き人

生觀は、次第に明白に其缺陷を曝露するであらうと思ふけれども、今日の國際間に於ける關係に於ては、尙未だ大なる程度に於て、國際的正義の確立と云ふが如き道德的動機よりも寧ろ國家的利益の追求と云ふが如き經濟的動機が遙に重大なる決定力を持つて居ると云ふ事を恐らく何人も否定する事は出來まい。

今日に於ては國際的正義の確立を標榜する諸種の運動も、其動機は屢々經濟上の理由に存する。譬へば千八百九十九年、時の露國皇帝が初めて萬國平和會議を發議し、軍備擴張休止に關する議案を提出した時の如きも、其主要目的は人道上に存せずして、寧ろ經濟上の負擔の輕減に存した。現に時の露國外務大臣ムラビエフ伯が皇帝の命に依り千八百九十八年八月二十四日付にて露都駐在の各國使臣に回付した文書に於ても「各國に起る經濟上の恐慌は、其原因を過分の軍備擴張と戰鬥材料の蓄積に依りて起る間斷なき危険とに歸すべき者多し。茲に於て現時の武装平和は國民を壓迫する重荷となりて各國民は殆んど其負擔に堪へざらんとす。」と云うて居るのであつて、其動機

は明かに道德的と云ふよりも經濟的である。従て國際的正義の確立が經濟的慾望の追求と矛盾するが如き場合に於ては、尙未だ多くの場合に於て國際的正義が經濟的慾望の犠牲となつて居る。第一平和會議に於ては三箇條の重大なる宣言が可決せられた。第一は空中より爆發物を投下せざる事、第二は毒瓦斯を使用せざる事、第三はダムダム彈の如き有害なる砲彈を使用せざる事であつたが、此三ヶ條の宣言は此度の世界戰爭に於て全然破棄せられた。敵も味方も棄て、顧みなかつたのである。又戦後不完全ながらも國際的正義の確立を目的として國際聯盟が組織せられたに拘らず、米國は其提唱者たる關係があるのに、米國自身の利益上恣まゝに脱退して、今や「米國第一」など、唱へながら世界に雄飛するの自由を確保したのを以て見ても、今日の國際關係は、國家の存立の眞の目的たる正義の實現其物よりは寧ろ其目的に反する感情や慾望のために支配される場合が多いと云ふ事を認めざるを得ない。だから國際法學者の理想とする様な國際生活の合理化は、猶未だ前途遼遠なりと云はざるを得ぬ。

併しながら斯くの如き種々なる矛盾した方のために其進路を妨げられては居るけれども、各國家は猶確かに國際的正義の確立を理想とし、其追求が善である事を意識しつつ進んで居るに相違ない。宇宙の神秘なる法則は其理想を無視し、人類文化の大勢に逆行せんとする國家の存立及び發達を許さない。孰れの國家も其存立と發達とが國際社會の全體にとつて有益であり且つ必要であるやうに自國の經濟的及び文化的生活を改良して行かなくては生くる事が出来ないのである。獨逸の詩人シルレルは、「世界の歴史は世界の法廷なり」と云つたが、それは至言である。人類の歴史を一瞥すると、掠奪、強盜、殺戮、戰爭の果しなき連續の如く見ゆるけれども、これは皮相の觀察であつて、其根底には正義の觀念が實在し、それが時間の經過と共に次第に進歩發展しつつあることを否むことが出来ない。法律家の定義に依ると國家の主權は絶対無制限

にして、自己の意志に基きて自ら制限を加ふる外、他の何者に依つても其意志を拘束されない筈であるが、然し之は法律上の解釋であつて、如何に主權と雖も、道徳上に於ては絶対無制限であり得ない。國家が單に他より優越せる力を有すると云ふ丈の理由に依つて、無制限に、又恣に、其慾望を遂げんとすれば、其結果は必ずや他の復讐となり、又國家自身の墮落となるのである。

固より強大なる權力を有する國家は、其爲さんと欲する所を無制限に、又恣に、爲す事は出来るが、然し善惡共に其行爲の結果を避ける事は出来ない。善き行爲に對して善き結果を收め、惡しき行爲に對して、惡しき結果が生ずる事は、之れ即ち宇宙の大法である。國家は其行爲を選択する自由を有するけれども、然し其結果を選択する事は出来ない。譬へば日清戰爭後に露國が佛獨兩國と共に、其軍隊の優勢なるを恃みて、日本が正當なる條約に依りて清國より獲得したる遼東半島を還附せしめ、而して自ら代つて直ちに旅順其他の土地を租借したもの、後に至つて之が反つて日本國民

の反感を激成し、日露戦争を誘發すべき動機の一つとなつた。マ獨逸は其武力の強大なるを恃んで千八百三十九年のロンドン條約を破棄し、ベルギーの中立を蹂躪したけれども、之がためにベルギーの猛烈なる抵抗に出逢ひ、反つて英國に獨逸を攻撃する口實を與へたのみならず、國際的信義を重んずる國としての獨逸の信用は消滅した。而て斯くの如き不正行爲に對する因果應報は、時として一代又は一世紀の間に現れて來ぬ事もあるが、國家の長き生命中何時かは必ず現れて來るに相違ない。故に國家の活動の根本方針は内に對しても、又外に對しても、常に正義を確立する事であらなければならない。此點より觀る時は彼の國際聯盟の成立は實に重大なる意義を有する。國際聯盟の現状は尙頗る不完全である。私は現在の國際聯盟其者に對しては、敬意を拂ふ事も、又信用を置く事も出來ない。それは敬意を拂ひ、又信用を置くには、餘りに矛盾撞着に富んで居るからである。けれども國際聯盟の背後には過去數千年に亘りて全人類の最も優れたる階級に屬する人々の血涙を以て擁護せられたる國際正義の觀念が

實在する事を否認する事が出來ぬ。而して此國際的正義の觀念と、人類共存の倫理とを守り立て、其上に新世界を建設し、之を子孫に遺す事は現代人の世界文明に對する最高且つ最大の義務なりと信ずる。

四

前述の理由に依り、私は國家主義を信するけれども、而かも帝國主義を信する事は出來ない。何となれば眞の國家主義は其究極する所、即ち人類共存主義に一致するけれども、帝國主義の極致は、即ち一國家又は一民族の世界專制を目的とするからである。近代に於ける帝國主義の根本思想は、大體に於て之を唯物觀的及び唯心觀的の二種に區別する事が出来る。一はエドワード・グレイシー、ポール・ラインシュの如きを代表者となし、世界に於ける物質的勢力を最も利己的に活用する事を以て生存競争の勝者たる道程となし、他はジョーン・クラム、ポール・ロールバツハ等を代表として、

一切の現象の根底を精神生活に求め、偉大なる精神を有し、高度の文化を具備する國民のみが世界を征服するの資格ありと信するのである。然し兩者共に適者生存の原理を信じ、而して自ら其最適者たらんと努力する事に於ては即ち一である。蓋し國家の生活は個人の生活と等しく継続的變化を意味する。進歩か退歩か、常に二者其一を擇ばざるべからざる地位に居るのである。進歩を停止した國家は即ち既に退歩を開始した國家である。より充實せる生命を追ふて奮闘せざる國民は即ち既に滅亡に向へる國民である。帝國主義者が其生活の要求を貫徹せんとして全世界に活動し、全人類を敵とするをも辭せざる精神は實に偉大なりと云はざるを得ぬ。今日に至る迄世界文明が、或程度迄、帝國主義者の不斷の奮勵努力に刺戟せられて、進歩發展したる事は疑なく、此點に於ける功績は否むべからずと雖ども、然しそれが嘗に自己の生存權のみを主張し、自己の優越權のみを信じて、他の生存を無視し、他の個性を蹂躪して顧ざる所に大なる過失がある。何となれば世界は一國家又は一民族のために與へられたるものに

非ずして、全人類のために與へられたるものであるから、一國家又は一民族に依りて之を獨占せんとする結果は、必ず他の國家及び民族の抵抗、反感、復讐、戰爭を挑發せざれば止まざる事は歴史の教訓に徴して明白であるからである。是に於てか、今後に於ては嘗に唯物的帝國主義者のみならず、唯心的帝國主義者と雖も、其舊思想を一擲し、新なる人類共存の倫理觀を基礎として國家の進路を定めなくてはならぬ。故に日本民族にしても、眞に世界文明に貢献せんと欲せば、今後の外交は世界に於ける各民族及び各人種の生存及び自由を保障し、各民族及各人種をして各々其特性を基礎としたる新文明を建設するに必要な均等の機會を得せしむる事を根本方針とすべく、則ち歐米先進國の世界的帝國主義に求むることなく、新に世界的解放主義を以て全人類に臨むべきである。世界的解放主義が全人類に徹底し、總ての民族及び人種が各々其生存及び自由を保障せられ、其國土の大小と強弱とに拘らず、世界文明に貢献し、世界平和を擁護すべき均等の發言權を有するに至らなければ、眞の國際正義は確立さ

れない。此大なる倫理を提げて世界に臨む事が、即ち世界文明に對する日本民族の最
大使命である。(大正十二年六月稿)

三 帝國主義外交と其崩壊

——權力均衡時代と其資本主義的背景——

一

今日の世界に於ける重なる國々は單獨で活動しては居ない。必ず同盟か協商か何れかに依つて他國と共同に活動して居る。其重なるものは三國同盟、露佛同盟、日英同盟の三つであつて、而して此中最も古いのが三國同盟である。

三國同盟と言ふのは獨逸と奧太利と伊太利との同盟で、ビスマルク公の發意に依つて成立したのである。初めに獨逸と奧太利とが一八七九年十月七日に同盟をして、それに一八八二年五月二十日に伊太利が加入して、三國同盟が成立したのである。御承知の通り、普佛戰爭に於いて普魯西が佛蘭西に勝つた。其結果として佛蘭西人が獨逸

人に對して深刻なる復讐の精神を有つやうになつて、何時かは獨逸に復讐したいと計畫するに至つた。殊に佛蘭西はエルザス、ロートリンゲンの二州を獨逸に取られたのであるから何等かの機會に於いて二州を奪返さうと云ふ決心は強かつたのである。そこで獨逸は一方に於いて絶えず佛蘭西に對抗する丈けの防備をしなければならなくなつたが、それと同時に露國との關係も亦、甚だ面倒になつて來た。何故かといふに、普佛戰爭の當時に於いて獨逸は佛蘭西に對して全力を傾けて居たのであるから、背部が全く留守になつて居た。若し獨逸の背部から敵が襲うて來たならば、獨逸はそれを防ぐことが出來ない。此に於いてビスマルクは苦心の結果、露西亞に談判をして、獨逸が佛蘭西と戰爭をして居る間、露西亞は好意的中立をして呉れるやうに頼んだのである。露西亞の方では獨逸の頼みを入れ、普佛戰爭の間、全く好意的中立の立場を守つたのである。されば獨逸は露西亞を恩人として、普佛戰爭の濟んだ後には、何等かの機會に於いて其恩に報ゆるが當然である。然るにビスマルクは普佛戰爭に依つて佛

蘭西を擊破すると同時に、纏つて露國の勢力を壓迫しようと考えた。恰も一八七八年に伯林會議が開かれ露西亞が土耳其と戰爭をして締結せしめたサンステファノ條約を列國が認めるか認めないかと云ふ相談を爲したる時に、獨逸は露西亞に對し反對の態度を採り、露西亞をして其戰勝の獲物を吐出させた。當時ビスマルクは有名なる言葉を殘して居る。「露國はサンステファノ條約で自分の胃袋で消化することの出來ないほど澤山の食物を呑込んだ。其儘にして置けば、露國は食傷のために死ぬかも知れない。そこで露國の胃袋から食物を吐出させるのが即ち露國を救ふ所以である」と。而してサンステファノ條約に依つて露國が土耳其から取つた土地の大部分を取戻したのである。此の獨逸の態度に露國は非常に憤慨し、獨逸が佛蘭西と戰爭をして居る間、露西亞は好意的中立をして居つたに拘はらず、伯林會議に於いて其恩を報じないのみならず、却て露國が自ら戰爭に依つて得た土地迄も奪返すと云ふ事は實に心外であると大に怒つた。而して露國は土耳其と戰爭を終へて軍隊を引揚げては來たが、之を解散し

ない。其儘軍隊を獨逸の國境に集中して何時でも獨逸と開戦をすると云ふ態度を示したのである。

斯くなつては獨逸は一方に於いて佛蘭西の復讐に對する用意をすると同時に、他方に於いて又露國の襲撃に應ずる準備をしなければならなくなつて、實に腹背敵を受けたのである。そこでビスマルクは其危険状態から獨逸を救ふ爲め、に三國同盟を考へ出したのである。當時恰かも奥太利は獨逸の助けを得なければならぬ問題を持つて居つた。それは何かといふと、伯林條約の結果として奥太利はボスニア、ヘルツェゴビナ二州の委任統治權を與へられた。即ちボスニア、ヘルツェゴビナ二州を奥太利が支配するやうに列國から頼まれた。然るに此等二州には多數のスラヴ人が居る。露國人と同種なるスラヴ族が居るのであるから、絶えず露國が彼等を煽動して内亂を起させるのである。加ふるに奥太利の領土たるボヘミアにも多數のスラヴ人が居る。露國は此のボヘミアのスラヴ人をも絶えず煽動して内亂を起させる居る。乃ち奥太利はス

ラヴ人の内亂の爲めに、どうしても露國を押へなければ、國內の秩序を維持することが出来なかつたのである。斯ういふ時にビスマルクから同盟の相談を持掛けられたので、奥太利は直ちに之れを承諾して、一八七九年十月七日に獨逸同盟は成立するに至つたのである。

二

それに引續いて伊太利が其の同盟に加はつたのは如何なる理由であるか。これは不思議のやうに思はれる。御承知のやうに、伊太利人は佛蘭西人と同じラテン人種である。同じ人種の佛蘭西を助けないで、却つて人種を異にする獨逸と同盟を結んだのは、何か仔細がなくてはならぬ。如何にも之れには深い仔細がある。蓋し同じく伊太利と申しても、伊太利は細長い國で、南と北とが可成隔たつて居る。伊太利の政治家の中でも、北から出で、居る政治家と南から出で、居る政治家との間には、其思想や感情

に大なる差違がある。北から出で、居る政治家は一般に埃太利排斥黨で、南から出で、居る政治家は一般に佛蘭西排斥黨である。何故北から出る政治家が埃太利排斥黨で南から出る政治家が佛蘭西排斥黨であるかと言ふと、それには歴史がある。伊太利の北方にベニシヤと云ふ地方とロンバルデーと云ふ地方とがある、此等の地方は土地肥沃を以て聞えた所であるが、多年埃太利のために占領され居つた。然るに伊太利統一の時、佛蘭西人が来て伊太利人を援け、さうしてベニシヤとロンバルデーとの二地方から埃太利人を撃退して、之を伊太利に取返して呉れた。そこで伊太利の北方の人民は其關係を忘れないで、埃太利人を排斥し、佛蘭西人を歓迎するのである。之に反して南方は佛蘭西人を歓迎しない。何となれば南方には羅馬がある。ネーブルスと云ふ港がある。それからシシリと云ふ島がある。此等の土地は一體に羅馬法王の直轄して居つた所だから、伊太利統一の時に、羅馬法王は其統一を妨げんとした。佛蘭西は羅馬法王と同じ舊教を奉ずる國であるから、羅馬法王はナポレオン三世と相談をし

て佛蘭西から軍隊を借りて来て、此の南方の國々を征服せんとした。斯ういふ歴史があるから羅馬とかネーブルスとかシシリとか云ふやうな地方に屬する伊太利人は、非常に佛蘭西人を憎んで居るのである。佛蘭西人が羅馬法王を助けて伊太利人の自由を壓迫しようとしたのであるから、今でも佛蘭西人を排斥する精神が強い。而して却て佛蘭西人の敵たる獨逸人と接近せんとすると云ふ傾向を有つて居るのである。所がビスマルクが三國同盟を思ひ立つて伊太利に談判を仕掛けた時、伊太利の總理大臣はカイロリと云ふ人であつたが、これは北方から出た政治家で、埃太利排斥黨であつた。従てカイロリには獨逸に接近する考はなかつたのみならず、又非常に聰明な人であるから、ビスマルクが伊太利を仲間に入れて獨逸の道具に使はうとする意中を察して、容易にビスマルクの相談に乗らなかつた。然るにビスマルクは更に計畫を案じて、カイロリに斯う云ふことを申出た。伊太利から地中海を超えた對岸に、チュニスと云ふ所がある。(チュニスは今では佛蘭西の保護國であるけれども、其時分は何處

の國にも從屬して居なかつた。佛蘭西人が半分と伊太利人が半分ほど住んで居たのである。そのチュニスを取つたら宜からう、獨逸は伊太利がチュニスを御取りになる場合には十分の應援を致しますと云ふ事を申込んだ。何故斯う云ふことを申込んだかと申すに、若し伊太利がチュニスを取ると佛蘭西との仲が悪くなる。と云ふのはチュニスには多數の佛蘭西人が居るので、佛蘭西は長年チュニスを取らうと考へて居つた。それを伊太利が取れば屹度伊太利と佛蘭西との仲が悪くなるに相違ない。仲が悪くなれば直に伊太利を誘ふて來て獨逸の味方にする事が出来る。そこで先づ佛蘭西と伊太利とを仲違ひさせる目的で、伊太利に對してチュニスを取らんことを勧めたのである。乍併カイロリは聰明な人であつたから、能く其意中を讀んで、其相談に乗らなかつた。ビスマルクは伊太利と談判をしても駄目だと云ふことを發見するや、翻つて佛蘭西に向つてチュニスには多數の佛蘭西人が居ることであるから、チュニスを佛蘭西が御取りになつても、獨逸は決して異議を挾まない、出来る丈の應援をする

と云ふことを申込んだ。佛蘭西では長くチュニスを欲して居たのであるから、好機逸すべからずとして、直ちにチュニスを保護國としたのである。之れが一八八一年の事である。佛蘭西がチュニスを保護國とするや、之れを見たる伊太利人は非常に激昂した。さうしてカイロリ内閣の無能を彈劾した。カイロリ内閣がチュニスを占領して置けば、佛蘭西が占領する事は無かつたのである。伊太利が占領しなかつたから佛蘭西に奪はれたのであるとして、カイロリ内閣を彈劾し、遂に之れを顛覆した。そこで其後を受けて内閣を組織したのがデュプレテスと言ふ南方の政治家であつた。即ち佛蘭西排斥黨の首領である。此人が内閣を組織するに及んでビスマルクは非常に談判が容易くなつて、直ちに伊太利と相談が纏まり、一八八二年五月二十日遂に伊太利も亦同盟に加入し、所謂三國同盟は成立したのである。

如斯にして歐羅巴の中央に獨逸と奧太利と伊太利との三國同盟が出現した。茲に於いて露西亞と佛蘭西とは、遂に提携せざるを得ないことになつた。併しながら露西亞と佛蘭西との間には、同盟することの出来ない困難な事情があつた。其重なる理由は四つである。第一に露國は長らく専制政治を行つて居た。露國には議會と云ふものがない。君主專制の國である。然るに佛蘭西は夙に民主主義を奉じて、共和政治を行ひつゝある國である。そこで露西亞人は、共和政治を行つて居る佛蘭西と同盟すれば、共和政治を認めたとことになる。それは露國の國體を危ふからしむるから佛蘭西と提携は出来ないと考へた。佛蘭西も専制君主國と提携すれば、君主專制を認めたと譯になるから、佛蘭西としては露西亞と提携は出来ない。斯う云ふやうに考へたことが兩國の接近し得なかつた理由の一である。第二に露西亞は長らく獨逸の世話になつて居つた。何故と云ふに、露國には早くから虚無黨又は無政府黨と云ふものが居つた。此の虚無黨又は無政府黨が絶えず爆裂彈を投ずるか、暗殺を謀るとか、政府に對して危険な

ことをする。然るに露國の國內で之れを嚴重に罰すると直に之れが國境を越えて獨逸へ逃げて了ふ。斯ういふ事があつた爲め、代々の露國皇帝は獨逸に、國境を越えて獨逸に入つた虚無黨員又は無政府黨員を取締ることを依頼したのである。だから獨逸の反感を挑發すれば、獨逸に其取締をさせることが出来なくなる。其點から考へても容易に佛蘭西と同盟することは出来ない。第三に當時の佛蘭西は澤山の敵を有つて居つた。獨逸と反目せるのみでなく、チュニスを取つたので伊太利から敵視せられ、それから埃及を争ふて英國と衝突して居たのである。露西亞にして佛蘭西と同盟すれば、此等の國々を自國の敵とせざるを得ない。乃ち露國の安全の爲めには敵國の多い佛蘭西と同盟しない方が宜いと考へた。第四の理由はビスマルクの陰謀である。ビスマルクは絶えずいろ／＼な牒者を放つて、さうして露國の皇帝に向つて佛蘭西人の危険なことを説明した。佛蘭西人と提携すれば、彼等は共和政治の謳歌者であるから、自然露國に民主主義を輸入することになる。民主主義が輸入されて、露國に革命が起つた

場合に、佛蘭西は露國の革命黨を助けるに相違ない。現に米國が英吉利に對して反旗を翻した時にも、佛蘭西人は反軍を助けた。さう云ふ國と同盟をしてはならぬと云ふ事を宣傳したのである。之れが露西亞をして佛蘭西を恐れしめ、其提携に躊躇せしめた原因の一である。

如斯き種々の原因が重つて、三國同盟が成立したに拘らず、露西亞と佛蘭西は容易に提携しなかつた。然るに一八九〇年になつてビスマルクが獨逸政府から引退し、全く政治に關係しなくなつたと同時に、佛蘭西人と露西亞人との間にも段々意志の疏通をするやうな事件が次々に起つて來た。其事件は種々あるが、其重なるものを擧げると三つ四つある。而して其の三つ四つの理由の中には、日本の密接に關係して居ることもある。第一はバルカン半島の勃牙利に關した事である。勃牙利の國王アレキサンダー公がルーマリアを占領する野心を起した。所が露國は東ルーマリアを勃牙利に與へることに反對し、アレキサンダー公に其野心を放棄すべきことを勧めたけれども、

公はなか／＼承知しない。そこで露國は勃牙利人中に露國黨の軍人が居るのを幸として、その軍人を教唆して謀反を起させ、アレキサンダー公を宮中から放逐してしまつた。而して露國黨の軍人を以て假政府を組織せしめたのである。所がアレキサンダー公の臣下等は非常に憤慨し、早速佛蘭西に赴き、佛蘭西の政府に露國の横暴を訴へ、佛蘭西の政府から露國の政府に説いてアレキサンダー公を元の地位に還さしめんとした。然るに佛蘭西の政府は、斷然之れを勿付けて、アレキサンダー公が東ルーマリアを取らうとするのが誤つて居る。勃牙利は露國の保護に據り、其勸告に従ふべきであると説服して、其委員を追返してしまつた。斯ういふことが露國人を非常に喜ばしめた。佛蘭西は慥かに露國に對して同情を有つて居る。之れならば佛蘭西人と提携しても危険はないと考へるやうになつた。それだけではない。其後に露國の革命黨員が露國皇帝を弑する目的で佛蘭西の巴里に於て澤山の爆裂彈を造つたことがある。これを佛蘭西の警察が発見するや、其陰謀に關係した虛無黨員を悉く捕縛して、之を嚴重に

處罰した。こゝに於いて露國人は再び喜んだ。佛蘭西人は露國に於ける革命黨員を助けるものではない。露國の政府に同情して居ると考へた。斯くして段々露西亞の佛蘭西に對する誤解が解けて來た。加ふるに當時の佛蘭西にはホスキエルと云ふ大膽なる財政家が居つた。此人は非常な金持である。生れは丁抹人であるが、此人は獨逸と對抗するには露西亞と提携しなければいけない。それには金を以て兩國人を結付けるのが一番宜い。幸に佛蘭西を見ると、佛蘭西には金が澤山あり。金利が安い、露西亞を見るに大國ではあるけれども、金がなくて、金利が高い、それがために貧乏して苦しんで居る。そこで佛蘭西は露西亞に金を貸してやるが宜しい、斯う云ふことを考へて露西亞に安く金を貸すことを目的とするシンヂゲートを造つた。さうして先づ露國の政府に説いて、金利の高い公債を、金利の安い公債に借換させたのである。露西亞人は益々喜んで、財政上から言つても、佛蘭西に據ることが必要であると感じた。

四

斯う云ふことを感じて居る中に、更に重大なる問題が起つて來た。それは何であるかと言ふに、露西亞の極東政策である。御承知のやうに、露國は絶えず海に出たいと云ふ野心を有つて居る。露西亞はあゝ云ふ大國であるけれども、海に接して居るのは北だけである。そこで露西亞は南の、冬になつても凍らぬ港に出たいと考へて、幾度かバルカン半島に出でんとしたが、バルカン半島には英吉利が出さない。そこで波斯灣を視ふたが、そこにも英吉利が監視して居る。遂にアレキサンダー三世は、西比利亞を横切つて浦鹽斯德へ出るより他に途はないと考へた。アレキサンダー三世は非常な野心家であつて、西比利亞を横断して浦鹽斯德へ出ることを決心すると共に、一八九一年に西比利亞鐵道敷設委員會なるものを設けて、自分で其委員長になつた。一八九一年は、時の露國皇太子、今のニコラス二世陛下が、日本の大津に於いて、暴漢の

爲めに負傷せられた年である。陛下は天津に於いて遭難するや、直に日本を去つて浦鹽斯德へ行かれた。浦鹽斯德へ着かれたのは一八九一年七月であつたが、陛下の御着を期して西比利亞鐵道の起工式が行はれ、陛下は其起工式に臨まれ、手づから第一枕木を打たれた。同時に露都でもアレキサンダー三世が手づから枕木を打たれた。其東西の枕木を起點として、露西亞は西比利亞鐵道を建設し、浦鹽斯德から太平洋に出でんことを計畫をした。所がそれに付いて、どうしても佛蘭西と提携しなければならなくなつた。何となれば愈々太平洋に出れば、太平洋には英吉利の艦隊が居る。そこで英國艦隊と對抗する丈けの海軍を有つて居る國と同盟する必要がある。而かも英吉利の海軍と對抗し得る海軍を有するは只佛蘭西あるのみであつたからである。加ふるに西比利亞鐵道を完成するには多額の金が要る。此の金も佛蘭西から借りる他に途はない。即ち軍事上から言つても、財政上から言つても、佛蘭西の協力に俟たなければならぬことが明白になつて、爰に初めて露國は佛蘭西と同盟の決心をした。

露佛兩國の軍事協約が成立つたのは、一八九二年である。即ち佛蘭西が獨逸と戦ふ場合には、露西亞は背後から獨逸を撃つ、獨逸と露西亞とが戦ふ場合には、佛蘭西が背後から獨逸を撃つと云ふ、丁度三國同盟を中に挟んで之れを兩方から挾撃すると云ふ軍事上の計畫が成立した。之れは一八九二年のことであるが、併し此協約は未だ政治上に於ける同盟と云ふ程度のものには進んで居なかつた。然るにアレキサンダー三世が崩御せられ、ニコラス二世陛下が即位せらるゝや、新帝は露西亞の發展の爲めに佛蘭西との提携を一層親密にするの必要を認められ、即位せらるゝと同時に、親から巴里に赴きて談判の端緒を開いた。さうして遂に露佛同盟を成立せしめたのである。それが一八九七年のことである。恰かも三國同盟が出来てから十五年目に相當する。ビスマルクが畢生の力を盡して佛蘭西と露西亞とを分離して置かうとした其苦心も水泡に歸し、之が纏て世界戦争に獨逸の苦戦する一大原因となつた。

此二つの同盟、即ち三國同盟と露佛同盟、之れに次いで今一つ重大なるものは、即ち日英同盟である。日英同盟は、すつと後れて一九〇二年一月三十日に成立したのである。併し日英同盟の思想は、英吉利人の間にも、又日本人の間にも、餘程早く存在して居つた。明治三十一年に大隈伯が外務大臣であつて、今の外務大臣加藤男が駐英公使であつた時に、既に英國の殖民大臣であつたジョセフ・チャンバレンから内々日英同盟の相談があつた。其時から英吉利は日本と提携することの必要を感じて居つたのである。所が御承知のやうに、北清事件の際日本の軍隊は列國の軍隊と共に支那で戦争をして、非常に武勇の卓越せることを天下に示した。之を見た英吉利人は俄に日本と提携するの必要を感じた。若し日本と英吉利と提携しないときは、日本と露西亞が提携するかも知れぬ。英吉利は西藏を非常に大切に居る。之れは印度の北方に

境して居るのであるから、西藏に露西亞人が這入つて來れば印度は危險に瀕する。所が露西亞は支那の新疆に勢力を扶殖して來て、將に西北から西藏を襲はんとする有様となつて來た。南はといふと、佛蘭西が雲南から雲南鐵道を布設して、段々北に進んで來る形勢がある。之れを棄て、置く時は、露西亞は西北から漸次東南に進み、佛蘭西は雲南鐵道に依つて段々北方に伸び、遂に佛蘭西と露國とが連結することになる。さうすると南亞細亞の全體に涉つて露佛同盟の繩張りが出来てしまふ。斯うなれば、英吉利は西藏を失はなければならぬ。従て英吉利は露西亞の勢力の支那に及ぶことを非常に恐れたのである。所が日本も亦露西亞を恐れざるを得なくなつた。何となればアレキサンダー三世の計畫した西比利亞鐵道は益々延長して太平洋に出んとして居る。それが浦鹽斯德へ出るにしても、渤海へ出るにしても、朝鮮を取らんとするは明白である。何故かと云ふに、露西亞が浦鹽斯德へ出るとすれば、浦鹽斯德から太平洋に出るには、どうしても對馬海峽を通過するの外、途がない。對馬海峽を通過するに、朝

鮮が日本の領土になつて居れば、日本の領土の間を通過することになるから、危険之に過ぐるはない。そこで浦鹽斯德から太平洋へ安全に出る爲めには、どうしても朝鮮を露西亞の領土にして置かなければならぬ。又露西亞が浦鹽斯德へ出ないで、渤海から、即ち大連又は旅順から、太平洋へ出るにしても、旅順の直ぐ側の朝鮮に日本の艦隊が居つて、之れを監視して居つては、到底無事に太平洋へ出ることは出来ない。孰れの方面から太平洋へ出るにしても、朝鮮を露西亞のものにしなければ、安全に航海は出来ない。露西亞の極東に於ける發展は、結局朝鮮の侵略とならなければ止まないことが明白になつて來た。そこで日本も露西亞の勢力を支那から驅逐しなければならぬと考ふるに至つた。

さう云ふ次第で英吉利人の思想と日本人の思想が接近し來つた時に當つて、茲に獨逸人が現れて不思議な芝居を打つた。獨逸人は日英同盟の恩人である。何故と云ふに、露西亞がバルカン半島へ屢々現はれて、バルカン半島に勢力を扶殖しては、獨逸がバ

ルカン半島を横斷して印度に出でんとする政策上甚だ危険である。就ては露國人の注意を極東に向けて置きたい。それには日本と露西亞と喧嘩させるに限る。若し日本と露西亞と同盟をするか又妥協をすることになれば、露西亞は復たび歐羅巴に還つて來るに相違ない。そうなるに最も脅威を感じずるは獨逸である。そこで露西亞を何時迄も極東へ引留めて置かねばならぬ。それには日本一つに任して置いては、直ぐ負けて、直ぐ片付くかも知れない。英吉利を日本の同盟國にして、共々に露西亞に對抗させれば、露西亞は何時迄も極東の經營に忙殺せられ、遂に歐羅巴へ還ることは出來まい。斯う云ふことを考へて、獨逸は英吉利の政治家に對し、又日本の政治家に對して、盛んに運動をしたのである。之れは先頃薨去せられた林伯の遺書として發表されたものゝ中にもある。如斯にして獨逸が刺戟した爲めに談判が非常に早く進んだ。而して一九〇一年十一月六日に英吉利の外務大臣ランズダウン卿から日本公使に日英同盟の文書を見せて談判して來た。恰かも其頃伊藤公が露西亞を訪問に出掛けた。伊藤公が露

西亞を訪問するには、普通ならば英吉利に寄つて行くのが順序である。然るに伊藤公は何と思ふたか英吉利へ寄らなかつた。佛蘭西から直ちに獨逸を通過して露西亞に行つたのである。英吉利はそれを見て、之れは伊藤公が日本の密書を齎して日露同盟の爲めに露西亞に行くものにあらずやと考へた。露西亞でも日本と英吉利との間に談判が始まつて居ることは知らぬから、之れは全く日露同盟の文書を持つて來たに相違ない、日露同盟の使命を帯びて來たに相違ないと云ふので非常に伊藤公を歓迎した。英吉利は、之れはどうしても、日本と露西亞と接近する徴候であるを見て取つて、急いで日英同盟の締結をやつた。一九〇一年十一月六日に文書を示して、一九〇二年一月三十日に調印済になつた。如斯にして日英同盟は成立したのである。

六

さて三國同盟と露佛同盟と日英同盟、此三つの同盟が今日は世界外交の柱となつて

居る。唯此外に北米合衆國だけが、孰れの國とも同盟せず、全然孤立して居るが、北米合衆國は一八二三年以來所謂モンロー主義を標榜して、亞米利加人は亞米利加以外の國に干渉しない、其代り亞米利加以外の國は又亞米利加の事に干渉してはならないと云ふことを宣言した。之れは一八二三年十二月二日、時の大統領のモンローが議會に對して宣言した所から、之をモンロー主義と稱するのである。モンロー主義は即ち亞米利加は亞米利加人の亞米利加なり、舊世界の人々は新世界に干渉する勿れと云ふ主義である。そこで今日に至る迄亞米利加は孤立して居る。今日の外交上に於ける世界の大國は、即ち英吉利と露西亞と佛蘭西と獨逸と奧太利と伊太利と日本と北米合衆國とである。これが世界的の強國であるが、此中で日本と英吉利と同盟し、露西亞と佛蘭西と同盟し、獨逸と伊太利と奧太利と同盟し、而して米國だけが孤立である。此の四本柱が今日の世界外交を支へて居る。世界戦争は此四本柱を周ぐる列強の帝國主義的野心から發生した大活劇である。故に世界戦争の由來を明白にするには、此等の

列強を驅つて未曾有の大活劇を演せしめたる資本的帝國主義の實體を説明することが順序であらう。

七

御承知の通り、歐米諸國に於いては十九世紀の間に工業が非常に勃興して、それが爲めに富が著しく増加した。斯く富が増加した結果は金利が安くなる。そこで歐米諸國の資本家は自國の内部で金を貸付けても澤山の利子を取る見込がない。随つて何處か金利の高い所に資本を貸付けたいと云ふことを考へるやうになつて來た。けれども金利の高い所は貧乏な國である。貧乏な國へ金を貸せば、返さないかも知れぬと云ふ危険がある。だから唯金利が高いからと言つて、何處の國へでも、金を貸付けると云ふことが出来るものでない。此に於いて各國の資本家は何れも安全で而かも金利の高い所を見出さうとして苦心した。然らばどう云ふ所が一番安全で且つ有利である。か

と言ふに、それは殖民地に及ぶものはない。殖民地はまだ文明が發達して居ない。其經濟は幼稚である。随つて金利が高い。朝鮮に往つて御覽になればよく分る。朝鮮にては金利が非常に高い。故に金貸は朝鮮に行けば一番儲かる。然し經濟の幼稚な所では如何に金利が高くても、危険が伴ふから油斷が出来ぬけれども、殖民地は自分の領土である。そこで若し金が取れない時にも、自分の國の政府の力を借りて、何時でも之を取り返すと云ふ便宜がある。それから證文を書くにしても外國人に貸すならば外國の文句で書かなければならぬが、殖民地に金を貸すならば自國の言葉で書く。取引にも自國の金を使ふ。裁判所に訴へることがあつても自國の官吏に訴へる。自國の法律の支配を受ける。即ち總てが安全であるから各國の資本家は出來得る限り領土を擴張し、出來得る限り殖民地を造つて、其處に自分の金を貸付け、且つ其處に自分の商品の販路を擴張せんとする。而して之れがために政治家や、新聞記者や、其他の公人を煽動し又は買収する。これが總て各國政府を驅つて帝國主義に熱中せしむるのである。

埃及は英吉利の保護國である。併し埃及は英吉利の領土ではなくして、土耳其の領土である。それを英吉利が保護して居るのである。何故に英國が埃及を保護するかと云ふに、之れは借金の爲めである。埃及の王にイスマイル・パシヤと云ふ人があつた。イスマイル・パシヤは非常に勇敢な人で、盛んに四隣を征伐したけれども、其勝利に誇つて、或は宮殿を築き、或は劇場を造り、或は土木を起し、一代の間に凡そ十億の借金をした。勿論、彼は返すことが出来なかつた。其十億を誰が貸付けたかと言ふに、英吉利と佛蘭西との資本家である。此等の資本家は、イスマイル・パシヤと直接に談判をする丈けでは到底金を取戻せない。之れは本國政府を動かして埃及政府に談判をさせる外途がないと考へて、兩國の資本家は合同して本國政府に援けを求めた。本國政府は直に其請を容れ、イスマイル・パシヤに向つて埃及の財産は英吉利と佛蘭西との

監督を受くべきことを要求した。イスマイル・パシヤにして其要求を拒絶すれば英吉利と佛蘭西とは財産を差押へに来るに相違ない。そこで已むを得ず、承諾を與へたのである。爰に於て英吉利と佛蘭西との政府からは代表者を送つて埃及財政の監督を行ふことになつた。如斯にして英吉利と佛蘭西との代表者が來て埃及の財政を監督して居るに拘らず、一方に埃及の國王は依然として盛んに金を使ふ。只監督をするだけでは、取締も、整理も出来ない。そこで英吉利と佛蘭西の政府から改めて埃及に對し、其内閣は埃及と英吉利と佛蘭西との三國人を以て組織すべきである、三國人の合同内閣でなければ財政の紊亂を救ふことは出来ないと主張した。之れが有名なる埃及の國際内閣である。時に一八七八年である。

國際内閣が出来る、埃及人中の愛國者は非常に怒つて、一國の政府を外國人に渡すとは何事であるか、之れは埃及を滅すものであると言つて、外國人排斥運動を起したのである。此運動は埃及全國に擴がつて、到る所多數の外國人が殺された。茲に於

いて英吉利と佛蘭西とは大いに激昂し、一八八二年に英吉利と佛蘭西との聯合艦隊はナイル河口のアレキサンドリア港を砲撃するに決した。然るに將に英吉利の軍艦と佛蘭西の軍艦とがアレキサンドリア港に達せんとした時に、佛蘭西の政府は俄然方針を變じた。それは今英吉利と共に埃及を攻撃すれば、埃及人は英吉利と同じやうに佛蘭西を惡むに相違ない。若し佛蘭西だけ攻撃に加はらず、英吉利だけに攻撃をさせて置けば、埃及は佛蘭西と提携するやうになるに相違ない。さうなれば埃及は佛蘭西のものである。斯様に考へて、俄に態度を一變し、佛蘭西の軍艦だけ引揚げてしまつた。爰に於て英吉利は單獨にてアレキサンドリア港を攻撃し、更に陸戦隊を上陸せしめ、埃及の暴動を鎮定してしまつた。之れが自ら列國をして埃及を英吉利の保護國とすることに傾かしめた。何となれば埃及人が暴動を起して外國人を殺すと云ふ時に、佛蘭西は之れを鎮定しないで引返した。所が英吉利は獨力で其暴徒を鎮定した。故に埃及の秩序を維持するには英吉利に依るの外ない。之れは當然の結論だからである。それぬのである。

九

が端緒になつて遂に埃及は英吉利の保護國となり、而して今日に及んで居るのである。故に埃及が英吉利の保護國になつた根元は、即ち英吉利と佛蘭西との資本家が本國政府の應援を得て埃及に貸付けた金を取返さうとしたことに在る。資本の産物に他ならぬのである。

又南阿戰爭はどうして起つたか。之れが矢張りセシルローズと云ふ資本家の計畫から出たのである。南阿弗利加はダイヤモンドと金との産地である。一八六七年にオレリと云ふ一人の和蘭人が、ケトプロコニートの北にあるグリツカトランド・ウエストといふ所に居る友人を訪問した。すると其友人の小供が奇麗な小石を澤山集めて來て「オハジキ」をして居る。オレリが其石を見ると、凡て奇麗な光を發する。そこで其石は何處にあるかと、小供に訊ねて見ると、其邊に一杯あるといふ。彼れは試みに

其一つをケイプタウンに居る鑑定家に見て貰つた。所が紛れもないダイヤモンドで、それをケイプコロニーの總督が五百ポンド即ち約五千圓で買上げることになった。之れが抑も南阿非利加でダイヤモンドの發見された初めである。さて其事が一度世間へ知れると、多數の人々がダイヤモンドを採掘するために集まつて來た。有名なるセシル・ローズも亦、皆と一所にバケツを提げ鍬を脊負つて採掘に來たと云ふことが書いてある。斯様に多數の人々がグリツカーランド・ウエストの土地に集まつて來たが、元來此地方は野蠻人の居る所であつて、其國籍さへも分明でなかつた。そこで英吉利政府は直に其土地の會長に金をやつて、此土地を買取つて了つた。而して之を英吉利の領土とするや、直ちに其所に多數の會社を起させた。此等の多數のダイヤモンド會社を悉く一纏めにして、一つの大ダイヤモンド採掘會社を組織したのが、即ちセシル・ローズである。彼は之れに依つて非常な富をなした。けれどもセシル・ローズはグリツカーランド・ウエスト地方でダイヤモンドを採掘するだけに満足したい。更にトランス

ヴァールの方面にもダイヤモンドが出ると云ふので、其方面にもポツ／＼資本を下して、ダイヤモンド採掘を始めた。然るに一八八二年になると、トランスヴァールからダイヤモンドのみでなく、又金が出ることも分明した。そこでセシル・ローズは其金をも悉く採掘せんとして、澤山の英吉利人を其地方へ送り込んだ。之れがため今のカリフォルニアに於ける日本人排斥問題と同じものが起つて來た。

之れは私共に取つて興味のあることである。當時トランスヴァールを支配して居たのは誰かと云ふに、和蘭人である。之れをポリア人と云ふ。ポリア人は盛んに英吉利人が這入つて金を採掘せんとするを見て、之を防禦するがため斯う云ふ規則を出した。和蘭に歸化して公民権を有せざる者は、土地を所有することを禁ずと云ふのである。丁度米國カリフォルニアで、米國の公民権を有せざる者に土地所有權を禁じたと同じである。日本政府は大して小言を言はなかつたが、英吉利政府は非常に怒つた。英吉利人は這入つても這入らないでも宜しい、土地所有權を英吉利人のみに禁ずることは、

英吉利を侮辱するものである。苟くも和蘭人に與ふる權利は、之れを英吉利人にも平等に與へよと、要求したのである。然しトランスヴァールでは、英吉利人に土地所有權を與へれば、必ず英吉利人が鑛山の採掘權を獲て、事實に於て、トランスヴァールの金を獨占することは分つて居る。故に斷然それを拒絶した。其時にセシル・ロイズはケープコロニーの總理大臣であつたが、彼は自分の配下に居る同志ジェームソンと云ふ者に命じ、五百人ばかりの勇士を引連れてトランスヴァールへ侵入せしめた。それが端緒となつて遂に英吉利とトランスヴァール間に戦争が起つた。即ち有名なる南阿戦争である。此の戦争は一八九九年十月十一日に始つて一九〇二年五月三十一日に終り、約三ヶ年續いたのであるが、其結果としてトランスヴァールは全く英吉利に占領されてしまつた。斯う云ふ事になつた本は即ちセシル・ロイズである。セシル・ロイズがダイヤモンドを採掘し、更に金山を採掘せんと欲するも、外國の政府では仕事が出来ないから、トランスヴァールの政權を強奪し、以て安全に仕事をしたいと考へ

て、遂に此戦争を惹起したのである。併しセシル・ロイズ自らは此戦争の終らない中に死んだ。彼は有名なる言葉を殘して死んで居る。“much to do, little is done.” 即ち「爲すべきは多く、爲し遂げたるはなし」と嘆息した。けれども兎に角南阿戦争は、近代に於ける資本的帝國主義の挑發したる最も顯著なる實例として不朽の生命を持つて居る。

固より南阿戦争には別の理由が一つあつた。元來南阿弗利加の土地は、英吉利に取つては、所有して居らなければならぬ大切な土地である。今日は何れの國家でも、殖民地を取つたならば、其殖民地に行くべき通路は、出来るだけ之を安全にするに努むる。例へば日本が朝鮮を持つて居つても、朝鮮と日本との中間にある對馬と壹岐とかが、露西亞人か英吉利人のものであれば、なか／＼朝鮮は安全でない。臺灣にしても、琉球が外國のものならば、決して安全でない。従て何處の國でも、一つ殖民地を得たならば、本國から其殖民地に行く途中の要所々々を占領せんとする。英吉利は印度を有つて

居る。印度は英國の寶庫であるから、英吉利は印度への往來を安全にせんが爲めに、途中の要所々々を占領して居る。先づ地中海の西端にジブラルタルを占領し、其中央にマルタ島を占領し、其東端にサイプラスを得、更に進んで埃及を保護國とした。埃及を保護するは、スエズ運河の支配を確實にするためである。スエズ運河を通過して少し南に行くとペリムと云ふ島があるが、之れも占領して居る。尙ほ南下してアラビヤ海に出ればアデンを占領し、アデンから更に南下してスマトラを占領し、キュリアムリア群島に添ふて東すれば、自然に安全に印度へ到着することが出来る。所が此道筋は何時敵に奪はれるか知れない。英吉利の海軍が強ければ此道筋は維持されるが、一朝英吉利の海軍が敗北すれば敵に奪はれる危険がある。奪はれた場合には、第二の通路として阿弗利加の南端を回航して印度へ行かなければならぬ。それが爲めに南阿弗利加の土地は何としても英吉利に必要である。此處へ外國人の勢力を入れる事は許さぬ。これ殖民大臣ジョセフ・チェンバレンがセシル・ローズと相呼應して一戦を賭するも、尙南阿弗利加に英吉利の勢力を打立てんとした所以である。故に南阿戦争の直接の動機はセシル・ローズの資本主義とチェンバレンの帝國主義との結合に在りと云ふことが一番正しい。

十

墨西哥問題も、其根本は何處にあるかと云ふと、即ち石油問題である。墨西哥に於ては一九一一年までヂアスと云ふ人が三十年に亙つて大統領になつて居た。然るにヂアスは亞米利加の資本家が盛んに墨西哥に入り、到る處に跋扈するを見て非常に心配し、何等かの方法を以て亞米利加の資本家を墨西哥から放逐したいと考へた。而してそれには英國及び佛蘭西の資本家を招いて競争をさせるが一番であるとして、米國の資本家に對抗するやうな大資本家を英國及び佛蘭西から招致した。墨西哥の鐵道は從來は専ら亞米利加の資本に依つて布設せられて居つたのであるが、其鐵道を一萬二千

キロメートルばかり政府に買上げた。而して其買上げた鐵道の半分を政府に保留し、残りの半分を墨西哥人の鐵道會社に譲渡してしまつた。然も其墨西哥人の鐵道會社の資本は實に英國から出て居たのである。次に墨西哥の石油の採掘權を米國人から奪取することを考へた。全體墨西哥は石油の産地である。殊に墨西哥の東海岸にタンピコと云ふ港があるが、此港の近邊だけでも六十四の油田がある。然るに墨西哥に於ける石油の採掘權は米國のスタンダード石油會社が獨占的に之れを與へられて居たのであるが、ヂアスは一九一〇年にスタンダード石油會社から其採掘權を奪取つた。さうして其一部分を英國の大資本家たるロード・カウドレーと云ふ人に譲渡した。そこでロード・カウドレーは三百萬ポンドの資本で石油會社を起して盛んに米國石油會社と競争を始めたのである。斯うなると米國の資本家はヂアスを大統領の地位から放逐しなければ米國人の資本の安全を期することが出来ない。爰に於て當時の墨西哥に於ける有力な政治家であつたフランシスコ・マデロに應援して謀反を起させたのである。フランシ

スコ・マデロは一九一一年米國の資本家の應援を得て謀叛し、遂にヂアスを放逐して代つて大統領になつた。マデロは親米派の大統領であつたから、米國の資本家は大變に仕事がいふくやつて來た。彼等は墨西哥に對して復たび盛んに資本を卸したのである。所がマデロの爲めに放逐せられたヂアスの甥に一人の勇敢なる男があつて（矢張其名をヂアスといふ）此男が一九一二年から同志を驅集めてマデロの政府を顛覆する計畫を起した。而して遂に一九一三年二月になつてマデロを暗殺した。暗殺するや、直ちにウエルタと云ふ人を假大統領にしたのである。ウエルタはマデロに反對の人であつたから、勿論米國にも反對の政治家である。そこで勢ひ英吉利人と提携して、米國の資本家を再び放逐すると云ふ計畫を起すやうになつた。同時に英國の資本家も亦盛んにウエルタに應援した。何のために應援したかと云ふと、英吉利の資本家は南北兩米の到る所に於いて米國の資本家に壓迫されて居つた。初めロード・カウドレーが先づコロンビアに於て石油の採掘權を得た。それから引續いてホイトマン。

ピヤソンが(之れも英吉利人であるが)、同じくコロンビヤに於いて石油採掘権を得た。それが一度知れ渡ると、北米合衆國政府は非常に異議を唱へた。米國はモンロー主義を唱へて居る。南北兩米共に米國人以外の者が投資することを許さない。英國人の投資はモンロー主義の精神に背くから米國は承認することは出来ぬと云ふのである。そこで已むを得ず、ロード・カウドレーもピヤソンも、共に一度得た石油採掘権を抛棄してしまつた。さうしてコロンビヤから一切手を引くことになつたのである。斯様なわけで英吉利人は非常に米國人を怨みに思つて居たのであるから、ウエルタが勢力を得ると共に、英吉利の資本家は協力してウエルタを應援することとなつた。然うなると米國政府としては一日も早くウエルタを廢しなければ、米國の資本家の勢力を墨西哥に於いて維持することが出来なくなる。それ故に米國政府は、ウエルタを攻撃して云ふた。ウエルタは人をしてマデローを暗殺せしめて自分が大統領となつた。暗殺をして大統領の地位を奪ふが如きことは憲法政治の精神に背反する。憲法政治の精神に

背反するやうな大統領は之れを認むることは出来ないと言言した。而して米國は墨西哥に對し、ウエルタが大統領で居る間は絶対に墨西哥と國家としての交際は出来ないと言ふことを申込んだ。さうして密にカランザと云ふ墨西哥人に金を與へて、ウエルタの政府に對する謀反を起させた。其戦争が今日に至る迄續いたので、此頃の新聞で御承知の通り、ウエルタは遂に大統領を辭して墨西哥を去つたのである。斯様に墨西哥に於ける最近の動亂も亦、其原因は、石油に對する英米兩國の資本家の競争に存するのであつて、此競争の存する限り、恐らく墨西哥の内亂は絶えないのであらう。

十一

斯う云ふやうに、歐米の大資本國は互に帝國主義的野心を逞ふし、各々其勢力を擴張するがために同盟を組織し、偶々其勢力が相伯仲して所謂權力均衡時代となつたが、權力均衡に依て僅かに維持する平和は、眞の平和でないのみならず、歐洲諸國に

於ては種々な陰謀を用ひて、其平和を破らんとする者が居るのである。

第一に歐羅巴が比較的平和になると、茲に困る所のは兵器製造人である。即ち軍艦大砲を造るが如き兵器商人である。之等の商人は天下が亂れなければ利益を得ることは出来ない。茲に於いて彼等はいろ／＼な陰謀を以て歐羅巴の外交界を攪亂しつつある。其實例として最も有名なるは、クルツプ事件である。クルツプ事件と云ふは一九一三年獨逸議會に於いて社會黨議員リトプクネヒトと云ふ人の演説が抑もの起りである。彼は獨逸のクルツプ會社が國會議員を買収し、新聞記者を買収し、軍人を買収して、盛んに軍備擴張論を天下に擴め、而して議會に軍備擴張案を提出せしめ、それに依つて兵器製造の大注文を引受けよう云ふ大仕掛の陰謀を起したことを曝露したのである。此事件が曝露したに就いて、獨逸の政府も放任して置く事が出来ないで關係者を拘引した。其拘引せられた關係者の中陸軍軍人が七名居た。そして七名共にそれ／＼處罰された。それからクルツプ會社の重役であつたエツキウスと云ふ人と伯

林代理店長マックス・ブランドと云ふ二人は、孰れも贈賄罪で處罰されることになつた。元來クルツプ會社はなかく歴史のある會社で、フリードリヒ・クルツプと云ふ人に依つて造られ、當初は極めて小さなものであつた。一八六六年普埃戰爭終るや、ビスマルクは早くも次に來るべきは普佛戰爭なるを察し、フリードリヒ・クルツプに命じて多數の大砲を鑄造せしめんとした。然るに其時のクルツプ會社はまだ至つて小さく、其命令の全部を奉ずることが出来なかつた。今日は實に大きなもので、技師だけ五千人、職工は六萬人から居る。世界に於ける最大なる兵器會社の一であるが、當時はまだ極めて小規模である。且つ獨逸の銀行も幼稚であつたから、資金を融通する途もなかつた。そこでビスマルクがウキルヘルム一世に願ふて、御手許金五百萬ターレ即ち約七百五十萬圓を出して貰つて、それをクルツプ會社に補助金として與へた。これに依つて大仕掛に大砲を造り、さうして佛蘭西と戰爭をしたのである。故にクルツプ會社は、創立の始から獨逸の皇室に關係がある。獨逸皇室はウキルヘルム一世の

時代からクルツプ會社の株主であり、從て獨逸の有力者が多數關係した。現に獨逸の陸軍大臣の兄弟が二人クルツプ會社の役員になつて居る。海軍大臣の兄弟も這入つて居る。そのみでなく、今のクルツプ會社の社長は、フォン・グントと云ふ陸軍大將の息子で、陸軍部内に澤山の友人がある。斯ういふ關係から、軍事上の秘密は直ぐに分る。そこで軍人と相通して軍備擴張を行はしめるには非常に便宜が多い。

加ふるに盛んに新聞記者を買収する。而してその買収の方法が又頗る面白い。決して澤山の新聞を買収しない。例へばデー・ポストと云ふやうな、金に依つて言論を左右する新聞を買収して、盛んに軍備擴張論を書かせる。佛蘭西が攻撃して來るとか、露西亞が軍備を擴張して居るとか、色々なことを書いて、獨逸も亦速かに軍備擴張をしなければならぬと云ふことを議論させる。固より其議論は餘り獨逸の國內では尊重されぬ。詰らない新聞であるから、獨逸では大して人が注意しない。併し外國人はこの新聞の報導が眞實でその新聞の報導が眞實でないかと云ふことはよく分らぬから、

さう云ふ議論が出る。直に之を外國の新聞が翻譯する。佛蘭西とか露西亞とかの新聞が之れに對して評論を書く。獨逸に於いて軍備擴張をなさんとして居る。故に我國も軍備擴張をなすべし、と云ふやうな事が出る。すると其佛蘭西や露西亞の新聞に表はれた軍備擴張論を今度は獨逸の一流の新聞が轉載する。さうして獨逸一流の新聞が佛蘭西や露西亞の軍備擴張論に對して又對抗的に軍備擴張論を書く。そこが即ち會社の重役のえらい所で、さう云ふ一流の新聞が軍備擴張論を書くやうになると、それによつて國民を煽動して軍備擴張をさせる。さうして軍備擴張案が議會を通過すると、其註文をクルツプ會社が引受けるのである。

殊に面白いことは、陸軍部内で新しく軍器の發明をした軍人があると、クルツプ會社は手を廻して其軍人を辭職せしめる。そして其軍人をクルツプ會社の技師長とか機關長と云ふやうなものにする。之れがために大きな手當をやる。或人の調べた所に依ると大抵一年に八萬馬克から十萬馬克の給料を與へるさうである。だから大抵の軍人

は辭職してクルツプ會社に這入つてしまふ。すると其人の發明した軍器はクルツプ會社に頼まなければ出来ないといふことになる。如斯にして總べての軍器の註文がクルツプ會社に集まつて來る。斯う云ふやうに、大仕掛に軍人を買收し、國會議員を買收し、新聞記者を買收して、軍備擴張熱を鼓吹せしめ、さうして軍備擴張案を通過せしめ、すべての註文を引受ける。其關係が曝露されて、有名なクルツプ事件となつたのである。

然しそれはクルツプ會社のみでない。佛蘭西の或雑誌は、今度佛蘭西の政治家で兵器商人から金を貰つて、軍備擴張案を提出するやうに運動した人々の名前を出して居る。何某は若干の仕事を引き受けた。何某はどの會社と關係があると云ふことを一切曝露した。佛蘭西の兵器製造會社も亦、非常な金儲けをして居る。佛蘭西に於いて獨逸のクルツプ會社に對抗するやうな會社はクラツプフ會社であるが、此會社の収益は驚くべきもので、年々二割の配當をして居る。歐羅巴で二割の配當は、驚くべきである。

歐羅巴の一等國の公債は大抵三分乃至三分五厘位な金利であるのに、二割の配當をするのは、非常な収益のある證據と云はなければならぬ。會社は又別に三千萬圓の積立金を有つて居る。從て此會社の株券は非常に騰貴して、最近の相場を見ると、始め百四十五圓の株券が今日は八百八十圓に賣買されて居る。如斯く兵器商人は、色々の手段を盡して、軍備擴張に努め、之れが各國に於ける惡感情を挑發して、益々各國の軍備擴張を促し、何れの國と雖も、軍備擴張費に窮せざるはない。今日に於ける世界の軍費は實に年々五十億圓の多き上つて居る。若し五十億圓の大金が人類の幸福を進めるが爲めに用ゐられるならば、如何に大なる効果があるか知れない。然るに五十億の大金を投じて擴張したる軍備は、平和を保障し、人命を防禦する力なく、今や却て平和を脅威し、人命を傷害し、帝國主義の大破産と共に、全人類は未曾有の大災難に遭遇した。この大災難から全人類が救ひ出さるゝのは何時のことか知らぬが、少くとも列強が各々帝國主義を固執し、他の獨立自由を蹂躪するを意とせざる間は、眞の世

界平和は不可能である。帝國主義的欲望のために出現した列強相互の同盟關係に依つて辛ふじて維持せらるゝ權力均衡は、又帝國主義的欲望のために破裂し、崩壊する運命を免かれざることは、今度の世界戦争そのものが何者よりも雄辯に之を立證するものである。知らず、帝國主義、人類を葬むる乎。抑も又人類、帝國主義を葬むる乎。

(大正四年七月稿)

四 世界米化主義と世界文化主義との 對立としての日米問題

米國人は、大體に於て、西洋諸民族中、最も生活慾の強烈なる、最も冒險性の優れた、そして最も競争力の旺盛なる人々である。従て米國の歴史は一方に於て各個人の生存及び自由に反する一切の制度を打破して其生活慾に徹底せしとする自由革命の歴史であると同時に、他方に於て米國人自身の生活の理想及び様式と相容れざる一切の異人種を排斥し、南北兩米の全土は云ふ迄もなく、進んでは全世界をも自己の生活目的に化せんとする膨脹主義の歴史である。コロンビア大學のギディングス教授は、其有名なる民主的帝國主義論デモクラチック・インペリアルイズムに於て、民主的帝國主義の可能を論じ「凡そデモクラシーと

エンバニアとは全く相反せる兩箇の現象にして、デモクラシーはエンバニアの廢墟にのみ之を建設し得べく、エンバニアの建設は又直ちに自由の破壊を意味するが如く思惟するは一般の傾向なりと雖も、吾人は今日デモクラシーとエンバニアとが同時に共存し、相俟つて發達しつゝあを事實を目撃す。即ち各國は一方に於て其生活の様式、立法の精神、及び社會の制度等に於て年々民主的傾向を増加しつゝあると共に、他方に於て或は新領土を合せ、或は將來新領土となさんと欲する地域に諸種の複雑なる帝國的行政を施し、以て益々其國民的生活を擴大せんとす。今やデモクラシーとエンバニアの結合は試験時代を過ぎて完成時代に入り、所謂民主的帝國主義の有機的實現を觀んとするに至れり。』と云ふて居るが、若て民主的帝國主義とも稱し得べき最も顯著なる實例を求むれば、ギディングス教授自身の屬する米國こそは確にそれであると思ふ。

米國の獨立は千七百七十六年であるが、當時米國の國土は尙未だ東部十三州に限ら

れ、其面積は合計約三十三萬五千方哩に過ぎなかつた。それが左の如き勢を以て擴張せられ、今日では實に三百七十一萬三千方哩を越ゆるに到つたのである。

革命當時

一八〇〇年	三三五・四六六方哩
一八〇〇年	八八二・一三五方哩
一八五〇年	二・九九七・一一九方哩
一九〇〇年	三・七一一・一三三方哩

今日は一九〇〇年に比べると更に約五百方哩を増加して居る。米國人は屢々日本人を評して侵略民族なるが如く云ふけれども、安ぞ知らん米國人自身こそは確に侵略民族中の最も雄なる者であつたことを否認することは出来まい。

二

米國は既に斯くの如き大國であるにも拘はらず、米國人は猶ほ其膨脹の欲望を絶ち

得ない。米國は國際聯盟の規約中特にモンロー主義を公認する一ヶ條を挿ましむる事に努力し、遂に之に成功した。斯くの如き努力は、世界は人類の世界たらざるべからずとの精神を基礎とする國際聯盟の本義に反する事は云ふを俟たぬのであるが、然も國際聯盟の發議者たる米國自身が其の本義を無視して、尙且モンロー主義を公認せしむるに努めたと云ふ事は、米國が南北兩米の統制に關し如何に強烈なる欲望を有するかを曝露するものである。モンロー主義の根本思想は人類活動の地方的封鎖であつて一種の封建思想に過ぎぬと云ふ事は、米國人中に於ても正直なる學者は既に之れを自白して居る。エール大學教授ビンガム博士は所謂ラテンアメリカのオーソリティーとして著名な學者であるが、同博士が先年公にした「モンロー主義論」に於ても、明白にそれが世界文明の大勢に對する逆行である事を認めて居る。而してモンロー主義者が「南北兩米の各國家は地理上の位置、自然的同情並びに其政體の類似に依りて、互に商業上並びに政治上の友邦たり。又同盟國たるべきものなり。」と云へるを駁撃し「斯

くの如き議論は事實と一致せず、何となれば南米の最大國たるブラジルはニューヨーク及びニューイングランドよりもスペイン及びホルトガルに接近し、フロリダ洲の最南端キーウエストとリオデジャネーロ及びブエノスアイレスとの距離は反つてジブラルタルとの距離よりも遠く、バルバライソ、サンフランシスコ間の距離はバルバライソ、ロンドン間のそれよりも更に遠ければなり。従て自然の同情心と云ふも亦何等の根據あるに非ず。南米人より之れを見れば今日のモンロー主義は實に一種の負擔たるのみならず、南洋の事情を知らざる米人が強ひて南米の監督者たらんとする事は反つて南米の爲に有害無益なり」と云つてゐる。メキシコの前大統領ウエルタ氏も亦米國がモンロー主義の名に依り南北兩米を壟斷せんとするに憤慨し、嘗て英國のデーリイ、テレグラフの記者に向つて「モンロー主義は既に其目的を遂げたり、ラテン共和國が猶ほ未だ幼稚にして獨立し能はざる時代に於てモンロー主義は能く其獨立を保ち其發達を助けたりき。然れども今やラテン共和國は既に發達したるが故、強ひて之れ

を昔日の如く他國に依りて監督し、又訓練せんとする事は、反つて諸種の困難を惹起すべし、殊に米國の如く武力を用ひ、支配的精神を以て干渉を試むる場合に於て、特に其弊害の甚だしきを見る」と云ふたのである。米國に非れざば眞にラテン・アメリカを保護し其發達を扶くるものなしと云ふが如きは、英人中動もすれば英國海軍のみは如何に強大なるも世界の平和を威嚇することなしと云ふ者あるに等しく、世界に通用せざる議論である。然かも米國は、其世間に通用すると否とを問はず、益々モンロ主義の徹底を期し、今や米國の南方の國境は、事實に於てメキシコとの境界線ではなく、パナマ運河の一線に在りと云つても差支へない。南米に於ては近年A・B・C同盟即ちアルゼンチン、ブラジル、チリーの三國同盟を作り以て米國の勢力に對抗せんとする目論見があつたけれども、斯くの如き同盟の力に依つて果して米國の膨脹力に抵抗し得べきや否やは、頗る疑問である。

殊に注意すべきは米國が南方に延ぶると共に、又北方にも膨脹せんとする強大なる

本能を包藏して居る事である。先年の大統領選挙に當り、タフト氏は米加互惠條約を締結せんとする本國政府の眞意に就き、自己がルーズベルト氏に宛てた秘密の信書を公開されたのであるが、其書翰には明にカナダに對する欲望を表示したのであつた。勿論之より先と雖も米國議會に於ては屢々カナダ合併すべしとの演説が繰り返されたのであるが、タフト氏の書簡は此欲望を最も明瞭に表示したものであつて、其文中「米加互惠關稅條約締結の結果遂にはカナダをして米國の一屬領地たらしむるに至らん」とあり、ルーズベルト氏も亦之に答へて「余は經濟上、政治上の理由に依り、カナダと互惠關稅條約を締結する事に賛同す」と云ふたのであつた。此書翰が一度發表せらるゝと共に英國及びカナダに於ては非常なる物議を醸し、殊にルーズベルト氏が政治上の理由に依りて賛同すと云ふ事は大に英國人の惡感を招いたのであるが、斯くの如き事實に徴しても、米國人が今尙ほモンロー主義に執着し、唯に之を南方に對してのみならず、更に北方に對しても、徹底的に實現せんとする傾向を有することは明

白である。素より米國が一方は於てモンロー主義を主張すると同時に、他方に於て米國も亦米大陸以外の大陸に於ける出來事に對し絶対に干渉せざるならば稍々恕すべきであるが、米國自身は他國にモンロー主義を公認せしめんと努力し、而も米國自身は世界各國の出來事に干渉する權利を主張したのであるから、米國の態度には、明白に論理上の矛盾があつた。

三

此アリアン種中最も生活慾の強烈なる、最も冒險性の多い、そして最も競争力の旺盛なる米國人が、大西洋文明時代より更に進展して太平洋文明時代を建設せんとするに際し、偶然にも太平洋沿岸を其郷土とするアジア民族中最も生活慾の強烈なる、最も冒險性の多い、そして最も競争力の旺盛なる日本民族に直面したことは、日米双方の不幸であつた。殊に日米兩國民が著しく其生活の理想及び様式を異にして居ると云

ふ事が、更に其不幸を大ならしめたのであつた。

米國太平洋岸諸洲に於ける排日運動は其由來する所頗る複雑である。其原因は大體に於て是を(イ)社會的(ロ)經濟的(ハ)政治的の三種に區別しなくてはならぬ。社會的原因とは生活の理想及様式に於ける日米兩國人の相違である。アリアン人種は古來主として遊牧生活を營み、絶えず移住した人種であるから、自ら其間に民主主義の思想が發達した。殊にクリスト教の感化が其傾向を一層顯著ならしめたのであるが、それが米國に渡るに及んで最も自由なる新社會の建設となつて現れたのであつた。然るに日本人の祖先は早くより農業に生活し、一定の土地に居住し、夙に家長の命令に服従する所謂忠孝主義の社會倫理を理想として、生活して居たのであるから、其生活の理想及び様式に於てアリアン人種中最も自由なる發達を遂げた米國人と互に理解し、互に調和する事は容易でない。

經濟的原因中最も顯著なるものは米國勞働者對日本勞働者の賃銀競争であるが、大

體に於て日本労働者が米國労働者に比して、勤勉且つ従順であるのみならず、低廉なる賃銀に甘んずると云ふ事は争ひ難き事實である。是に於て米國労働者は到底生存競争に勝利を得る能はざることを知つてこれを排斥するに至つたのである。だから日本労働者が米國労働者の労働組合に加入し、米國労働者と同様の労働條件を以て労働に従事すれば、米國労働者が日本労働者を恐るゝ必要はないのであるが、米國労働者は人種上の理由と、自己の仲間が多数になると云ふ事は勞力の供給を増加し、賃銀の騰貴を圖るに不便であると云ふ理由とに依つて日本労働者を労働組合に加入せしめないのである。蓋し一方に於て日本労働者の入國を適當の數に制限すると共に、他方に於て日本労働者を米國労働者と均しく労働組合に加入せしむれば、左程恐るべき事でないに拘らず、彼等が飽く迄日本労働者を排斥せんとするのは其思想の根底に人種反感が蟠つて居るからであらう。現に私が先年桑港労働組合總務ポール・シャールンバーグ氏に何故日本労働者に加盟するを許さぬかと質問した時の如きも、同氏はそれは感情

問題だから別段理由の説明は出来ぬと云つた。

これ丈の原因が錯綜する丈でも太平洋岸に於ける排日運動は激烈ならざるを得ないのであるが、更は之に政治的原因が加はつて愈々火の手が盛になつた。政治的原因とは何であるかと云ふに、國民の投票を得て、或は元老院とか或は代議院に地位を占めんとする議員候補者が、労働者の投票を求むる目的を以て、盛に日本労働者の排斥を叫び、以て一般労働者の歡心を得んとする事と、故は船舶業者とか、故は貿易業者の手先となれる議員や新聞雑誌記者が政府より保護金又は奨励金を支出せしむる目的を以て日本の經濟的争鬭の危険を誇大に吹聴する事である。今キャリホルニヤ州に於て日本人排斥の主謀者は、フィラン、インマン、バーカー、ネーラン等であるが、フィランは加州選出上院議員であり、インマン、バーカー、ネーランは共に加州議員である。又先に山東問題を提げて頻りに日本を罵詈譏しつゝありし上院議員も總て太平洋沿岸諸洲の選出代議士である。即ち著名なるハイラム・ジョンソンは加州選出議員で

あり、ウィリアム・ボラーはアイダホ州選出議員であり、マイルス・ポインデックスターはワシントン州選出議員であるが、是等の事實に依つて觀ても、所謂排日問題の裏面に政治上の理由が伏在する事は疑ないのであつて、是等の煽動政治家が存在する限り、排日運動なるものは益々複雑なる關係を生ずる事は蓋し避け難き所であらう。

然し之と同時に米人中に於ても人種的偏見打破の正論がないではない。現に加州に於てもスタンフォード大學名譽總長ジョルダン博士及び加州の名望家はして且雄辯家なるアイリッシュ大佐の如きは熱心なる排日運動の攻撃者であつたのみならず、加州知事ステイブソン氏及びフレズノ・リバブリカン紙主筆にして加州の有力なる政治家たるチエスター・ローエル氏の如きも亦出來得る限り排日運動を擴大せしめざることに努め、日本人の待遇を現状以上に悪化せしめざることを希望して居ると傳へらるゝ。又サンフランシスコ附近のキリスト教會が聯合して今春以來排日運動の鎮壓に苦心し、委員を設けて其方法を研究したのみならず、各教壇よりも正論を鼓吹する申合せをし

たと云ふが如き報道もあるのであるから、我官民の代表者が是等の勢力と呼應して加州に於ける排日論の根據を覆すべき大運動を試みることは、焦眉の急であると思ふ。最近鈴木文治氏が二三度米國の労働組合を歴訪しただけでも、米國労働者と意思の疏通を計る上に於て從來の外交官以上の仕事が出来たことは大に鑒むべきである。

元來排日運動は普通的外交問題と異なり、客觀的事實よりも寧ろ主觀的推定を主要なる基礎として居るのであるから、普通的外交上の懸案の如く仲裁や判や戦争等に依つて一氣呵成に解決し得べきものでない。従て米國人の日本人に對する誤解及び反感の基礎たる主觀的推定を打破する事が眞の根本的解決である。従て其打破の方法が法律的又は軍事的に非ずして、倫理的及び教育的であらねばならぬのは、自然の順序と云ふべく、従て其根本的解決に到達する迄に多大の時日と多大の努力とを要すること亦實に止むを得ない。蓋し排日問題の解決如何は實に世界米化主義對世界文化主義の勝敗を決すべき大問題だからである。

凡そ一代の文明を指導する如き國民の間には、常に一代の思想を指導する如き大哲人がある。希臘が起り、初めて歐洲文明の基礎を確立したるは紀元前五世紀乃至四世紀の事であるが、之より前希臘の思想界は、既にミレイトス、エレア、ピタゴラス及ソフィイストの諸學派を産し、殊にソクラテス、プラトーン及アリストテレス等の出づるに及んで、希臘哲學は其全盛時代に達した。此等の大哲人が嘗に希臘のみならず、又世界に於ける一般人心の傾向、希望及信仰を決するに偉大なる勢力を有したるは、歷史上争ひ難き事實であつて、西洋古代の思想史は殆ど全く希臘思想史である。中世より近代に涉り世界文明を指導する地位に立ちし英吉利、佛蘭西、獨逸等の諸國なるが、此等の諸國も亦孰れも一代の思想界を指導する大哲人を産出した國々である。例へばトーマス・ホッブスの如き、デビット・ヒュームの如き、ジョン・ロツクの如き、ゼ

レミー・ベンサムの如き、ジョン・スチウアート・ミルの如き、又ハーバート・スペンサーの如き、此等は單に英吉利の大思想家たるのみならず、又世界の思想家である。殊に所謂經驗學派の發生及進歩は主として英吉利の功業であるから、英吉利の思想史を知らざれば、世界の思想史を解する事が出来ない。佛蘭西は十七世紀の頃既に歐洲の大國として世界に雄飛したけれども、其文明上に於ける最も重大なる時期に到達したるは佛蘭西革命以後である。即ち佛蘭西革命の炬火は、獨り佛蘭西に於ける専制政治のみならず、又全歐洲に於ける専制政治を覆滅せんとする勢を以て蔓延した。那翁戰爭に際し、戰場に於て佛蘭西の軍隊を撃破したる英吉利及東歐羅巴諸國も、佛蘭西より侵入し來る自由革命の思想に敵する能はず、或は民主國となり、或は立憲政治を起し、ために歐洲文明は一新紀元を劃したのである。而して佛蘭西が世界文明史上に如斯き大業をなしたる所以のものは、モンテスキュー、ヴォルテール及ルツソーの如き思想家が相次で出現したるに由る事大なるは勿論である。者し夫れ獨逸に至つては

文藝復興時代より既に哲學勃興の氣運を有し、殊にカント出づるに及んで所謂批評哲學の新見地を開き、世界哲學を全然未見の境地に導いた。世人は一時獨逸の帝國主義を非難し、之を以て卑近なる領土的欲望の發現に過ぎざる如く解したりと雖も、之は決して正解でない。固より多數の獨逸國民中には單純なる領土的野心よりして帝國主義を信じた者もあつたであらうが、少くとも獨逸國民を指導すべき地位にありし人々は、ニイチニヤ、トライチケヤ、ベルンハーディー等の帝國主義哲學に心酔し、獨逸文明の世界的優越に關する一大信念を有したるは事實である。此信念が獨逸國民の血となり、又肉となり、獨逸國民を驅て今度の大戰に見たるが如き驚天動地の大活動に出でしめたのであつた。而してニイチニヤ、トライチケヤ、ベルンハーディー等の帝國主義哲學も、又決して偶然に起りたるにあらず、其思想の背後にはフイヒテヤ、シエリングヤ、ヘーゲル等の大哲學者あるを争ふ事は出来ない。即ち其強き自我の觀念は、此等の十八世紀後半より十九世紀前半に輩出したる理想主義哲學者の思想に於て既に其萌芽を見た。殊にフイヒテが萬物の根元を我に歸し、我は靜かなる一個の存在にあらずして、實は活動其物なりとしたる思想は、自ら帝國主義哲學の論理的前提を成したのである。如斯く孰れの國民に於ても、偉大なる活動の背後には偉大なる思想があり、燦然たる文化の根底には、必ず獨自の哲學がある。

五

此點より見る時は、米國は未だ眞に世界文明を指導する地位に達して居ない。蓋し米國は其建國が比較的新しきのみならず、其國土は所謂新開地にして、國民の多數は出稼人若くは出稼人の子孫であるから、單に哲學のみならず、文學でも、又藝術でも、其發達の幼稚なるは已むを得ぬ。今日の米國には、英吉利哲學とか、佛蘭西哲學とか、又獨逸哲學とか云ふと同じ意味に於ける米國哲學なるものは未だ存在しないのである。固より米國に於ても、今後文明が發達し、社會が進歩すると共に、哲學思想も變

遷し、遂には米國獨特の哲學を産するに至るであらうけれども、今日まで米國哲學者として知れたる者の多くは、唯に外國の思想を借り來り、之に部分的修正を加へて米國の社會状態に適合せる學説を立てたと云ふに過ぎぬのであつて、未だ他の學者の主張したる事なき獨創的思想を出すに至らない。エマーソンは米國の代表的思想家である。彼が十八世紀の終りから十九世紀の初めに亘りて米國に存在したる諸種の思想に嚴正批評を施し、米國思想を改造したる功績は蔽ふべからずと雖も、然もエマーソン自身の思想は、其獨創にあらずして、多く古代希臘の思想である。プラグマティズムは一見革命的哲學と見ゆるが、之も其實は舊來の英國經驗論の稍進化した變形に他ならぬ。現にウィリアム・ジエームス自身も其著「プラグマティズム」に於て其學は新しき名稱を有する舊き思想に過ぎざる事を自白して居る。米國人は米國を以て民主主義の大本山の如く吹聴するけれども、民主々義に關する哲學者でも、決して米國に於て顯著なる發達を遂げて居ない。米國に於て民主々義に關する眞摯なる大著作と云へば、

ド・トクイキールの「米國に於ける民主政治」及ジエームスの「米國共和政體」の二つであるが、前者は佛蘭西人であり、後者は英吉利人である。土着の米國人中に於ても、或はゴツドキンとか、或はモーゼスとか、或はギツディングスとか、或はエリオットとか、或はローウエルとか、民主々義に關する哲學的又は科學的考察を試みた者がないではないが、執れも未だ國民思想を指導するに足る權威を以て許す事は出來ない。従て米國人の民主々義的理想には不徹底なる所頗る多く、唯自己の經濟的利益と一致する場合に於てのみ之を承認するけれども、苟くも自己の經濟的利益に反すれば、直ちに之を捨て、顧みざる傾向がある。

六

固より米國人は、常に進化しつゝある。彼等は西洋人中最も動的であつて、日進月歩せざれば止まざる國民である。殊に其大多數は歐洲人で、其歐洲人の性格に潜んで

居る能力が、米國に獨特の自由なる境遇に刺激せられて次第に發展し、遂に歐洲より出で、然かも歐洲文明に見る能はざる新文明を建設しつゝあるのであるから、必ずや將來は文明史上に於ける大國民となるに相違ない。然かし今日の米國人は尙未だ新文明建設の途上に在りて其政治上並びに生活上に於ける理想の如きも、何等一定の確立したるものなく、大統領は屢々天下に宣言して民主々義を唱ふと雖も、其所謂民主々義なるものが獨立戰爭時代の單純なる政治的民主々義なるや、將た又進んで經濟的民主々義をも包含するものなるやに至つては、恐らく大統領自身も之を決し能はぬであらう。今日の米國政治家は屢々嶄新なる名詞と雄麗なる形容詞とを以て其行動を辯護すと雖も、其思想に至ては未だ資本主義と勞働主義、帝國主義と民族自決主義、白人專制主義と機會均等主義、強力主義と人道主義の十字路に彷徨し、米國自身が思想界の迷兒たる状態を脱し得ないのである。故に今日の米國を以て強て世界文明を指導せんとせば、偶々以て世界文明を米國自身の文明と同様の矛盾、撞着及び錯亂に陥るに

過ぎないであろう。現在のまゝの米國は、人類の指導者としては餘りに無理想であり、世界平和の擁護者としては、餘りに帝國的である。ニイチエは嘗て良心を論じ「人間の殘酷なる本能が外に向ひて他を虐待する能はざるより、内に向ひて自己を虐待せんとするもの之れ良心なり。」と云つた。私は今爰に、ニイチエの良心論の是非を論ずるのではないが、少くとも最近に於ける米國の殘酷なる本能は、内に向ふよりも寧ろ外に向つて居る。而して其殘酷なる本能の向ひつゝある真正面に立つは日本である。日本は日本自身の生活のためにも、又全人類の生活のためにも、米國、殊に其太平洋岸諸州の人々を、世界米化主義の舊思想から世界文化主義の新思想に向上せしめ、且つ徹底せしむるに大努力を要する。(大正十年一月稿)

五 光は東方より

—

亞細亞は人類の生存競争の最初の舞臺であつたと共に恐らくは最後の舞臺である。歴史を大観すれに世界に三個の文明の主流がある。第一は支那文明、第二は印度文明、第三は歐洲文明であるが、大體より論ずれば、ヨーロッパ文明は印度文明と同じくアリヤン人種の文明に屬する。印度ヨーロッパ人種の郷土に關しては學者間議論の存する所であるが、其多くは中央亞細亞のバクトリヤ地方と認めて居る。彼等は太古遙遠なる時代に於て人口繁殖の爲か或は外敵の襲來の爲か大移動を初めたのであつた。而して其一部は西方裏海の南岸よりアルメニア及小亞細亞の地を経て歐洲に入り、他の一部は南方ヒンズークーシユ山脈を越へてインダス河を渡り、バンジャブより天竺半

島に南下して印度の古代民族となつた。故に印度の文明とヨーロッパの文明とは其根本に於て一つであるが、唯だヨーロッパに入れるアリヤン人種は其移動の途中に於て或はセミチック人種の文明から多大の影響を蒙つたのと天竺半島に南下したアリヤン人の文明は熱帶地方に獨特の色彩を發揮したのとで兩者は全く特異の發達を遂げた。支那の原始民族に就ては學者の議論區々にして今尙ほ一定しないけれども、其最古民族と稱せらるゝ舊族にしても、其舊族を追うて支那本部の全土に蔓延したるバーク族にしても、又早くより黒龍江、松花江の流域に生活した古代の肅慎、近世の清等の祖先と稱せらるゝツングス族にしても、凡そ亞細亞に固有の民族であつて、其文明の或點に於てはセミチック人種の文明に共通し、或點では印度文明にも接觸せる形跡はあるが、併し何れの文明にも同化せられず自ら獨特の文明を建設して今日に至つた。故に世界に於ける文明の三大主流は共に其源を亞細亞に發したことは疑ひなく、隨つて亞細亞は人類の故郷なると共に又世界文明の發源地である。

然るに今や人類文明の中心は其搖籃たる亞細亞を云つた。亞細亞に生れて亞細亞に留つた印度文明と支那文明とは共に中途に停滯して未だ亞細亞以外の天地に其光明を放つに至らず、反つて亞細亞より出で、ヨーロッパに入れるアリヤン文明の一支系が今日の世界を光庇し全人類を左右する状態となつた。

固より支那人も文明史上に於ては印度及びヨーロッパの諸民族に多く劣らざる貢獻をした。老、莊、孔、孟の如きは世界文明史上に於ても屈指の大思想家である。形而下の學術でも、其進歩著しく、彼の印刷術、羅針盤、陶器、火藥等の發明が支那人に負ふところ多きは云ふ迄もない。けれども支那人は内的生活に關する研究よりも外的生活に關する研究に重きを置きしため、其思想には概して西洋哲學の精緻なく、印度哲學の深遠を有せず、或點に於ては淺薄の嫌あるを免れぬ。殊に中世以後の支那の學

者は單に古書を読むを以て能事とし、深く宇宙の本源に遡り廣く事物の理法を究むるを怠つたので、其知識は畢竟するに老、莊、孔、孟の範疇を脱せず、ヨーロッパ民族の不斷の進歩に對抗して新文明を開拓すること不可能となつた。

印度文明は外的生活よりも寧ろ内的生活の研究を中心としたる事に於て支那の其れの正反對である。マックス・ミュラー博士は『古代印度人ほど自我の研究につとめる人種なし』と云ふたが。印度人は實に自我の研究の爲めに人生の大部分を費した。併し彼等は外的生活を顧るには、あまりに自然の寵兒にして外部の刺戟を受る事が少かつた。彼等は熱帶に生活し燃料の必要なく衣類の欲求なく食物の缺乏を感ずること少なく、悠悠として大自然の懷ろに安居した爲め外部生活の爲めに苦勞する必要がなかつた。故に内部生活への省察は如何なる他民族よりも徹底したけれども其内部生活に於て發見したる新らしき自己を基礎としたる新らしき外部生活の創造を怠つた。畢竟するに古代印度人の人生觀は幽玄にして且つ高尚であつたが世界より分離したる生

活に於て其意義を發見せんことのみを力め、自己の理想に基きて世界を建設せんとする行爲そのものゝ價值と意義とを無視した點に於て大なる弱點があつた。彼等があまりに自己の内部生活の省察に忙はしく、遂に外部の世界に對する抵抗力を失ふに至つた結果、其領土は印度文明の價值を理解せざる他民族によつて征服せられ、其征服者の爲めに印度文明の大いに發展すべき機會をまでも蹂躪せられたのである。

勿論、支那文明にしても亦印度文明にしても、亞細亞以外の天地に何等の影響を與へなかつたのではない。支那文明は或は匈奴のローマ侵入により、或はジンギスカンの西征により、或は旭照兀クライグの小亞細亞の攻略により、間接直接に歐洲文明に影響を與へたことは頗る多い。印度文明も中世以後に於てアラビア人を経て歐洲文明に感化を與へたことは少くない。けれども支那文明にしても、又印度文明にしても、僅かにヨーロッパ文明に或る程度の影響を與へたといふに止り、ヨーロッパ文明を支配するが如き大なる力を發揮することが出来なかつた。人類の生存競争史上に於て支那人及び印

度人は遂にヨーロッパ人の敵ではなかつたのである。

亞細亞に屬する人種にしてヨーロッパ文明に最も大なる影響を與へたのは支那人及印度人よりも寧ろセミチック人種であらう。此人種の郷土は古來世界の三大宗教の搖籃である。即ちモーゼもモハメッドもキリストも共にセミチック人種に屬し、其唱道したるユダヤ教、回教及キリスト教は何れもヨーロッパ諸民族の文明に一大影響を及ぼした。

古代ヨーロッパの諸民族は主として遊牧を業としたる蠻人の群に過ぎず、其宗教の如きも幼稚なる多神教の域を脱しなかつた。而も其肉食の爲に感情は猛烈にして鬪争を好み、各部落は互に土地と婦人との策奪をこれ事とする状態であつたが、幸にしてセミチック人種間に三大宗教が起り、特に其三大宗教中最も進歩せるキリスト教がヨーロッパを風靡するに至れることは實にヨーロッパ諸民族の一大幸福であつた。

然るにヨーロッパ諸民族を救へるセミチック人種自身はアリヤン人種の如く移住を

好まず。一定の土地に定住して異なる風土と異なる文明との間に於て其肉體及精神を鍛練する機會を有しなかつたゆゑに、反つて自ら衰滅するの運命を招いた。斯くして亞細亞は人類の郷土であり、又文明の搖籃であつたに拘らず、其郷土に固定したる人種は其種族も、其文明も、共に萎靡し反つて郷土を出で、世界に放浪したるヨーロッパ諸民族と其文明とがやがて揮圓球上に蔓延し、全人類を支配する大勢力となつた。

三

中世紀以後の世界歴史は大體に於てヨーロッパの歴史である。中世以後に於て世界を支配したる大國はスペイン、ホルトガル、フランス、オランダ、イギリス、ドイツ等であるが、何れもヨーロッパ民族ならぬはない。

第十五世紀末ローマ法皇は當時の植民的大帝國たりしスペインとホルトガルとが互に其發見したる土地を争はん事を豫防する爲め、アフリカの西海岸を沿うて南北にわ

たる一線を劃し其西方をスペインに其東方をホルトガルに與ふべきを約した。此は法王の獨斷に過ぎぬけれども、當時既に世界の他の部分にはヨーロッパ諸民族と其文明を競ひ得るもの殆どなく、世界の大部分はヨーロッパ人の分割せんとする儘に分割され得たのであつた。當時支那は明朝の初期で國威稍々張つて居たが、印度に至ては或は回教徒により或はヨーロッパ民族により其領土を縦横に分割せられ、其支配權は事實に於て、印度文明を理解し能はざる他民族の手に歸して居た。斯くしてヨーロッパ文明は世界を支配すること約四五紀に及んだのであるが、今や此ヨーロッパ文明は、其内部より崩壊せんとする重大なる危機に到達したのである。

昔ローマはヨーロッパ、アフリカ、及び亞細亞に誇がる大帝國を建設し、ローマ文明は世界を風靡した。然るに多年に亙れる大戦争の爲め、ローマ人の強壯なる血液は消失し、財力は衰へ、道徳も亦紊亂して其文明の根柢に腐蝕を生じ、一度蠻族の侵入に遇ふや、恰も枯木の微風にも堪へざる如く遽然として倒壊した。現代のヨーロッパ文

明も亦、世界戦争の爲め昔日のローマにも劣らざる大打撃を受けたのである。ヨーロッパ諸國は其敵味方の何れたるを問はず、共に莫大の強壯なる血液を失ひ、國富を費消し、更に社會道德の頹廢を招いたのであつて、其文明の根柢に動搖を生じ、容易に之が恢復を望むべからざる事に於て、正に昔日のローマに彷彿たるものがある。

眼を轉じて米大陸を見るに、米國も今次の大戦に参加はしたが、其参加したる時期は比較的遅く、其参加の程度も亦比較的淺く、随つて殆ど打撃らしい打撃を受けて居らぬ。否、反つて戦争の爲めに從來散漫なりし國民的自覺は深刻となり、海陸軍は擴大せられ、富力に於ても亦戦時中にヨーロッパの各交戦國に對し軍器、軍需品を賣込みたる結果、戦前に比して著しく増大した。故に米國は恰も血氣盛んなる若武者が甲冑を提げ武具を取り悍馬に跨つて將に出陣せんとするに際し、遽かに休戦喇叭の鳴り響くを聞けるが如く脾肉の嘆に堪へざるものがある。米國は今やヨーロッパ諸國の疲弊せるに乘じ、其國內に累積したる富を提げて遙かに太平洋を渡り、十五世紀以

後ヨーロッパ諸民族の寶庫たりし亞細亞大陸に資本的膨脹の新天地を求めんとしつゝある。

ヨーロッパ諸民族中猶ほ大なる未來を有するは、恐らくスラブ民族であらう。スラブ民族が大なる未來を有するは、單に其民族が他のヨーロッパ民族に比し獨創性、眞實性及び偉大性に富むと云ふだけでなく、其領土がヨーロッパより亞細亞に跨り、他のヨーロッパ民族の領土に見る能はざる大富源を藏するからである。獨逸が將來復活せんとするも、スラブ民族と提携し其大富源を開發し得るにあらざれば、其目的を遂ぐることは出来まい。現に獨逸人中に於ても、アルサス・ローレンの鐵礦とザールの炭坑とを佛蘭西に奪はれ、シレシアの炭礦地を波蘭に與へざるべからずとせば、獨逸は寧ろ其領土の全部を聯合國の處分せんと欲する儘に放棄し、獨逸人は露西亞に入りて其大富源の開發に従事し、露西亞人と共に再生の方法を講ずるを得策とすと唱へる者がある程度である。英國が勞農政府を承認することを欲せざるに拘らず、尙且つ勞農

露國と通商協約を締結せざる能はざるに至りしも、露西亞の大富源を自國の藥籠に收め、これより食料及び原料の供給を受くるにあらざれば、到底米國との經濟競争に堪ふる能はざることを悟つたからである。將來獨逸の技術と英國の資本とによつて露西亞の大富源が愈々開發せらるゝこととなれば、露西亞は必ずヨーロッパ諸國中最も強大となるに相違ないが、然し露西亞の大富源と稱するものはヨーロッパに於けるよりも寧ろ亞細亞に於て顯著なのであつて、其大部分は亞細亞に屬すると云ふて差支ない。だからスラヴ民族の勃興と云ふよりも寧ろ亞細亞の勃興であると云はねばならぬ。殊にヨーロッパに於ては從來輿地利以東を亞細亞と看做し「亞細亞は維也納の郊外より始まる」と云ふ諺もある位だから、スラヴ民族の勃興は懸て亞細亞文明の復活である。

米國及露西亞と相並んで大なる未來を有するは日本である。日本が日清、日露及び日獨の三大戰に於て發揮した實力は、日本國民が如何に強大なる彈力性を有するかを

遺憾なく立證した。假ひ他國が如何に日本の勃興を抑壓せんとするも、日本の亞細亞大陸に扶植したる勢力を根絶することは不可能である。他國が如何に日本と競争するも、支那其他の亞細亞民族は、結局日本を以て最も安全にして且必然なる亞細亞建設の協力者と認むる時が來るに相違ない。

此等の狀勢より考ふれば、世界に於ける政治的及び經濟的活動の立役者は結局米國と露西亞と日本とに歸せんとする傾向ありと云ふべく、而してこのアメリカ及びアジアの兩大陸を根據地とする米、露、日三ヶ國の生存競争は、勢ひ其舞臺を太平洋と其沿岸の各大陸とに求むることとなるべきは必然である。獨逸の地理學者カール・リツテルは世界文明史を三期に分ち、第一期は河川文明時代、第二期は内海文明時代、第三期は大洋文明時代であると云ふた。コロムブスの亞米利加發見、及びヴァスコ・ダ・ガマの喜望峰廻航と共に世界文明は所謂大洋文明時代に入つたのであるが、それでも其中心は尙未だ大西洋を出でなかつた。然るに世界戰爭を轉機として、今や人類の歴史

は太西洋文明時代より太平洋文明時代に移らんとして居る。將に華土頓に開かれんとする所謂太平洋會議は、この新時代の到來を暗示する一個の象徴である。

四

米國共和黨の
弗外交

米國の太平洋會議に對する態度は、如何に美麗なる言語を以て修飾せうるゝとも、其根本精神が資本的帝國主義であることは疑ひない。米國共和黨の歴代の外交は所謂『弗外交』である。米國の人口は既に一億を超え未曾有の高率を以て増加しつつあるが、其領土は約三百七十萬方哩に達し一平方哩の人口僅に四五十人に過ぎず、加ふるに其國內に於ける賃銀の高價は世界無比であるから米國としては國外に新領土を求めて米國人のために移住地を設くる必要は全然ない。而かも尙且つ布哇を併せ、グワム島を獲得し、ヒリツピン群島を領有し、尙支那に勢力を扶殖せんとして糾々たるは何故か。それは國內の製造業に對する販路と資本に對する有利なる放資地とを求めて止まぬ

からである。然らば米國の外交は米國資本の要求を根底とせることは一點疑ふの餘地なく、世人が之を呼んで『弗外交』と云ふは至言である。即ち其國內に於ける資本主義は、臆がて又外交上に於ても資本的帝國主義となつて表現するのである。

米國の外交上の用語は窮極に於て二ツに歸する。即ち一はモンロー主義であつて、一は機會均等主義である。モンロー主義に之を南北兩米に適用する。南北兩米は共に未開發の大富源にして未だ歐洲諸民が何等の既得權をも確立せざる處女地である。故に此處女地に對しては常にモンロー主義を標榜し、米國以外の勢力を排斥するに努めて居る。然るに亞細亞大陸に至つては十五世紀以來ヨーロッパ各國民のために四分五裂せられ、新に米國の勢力を扶植すべき餘地を存せぬ。如此き場合に當つて各國の既得權を顛覆し、他國と對等の地位に立つて經濟的活動を開始せんと欲すれば、先づ聲を大にして機會均等主義を叫ぶに如くはない。是れ米國が亞細亞の如き舊大陸に對しては門戶開放を唱へ、機會均等主義を叫ぶ所以であるが、米國の所謂モンロー主義と

equal opportunity

モンロー

機會均等主義とは、其根本思想に於て共通なるものがあることは云ふを待たぬ。

歐米諸國の中に、資本的帝國主義に宣戦を布告して居るのは、勞農露國である。本年七月二十六日英國の外務大臣カーゾン卿は、上院に於て宣明して『英國は全然波斯より撤退するの餘儀なきに至れり』と云ふた。これ一般の英人にとつては青天の霹靂であつたが、英國は遂に波斯に於ける資本的帝國主義を放棄せざるべからざる時が來たのだ。そは何故かと云ふに、勞農露國の宣傳の力に對抗することが出来なくなつたからである。本年二月二十六日勞農露國と波斯との間に新條約が締結された。この條約に於て、勞農政府には波斯政府に對し露國が帝政時代に英國と共に波斯に迫りて獲得したる一切の特權を放棄し、且つ從來波斯に於て露國の經營したる鐵道、電信、電話、船舶、造船所、棧橋等の一切を舉げて之を無償にて波斯に返還すべきことを約束した。過去十有餘年英、露兩國のために其國土を所謂『勢力範圍』に分割せられ、殆ど自主權を失ひたる波斯人が勞農政府の提議に接して欣喜雀躍したるは當然と云ふべく、

この勞農政府の大膽にして且つ徹底せる民族自決主義の前に立つては、流石の英國と雖も、又其の帝國主義を固執し能はざるに至つたのである。

昨年三月勞農政府は支那に對しても、略ぼ同様の提議をした。即ち帝政時代より獲得したる一切の特權を放棄し、東支鐵道を返還し、團匪の亂に關する倍償金の殘額を請求せず、治外法權を徹廢し、且つ損害賠償の意味に於て在漢口露國製茶所をも無償にて支那に提供すべしと云ふのである。この提議は他の列國に對する關係上直ちに支那の同意するところとならなかつたけれども、それが支那の歎心を買ひ、露支接近の端緒となつたことは疑ひない。

然し勞農露國が亞細亞諸國に對して試みたる大膽にして且つ徹底せる民族自決主義の提唱が果して勞農露國の眞意に出でたるや否やに就ては、尙疑問の地餘がある。何となれば最近露國の共產黨が英國、佛蘭西、エストニア等に對する態度を見るに、他國の被支配階級又は無産階級を煽動して革命を起さしめ、以て全世界を國際共產黨の

天下となさんとするが如き野心の存在を疑はしむるものがあるからである。革命的帝國主義を以て資本的帝國主義に代ふるも、それは唯帝國主義の手段を一變したに過ぎぬ。帝國主義其者から全人類が解放せられざる限り、眞の世界平和は不可能である。

五

凡そ偉大なる民族は總て偉大なる信念を有する。日本民族は如何なる信念を持すべきか。私は或人の如く日本民族が亞細亞諸民族の盟主となり歐米人と天下の覇權を爭ふが如きことを日本民族の天職と信ずることは出来ぬ。復讐の時代は既に去つた。歐米人が亞細亞を侵略したることの不正なる如く、亞細亞人が歐米人の領土を侵略せんとすることも亦不正である。加ふるに歐米人はアングロサクソンやラテンやゲルマンや其他幾多の民族に分れ居れども、其文化の根元に至つては一である。彼等は何れも同一のアリアン人種に屬し、又同一のキリスト教を奉じてゐる。然るに亞細亞の諸民

族は人種區々に分れ、宗教に於ても統一を缺き従つて其思想、感情及び生活の様式に於て互に甚だ異つてゐる。されば如此きものを統一して比較的結合力ある歐米人と天下の覇權を爭はんとするが如きは一種の誇大妄想狂である。然し此と同時に私は又或一部の論者の如く亞細亞モンロー主義を以て歐米人に對抗せんとする主張にも賛同する事は出来ぬ。思ふに一人種又は一民族が世界を獨占せんとする時代は既に過ぎた。現代に於ては世界は全人類の世界でなければならぬ。米國が米國人の米國なりと唱へ他國人の米大陸を開拓するを排斥することが罪惡なる如く、亞細亞は亞細亞人の亞細亞なりと稱して他の資本と勢力とを拒まんとすることも亦罪惡である。モンロー主義は一世紀以前の舊思想である。今にして此舊思想を借り來り亞細亞モンロー主義を以て米國に對せんとするが如きは暴に報ゆるに暴を以てする愚策である。

日本民族の使命は世界の文明史上に一新紀元を開くに足るものでなければならぬ。日本民族無くとも行はれ得るが如き事業は日本民族の使命とするに足らない。又此民

全人類の解放

族に非ずむば爲し能はざる事業と雖も、其が人類共存の倫理に悖り、世界文化の逆轉を來すが如きものは、元より其使命と爲すべきではない。然らば世界文明史的意義と價值とを有する日本民族の使命は何ぞ。曰く世界に於ける全人類の解放である。我等の周圍には武力的又は資本的帝國主義の犠牲となり、其苦痛を訴ふる所なく、奴隷の如き生活に泣く無数の弱小民族がある。此訴ふる能はざる者は代りて訴へ、亡びんとする者を其滅ぼさんとする者の手より解き放ち、如何なる人種たると如何なる宗教に屬するとを問はず、凡ての弱小民族を、其壓制者の鞭より解放し、全世界を機會均等主義の天地と爲すことが實に日本民族の天職であらねばならぬ。

日本は過去に於て敢て世界文明に何等の影響を與へざりしわけではない。日露戦役に於ける我國の勝利は亞細亞の文明に非常な影響を與へた。日露戦争の結果、白人を以て絶對に優良なる人種となすの誤解なること明白となるや、從來白人に屈服し來れるアジア諸民族は遽かに、其頭をもたげ一方に於ては日本に習つて憲法を制定し、他方に於ては白人に對して其強奪せられたる權利の返還を求めた。

故有賀博士は、嘗て云ふた「日露戦争の結果世界に於ける五人の帝王が其權力を失ふた」と。即ち一九〇五年ペルシャには憲政革命あり、國王アリー・シャーは民意を無視せる爲め位を追はれ、其子アーメット・シャーが新に即位して議會を召集した。トルコに於ても亦然り。アブドウル・ハミッド二世は代議政治に反對したる故を以てサロニカに幽閉せられ、其皇弟レシヤッド・エフエンディーがトルコに於ける最初の自由主義君主として位に即いた。支那にも亦一九一一年革命起り、翌年宣統帝退きて滿朝は滅亡した。印度及埃及に於ても一九〇八年より反亂の徴候あり、今は英國皇帝も亦埃及及び印度の自治を認めざるを得ざるに至つたが、凡て如此き憲政革命は皆日露戦争に於ける日本の勝利に刺激せられて起つたのである。このペルシャ王、トルコ帝、清國皇帝、英國皇帝の權力に大變動を與へたるに加へて朝鮮國王の退位を以てすれば正に五人の帝王に禍したに相違ない。

けれども此等の變化は日本が文化的使命を自覺して而して後に與へたる變化に非ずして、唯西洋文明の壓迫に對し自ら活きんとする抵抗が、たま／＼如此き結果を招いたに過ぎない。今や日本は偉大なる文化的使命を自覺し、積極的に世界文化に貢獻すべく奮起しなければならぬ。當に開催中の大連會議及び將に開催せられんとする太平洋會議は、我國が此文化的使命を果すべく、其第一步を進むるに最も有意義な機會であつて、私は日本外交の根本方針が此處に從來の面目を改め、先づ亞細亞及太平洋に於ける武力的及び資本的帝國主義を粉碎し、眞に機會均等主義の新天地を確立せんことを祈つて止まぬ。而して曾つて亞細亞が世界人類の郷土であり、其文明の最初の發源地であつたやうに、今や日本民族の活躍によつて亞細亞が復たび人類解放の搖籃であり、又人種や宗教や言語の差違を超越したる眞の人類共存の理想郷として、其再生の光明を全世界に放つに至らんことを熱望する。(大正十年八月稿)

六 亞細亞の黎明期と我外交

私は此夏北京に遊んだ。一日北京大學校長代理蔣夢麟氏を訪うたが、氏は最近支那學生の思想が、著しく革命的になつたことを論じて次の如く云ふた、「二三年前迄北京大學生中、外交官を志望した者が實に多かつた。何故外交官になりたいかと問へば、大抵は賣國外交を打破して、國權恢復をするためだと答へた。然るに最近其傾向が一變して、嘗て外交官となることを志望した者が此頃は革命家となつた。其理由を聞て見ると、賣國外交も畢竟するに賣國政府あるがためである。今日の支那では誰が大總統にならうと、誰が國務院總理にならうと、それは凡て少數軍閥の傀儡に過ぎぬ。孰れの政黨政派も決して民意を代表して居ない。彼等は自己の勢力を扶殖するがために

ば、外國と結び、外國に依るさへ辭せぬ。否、彼等の政權爭奪は、或意味に於て、賣國權の爭奪だ。彼等を政界より驅逐して、賣國政府其者を根底から破壊しなければ、賣國外交の打破は出来ないと云ふのである。惟ふに支那の思想界に於けるマルクスやレーニンの勢力は、數年前に比ぶれば、著しく凋落した。今日の支那で露西亞に行はれたる如き社會革命を思ふことは、一種の空想に過ぎぬであらう。然し愛國革命とも云ふべき一種の大改造なしに眞の政界革新は不可能である。」と。

現在の支那の政治は、或意味に於て、馬賊政治である。名は共和政治であるが、其實權は少數なる督軍の掌中に存するのであつて、政府の命令と雖も。議會の決議と雖も、其權威は到底督軍の一電報に及ばない。彼等は國家の軍隊の名に於て、實は多數の私兵を養ひ、其莫大なる經費は凡て之を國民の負擔として顧ない。而して其私兵を提げて、或は國家の收入を中途に横領し、或は人民より物資を徵發し、以て自己の私利私慾を逞うして居る。彼等の多くは數百萬元乃至數千萬元の財産家であつて、故袁

世凱の如きは、其蓄財實に數億と稱せられた。最近の支那に於ける財政の大紊亂は、即ちこの督軍專制の結果に外ならぬ。督軍專制を打破するにあらざれば、支那の財政整理は絶望であるが、官僚も政黨も、其多くは督軍に買収されて居るのだから、到底之を打破することは出来ない。故に今日の支那に於ける政治は、即ち少數軍閥の專制政治であつて、其實質に於ては、一種の馬賊政治である。山東土匪の首魁周天倫が山東官兵の無節制を痛罵し「彼等は本地の劣紳と勾串して小民を魚肉にし、姦淫焚掠を恣にし、惡としてなさざるなし、此等の無頼は誠に土匪と雖も耻づる所なり。」と云ふたのは、強ち一時の大言壯語としてのみ見るべきでなく、以て督軍專制の惡弊が如何に民衆の脅威たるかを察すべきである。私が今夏濟南の督軍公署に田中玉氏を訪ひ、「臨城事件の後始末は如何にする」と尋ねた時、氏は答へて曰く「臨城事件の始末は了へた。外國人は全部無償で放還した。其代りに土匪の首魁は、本人の希望通りに、旅團長とした。多分彼は聽て師團長となり、二三年には何處かの督軍となるであらう」と。

田中玉氏が平然として此言をなす所に支那政界の真相を見る。今日の支那に於て督軍と土匪馬賊との相違は、畢竟するに、其掠奪行爲が公認せらるゝ者と公認せられざる者との相違である。

この督軍専制に對する反感が、即ち青年學生の革命運動となつて現れた。固より軍閥打破の叫びは、獨り青年學生のみの叫びでない。商工業者も叫んで居る。過般上海總商會が攝政政府を否認し曹錕氏の大總統たるに反對すると同時に、國會議員も亦民意を代表し居らざるが故其一切の行動を無効とすることを決議したるが如き、又昨年六月京師總商會や京師農務總會が發起して北京に國民裁兵促進會を開催し裁兵廢督を決議したる如き、凡て同一精神の發現である。然し此等の現状打破論者の中、最も眞劍であり且つ最も勇敢なるは、彼等青年學生である。

二

勿論彼等青年學生中には、野心ある政治家や、野心ある商人や、又野心ある宣教師等のために煽動せられ、利用せられ、買収せられて、或は輕舉妄動し、或は墮落したる者も少くないに相違ない。ブランドは、幾多の實例を擧げて、買収せられた彼等學生が其運動費を以て遊蕩に耽りつゝある事實を指摘し、彼等學生の革命運動が決して彼等自身の自覺に出たるものにあらざる事を主張して居る。大正八年の排日運動は、事實に於て、學生の愛國運動であるやうに傳へられたが、其裏面に野心ある政治家が在つて、學生を政權爭奪の道具に利用して居た事は、今や既に世間周知である。如斯く學生運動は常に必ずしも眞劍でない。否、寧ろ從來は無自覺なる學生の輕舉妄動に過ぎぬ場合が多かつた。けれども最近北京大學を中心としたる學生運動は、其思想に於ても、又其運動方法に於ても、大に以前と趣を異にし、自ら新思想の指導者として革命運動の第一線に立たんとする傾向がある。

最近支那各地に勃發したる排日運動も、其思想的背景を見る時は、それが單なる政

治家の陰謀や排日商人の煽動に出たるにあらずして、其根底には最近支那の青年間に發生したる獨立自主の新精神の鬱勃たるものあることを認めざるを得ない。彼等青年の外人、殊に支那に卓越したる勢力を有する外國の人民に對する反感は、恰かも幕末維新の當時我國の青年武士が日夜邊疆に迫り來る外國の脅威に興奮し尊王攘夷を高唱したるに彷彿たるものがある。だから彼等の排日運動は、之を思想上より見る時は、一種の國權回收運動であつて、茲り日本人に對してのみ行はるゝものでなく、凡そ彼等の獨立自主の精神と衝突したる場合に、一切の外國人に對して行はるゝのである。青島に禮賢中學校と云ふ獨逸人の經營せる中學校がある。聞く所に依れば其經營者たる獨逸人が英語を第一外國語とし獨逸語を第二外國語とせよ云ふ支那學生の要求を拒絶したゝめ彼等は全校擧つて退學し、今夏私の滯在當時は閉校の態狀にあると云ふ事であつた。同地で米國人の經營せる明德中學校に於ても運動會にて支那人對米人の競技が行はれるに際し、校長の態度が公平を缺いたと云ふので大騒動となり、學生は校舍

を破壊し、器具を蹂躪して、遂に全退部校したと聞く。北京清華學校は米國が團匪賠償金中より一千萬弗を支出して支那青年のために設立したものであるが、同校學生の一人は私に云うた「清華學校は米國の過去に於ける對支政策の不正を償ふがために設立された學校だから、其學校に學ぶのは吾等の權利だ」と。以て今日の支那學生が過去に於ける外國の壓迫に對して如何に深刻なる反感と報復の精神とに燃えて居るかを察することが出来る。

三

支那現在の支配階級が政權爭奪に没頭し、其勢力を扶植するため外國に媚び、外國と結んで、其力を借るを耻とせざる態度は、獨立自主を精神とし、國權回收を念とする彼等青年の潔しとせざる所なるは云ふを待たぬ。況んや彼等督軍が兵力を恃んで、私利私慾を逞うする結果、國家の財政は極度に紊亂し、軍閥打破を行ふにあざれば、

國家の財政を破綻より救済し、獨立自主の基礎を確立すること全然絶望なるに於てをや。爰に於てか愛國革命家を以て任ずる彼等青年學生中の熱血兒は、今や在所に軍閥打破の叫びを上げ、商工業者の有志と提携して、大に新支那建設のために奮闘しつつある。最近京漢、正太、隴海、津浦、京綏等の各鐵路に勃發したる鐵道労働者の同盟罷業の如きも、其背後に青年革命家の暗中飛躍ありしことは、争ひ難き事實である。

歴代の日本政府の對支那外交は、常に其當時の政府當局者のみを相手とし、毫も民衆の意思を顧慮することはしなかつた。例へば我對滿政策にしても、唯張作霖氏のみを相談相手とし、一般民衆の意向如何と云ふ事は、殆んど眼中に置かない。これ我國に於ける官僚外交の通弊であつて、彼等は自國に於ても民意を尊重せず、恣に一國の大事を獨斷專行して、其結果過つて國家の安危に關するが如き重大事を惹起した時のみ、初めて辭を卑うして國民に舉國一致の後援を求むる。然かも彼等は如斯き態度が自國に於ても既に時代錯誤の甚しきものとして非難攻撃せられて居る事を覺らざると

同様に、支那に對しても亦其當時の政府當局者にだけ満足を與ふれば、民衆の意向はなんであらうとも顧慮するに足らぬとして居る。其結果日本政府の對支外交は屢々支那民衆の反感を挑發し、支那政府と一旦締結した條約迄も、取消又は撤回を餘儀なくせられたのである。對滿政策を樹立せんとするに際して張作霖氏の意向を尊重する事は、決して無用の業でない。然しこれと同時に在滿の一般民衆が如何なる意向を有するやを顧慮し、張作霖氏の意向を尊重するに劣らざる程度に一般民衆の意向を尊重し、一般民衆と日本政府との間に不可分の生活關係が確立するにあらざれば、南滿洲に於ける日本の勢力は砂上の樓閣に異ならぬ。何となれば張作霖氏は人間である。軍閥の巨頭を以て目せらるゝ人間である。彼は明日病死するかも知れぬ。彼は明日暗殺せらるゝかも知れぬ。若し明日第二の奉直戦争が起つて彼が復たび敗れたならば、彼は果して今日の地位を維持し得るであらう乎。今日迄彼の兵力に壓せられて所在に伏雌したる不平の徒は、果して永久に蜂起し報復し能はぬであらう乎。一人を對乎とし、

一人のみに依頼する外交は、結局其一人と運命を共にせざるを得ざるからである。

私は今夏支那漫遊中、努めて多數の歐米人に接し、其支那に關する意見を叩いた。彼等は、大抵支那の前途を悲觀し、殆んど一樣に共同管理の必要を唱へた。在支日本人中にも同様の觀察をなす者が少なくない。如何にも支那現在混沌たる政局を見、其權力階級に屬する人々の腐敗墮落を知る者は、支那の前途に愛憎を盡かすも無理はないが、然し私は其社會の深層を流るゝ脈々たる革命の潮流あることを看過し得ない。而して其革命潮流は、凡ゆる地方と凡ゆる職業とに屬する青年の脈管に浸潤し、纏て民衆運動と化して全支那を動かさんとする潜勢力であるに思ふ。見よ、全亞細亞は今將に獨立自主の氣を負うて新生の途に就かんとし、復興の機運鬱勃たるものがある。此時に際し、此機運の中に立ちて、獨り支那のみが其機運に盲目なる筈はない。支那の復興を信じ、支那の民衆と共に、其新生の途を開拓すべく協力することを知らざるものは、遂に對支外交の敗者たらざるを得ない。

四

初めて亞細亞復興の機運を喚起したのは日本である。日露戰爭に於ける日本の勝利は、白人優越の迷夢を覺破したと同時に、ロンドン・タイムスの云へる如く歐羅巴に對する亞細亞の反逆を激發した。願れば十五世紀末ブスコ・ダ・ガマが喜望峰を廻航して印度に葡萄牙旗を翻してより約四世紀間、亞細亞は其一小分を除きて、殆ど全部歐羅巴に隸屬した。然るに彼等歐羅巴人が奴隸視した亞細亞の一角より起つた一小島國が歐洲列強中の最強國たる露國を打破り、亞細亞人と雖も其生活能力に於て、毫も歐羅巴人に劣らざるを立證した事は、俄然亞細亞諸民族を白人優越の迷夢より覺醒した。彼等は孰れも日本人と同様に立憲政體を確立し、自主獨立の國家を建てんとして波斯や、土耳其や、支那や、印度や、到る所處に專制政體顛覆の革命運動を惹起した。殊に世界大戰後、多年亞細亞に覇權を争ひたる英、佛、獨、露等の列強が疲弊し、其

兵力に於ても、又其財力に於ても、到底戦前の如く其帝國的野心を逞うする能はざる
こと明になるに及んで此等亞細亞諸民族の反逆は愈々顯著となり、自主獨立を宣言す
る者所在に蜂起し、今や全亞細亞は奴隸屈從の舊時代を去つて自主獨立の新時代を迎
へんとしつゝある。

此等の亞細亞諸民族の生活權及自治權を尊重し、亞細亞復興の機運を促進するは、
其先覺者たる日本の使命であると同時に又權利である。日本は機會ある毎に、此等の
亞細亞諸民族を助け、其獨自の文化を完成するに努むべきであつて、日本政府が從來
此點に力を用ゐず、却て多年世界に覇を唱へたる歐米列強に追隨して其帝國主義を謳
歌するが如き態度に出たことが、即ち今日日本の世界に孤立する重大原因である。私
は日本が土耳其、波斯、露國等の如き尙未だ正式の專任使節を交換せざる國とも速に正
式の專任使節を交換し、此等の國々の民衆と日本の民衆とが思想上及經濟上に於て密
接なる關係を結ぶ機會を造る事は、常に亞細亞復興の機運を促進するのみならず、又

外交上に於ける日本の發言權を重大ならしむる所以であると思ふ。

五

今列強が支那の鐵道及財政の共同管理を説くは、亞細亞復興の大精神を蹂躪し、亞
細亞を第二の阿弗利加となさんとするものである。歐米諸國の過去に於ける行爲に徴
するに、共同管理を受くる國の運命は、常に一である。即ち共同管理の任に當る列強
中最も強大なる者が遂に其全管理權を掌握するか、共同管理の任に當る列強が相互の
間に其國を分割するか、孰れにしても亡國の運命を免かる能はざるは、埃及、チュニ
ス、モロッコ、コンゴ等のそれに徴して明白である。支那の青年學生が列強の支那
財政及鐵道の共同管理を以て支那の主權を侵犯せんとするものとなし、極力反對しつ
ゝあるは苟くも自主獨立の精神に生くる者として當然の態度と云はねばならぬ。張作
霖氏と雖も、今夏余が奉天に於て見えた時、談偶々列強共同管理の事に及ぶや、昂然

として云うた。「若し列國にして支那の共同管理を實現とするに於ては、余は直ちに東三省の獨立を宣言し、儼として支那國民の面目を守らん」と。

吾等は屢々支那に對して共存共榮と云ふ。苟くも共存共榮と云ふ以上は、相互獨立したる別個の人格を認めなくてはならぬ。既に支那國民に於て獨立したる別個の人格を認める以上は外交上及經濟上の凡ゆる交渉に於て支那國民の自主自決權を尊重せざるべからざるは云ふを待たぬ。外交の刷新とは、單に追隨的より自主的へとか、侵略的より平和的へと云ふ態度の變更を意味するのではない。某國の如く自主的に國際正義を蹂躪し、又某國の如く平和的に領土侵略を策するは決して外交の刷新でない。如斯き態度又は方法の變更に依て人類自由の境地を開拓し弱國不安の原因を除去し得べしと信ずる如きは、大妄想であつて、眞の外交刷新は、内政刷新と同様に、非人格主義より人格主義への變更である。自他の人格の自主獨立權を承認し、其承認の上に立つて、共存共榮を計るに在る。

六

普墮戰爭に際し、プロシヤ軍はサドアの一戦に於て、オースツリヤ軍を破り勝に乗じ懸軍長驅してオースツリヤ首府ウケンナに迫り、城下の盟を爲さしめんとした。然るにピスマークの深謀遠慮なる、プロシヤはオースツリヤに對し實力の彼に勝れる事を示し、以てドイツ民族に對する號令權を收むれば足る。百年の敵はオースツリヤに非ずして寧ろフランスにあり、今若しオースツリヤをして城下の盟を爲さしめ、其恨を千載に残さしむるに於ては、他日プロシヤが佛國の壓迫を蒙り、全力を盡して之に當らんとするに際し、背後より其復讐を蒙るべきは必然のみ。既に一たびオースツリヤをしプロツヤの實力の優越なるを認めしめたる以上、直ちに兵を還し、速に恨を解いて、全ドイツ民族の提携すべき素地を作らざるべからずと主張し、頑として唯一人軍隊のウインナに進むるに反對した。是にはモルトケ將軍と雖も尙且つ異議を挾み、

軍隊中に於ても青年士官の如きは憤激の餘りビスマルクを呼ぶに卑怯者を以てし、私かに彼を狙撃するに至つた。ブルンチュリー教授の「回想録」に依れば、ビスマルクは世人の彼を卑怯者と呼べるに憤激し、プロシヤ王に拜謁し「陛下は尙ほ軍を進めんと欲せば請ふ臣が宰相たる任務を解け、臣は一兵卒となつて軍に従ひ、陛下の馬前に於て臣が決して怯懦なる人物に非る事を證明せん。」と云つたといふ。此に於て遂に其軍隊はプロシヤに還るに至り、オースツリヤの態度は、ビスマルクの想像したるが如き結果を齎した。果して後年プロシヤがフランスと戦を交ふるに至るや、オースツリヤは能く背後よりプロシヤを攻撃しなかつたのみならず、非ドイツ派のポイグト宰相を辭し、親ドイツ派のアンドラシー之に代るに及んで、遂に獨逸同盟條約成り、兩國は共同して露佛の壓迫に對する事となつた。而して最近の大戦に際しても亦兩國は、殆ど一心一體となつて、世界の列強を相手に奮戦したのである。日支兩國にビスマルクとアンドラシーとの出づるは、それ果して何の時ぞ！（大正十二年十二月稿）

七 東西文化の生理的考察

——本文は嘗て一度出版したことがあるけれども絶版になつたので又爰に掲げる——

—

社會學者ゴビノーは人種に先天的區別あるを認めたれども、過去數千年間に於ける雜居生活の結果、遂に其先天的區別を發見する能はざる程に混成されたるを論じ、「我等は學說上に於て人類を種別し得ざるにあらずと雖も、事實上に於ては、各民族の液血の混成したる唯一種の人類あるを見るのみ」と云つた。蓋し從來人種上の區別を試みたる學者は少くないが、之に成功した者は稀有である。アリストートルは分類の元祖とも云ふべき學者であるが、然かも彼は尙人類を男女の兩性に區別する事さへも學

術的ではないと云つた。固より、生理上に於ても、又心理上に於ても、性の特徴は認め得ざるにあらねども、尙且つ男性にして女性を兼ね、女性にして男性に類する者が少くないのみならず、如斯き區別は文明の系統の區別と没交渉である。ブットナム・ウール氏の如きは全人類を四色に分類し、白色人種、黄色人種、褐色人種、黑色人種として居るが、斯かる分類も亦頗る淺薄にして、一皮剝げば何れも同じ血肉を有し、何れも同じ白骨となるのである。蓋し皮膚の色の相違は多く氣候と風土とに依るのであつて、同じくアリアン人種と云ふも歐羅巴に移住した者は白色となり、印度に移住した者は黑色となつた。又同じ匈奴に就て見るも歐羅巴に入つて永住した者は白色の匈牙利人となり、支那に留まつて永住した者は黄色の支那人となつた。或學者は宗教に依りて全人類を區別すと雖も、宗教を以て人類を區別することの難解なるは、皮膚の色を以て人類を區別するの難解なるに比して毫も譲らないと思ふ。宗教の種類は千差萬別であるのみならず、各々其教義の解釋に従つて無數の宗派を爲すが故に、單に

キリスト教徒とか、マホメット教徒とか、ユダヤ教徒とか又佛教徒と云ふ如き、簡單なる言葉を以て全人類を種別することは不可能である。又或學者は言語學上より人種の區別を試むと雖も、之も甚だ不正確である。例へば支那人の如きは多數の異民族の混成した者であるが、其言語は悉く漢文字に同化せられたから之を言語學上の考證から見れば同一民族である。之に反し黒龍江流域に散在せるツングス族と南洋マレー族とは同一人種なりと信すべき證據あるに拘らず、言語學上のみより推論すれば異人種のやうである。茲に於て獨逸のヒュツベ・シユライデンの如きは全人類を大別して“Naturvölker”即ち自然民族と“Kulturvölker”即ち文化民族との二種とした。即ち一定の文明を有し、爲に自然に制せられずして能く自然を制するの力を有する者を文化民族と稱し、自然を制する能はずして常に自然に制せらるる者を自然民族と云ふと區別して居るが、然し如斯き區別も亦要するに程度の差にして種類の別でない。蒙昧野蠻の人民が轟々たる雷鳴を聞きて神秘なる威力を感ずるは、是れ聽て宗教心の發端であ

り、山野に起臥し草木を食とするは、最れ臙て利用厚生の起原である。自然を制すと
言ひ、自然に制せらるゝと云ふも、畢竟は氣候と境遇との刺激に應じて決するので、
温帯人と雖ども熱帯地方に生活すること久しけれど自ら熱帯人の如く懶惰となり、熱
帯人と雖も永く温帯地方に生活したる者は自ら温帯人の如く勞作するの習慣を生ず
る。如斯きが故に一定の標準を立て、全人類を區別し、狹隘なる方式の中に人種性若
しくは民族性と云ふが如きものを限定せんとすることは容易でない。故にビスマーク
の如きは斯かる努力を冷笑し、「全世界は獨逸帝國の朋友と獨逸帝國の敵に二分し得べ
きのみ。」と云つたのである。

然かし或人種に比較的共通し、他の人種に比較的存在せざる特性を發見することは、
必ずしも不可能に非ずと思はれる。英國の遺傳學者ゴールタンは寫眞術を應用して種
族の類型を發見せん事に努めた。彼は一種族の容貌の特徵を發見するに際しては、出
來得るだけ多數の寫眞を撮る。例へば百枚の英人、百枚の佛人、又は百枚の獨逸人の

寫眞を並べて見れば、其國民に特有なる容貌が自ら發見せらるゝと云ふのであるが、
此等の國民は總て共通の祖先を有し、其血液を同うして居るのみならず、其後分離し
て別々の國民的生活を營むに至つた後と雖ども、互に交通し、互に雜婚し、其肉體的
特徵に至つては、比較的共通して居るのであるから、果して如斯き方法に依つて此等
の國民の容貌に於ける特徵を發見し得べきや否やを知らぬ。けれども人種性とか國民
性とか云ふものに至つては、主として後天的のものであるから、縦ひ共通の祖先を有
し、其血液を同うするも、地理的境遇や歴史的變遷に應じて或程度の特徴を有するこ
とは疑ひないと思ふ。故ジョセフ・チェンバレンは曾てバーミンガム市に於ける演説
中次の如き事を云つた。

「嘗て佛蘭西に凶作があつて人民が饑饉に惱み、當時の政治家フーロンに訴へて救
濟を求めた。所が彼れは平然として曰く「汝等食ふもの無ければ草を食へ」と。之
を聽いた佛蘭西人は激昂する事甚しく、終にフーロンを捕へて樹に掛け、其口に草

を食ましまして、とう／＼斃殺しにして了つたと云ふ。然るに英國に於ては、千八百四十年の頃同じく饑饉のため英國人は非常な困窮に陥つた。是に於てか人民はノルフオーク公に訴へて救済を求めた。さうすると彼も亦平然として「汝等食ふべき物無くんば水にカレー粉を投じて飲むべし」と悪罵したに拘らず、英國人はノルフオーク公を樹に掛けて其口にカレー粉を投ずるが如き事は爲さなかつたのである。吾等は佛蘭西人の如く極端なる感情家たることを欲せざるも、又ノルフオーク公に悪罵せられて平然たりし英國人の極く極端なる鈍感者たることは決して進歩のため喜ぶべきにあらず。」

と。蓋し英國は氣候寒冷にして濕氣多く、従つて感覺の餘りに鋭敏なる者は、自然淘汰の結果として消滅し、自ら性質の堅固にして其氣候と能く調和し得べき粘液性の者が繁殖したのであるから、之を佛蘭西人の如く光線の充滿せる自然の中に生れ出で、敢て強烈ならざる印象に對しても、直ちに反應するに慣れた國民に比すれば、其感覺

の遲鈍なるは當然である。如斯く人種性又は國民性なるものは、先天的と云ふよりは寧ろ後天的に、或は其氣候の刺激のため、或は其周囲の事情のため、獨特の傾向を生じ別異の色彩を放つのであるが、吾人は今之と同様の理由に依り全歐羅巴人を通じて一大特性あることを發見したのである。而して其特性たるや菜食人たる日本人にして初めて發見し得べき特性であつて、自身歐羅巴に生まれ、歐羅巴に成長したる歐羅巴の學者の容易に氣付かざる歐羅巴人共通の特性である。然らば其特性とは如何なるものぞと云ふに、そは彼等が祖先以來繼續したる肉食的生活に基く一大特性である。

二

孰々歴史を大觀するに、世界に三個の文明の潮流がある様である。第一は支那文明、第二は印度文明、第三は歐羅巴文明と云ひ得るのであるが、大體から見ると、歐羅巴文明は其根本に於て印度文明と同じくアリアン人種の文明である。アリアン人種の故

郷に關しては學者の間に種々の議論があるけれども、中央アジアに於けるバクトリア地方ならんとは多數の認むる所である。彼等は遙遠なる太古に於て、人口繁殖のためか、或は外敵の襲來に餘議なくされた爲めか、大移動を始めたのであつた。而して其一部は西方裏海の南岸より、アルメニア及び小亞細亞の地を経て歐羅巴に入り、他の一部は南方ヒンズークーシユ山脈を越えてインダス河を渡り、パンデヤブより天竺半島に南下して印度の原始民族となり、更に他の一部はバクトリアの地からサリフイヌ山を越えて南に入り、ペルシア民族となつた。而してこの歐羅巴に入つたアリアン人は、その移動の途中に於て或はセミチック人種の文明や或はハミチック人種の文明より多大の影響を蒙つたのみならず、其風土の全然相異りしたため、印度文明とは全く異つた文明を建設するに至つたのである。印度文明はアリアン人種の天竺半島に入り、熱帯地方に於て獨特の發達を遂げたものであるが、其根本は歐羅巴文明と同じアリアン人種の文明であることは疑ひなき事實である、佛教の傳播と共に支那に入つて其文

明に多大の影響を與へて居るけれども、歐羅巴の文明とは却つて顯著なる關係を持たなかつたやうである。支那文明の起原に就いては、學者の間に種々の異説があるが、其起原はセミチック人種若しくはハミチック人種の文明と共通して居るものがあるらしい。又久しく印度文明にも接觸して居たが、然かし孰れの文明にも同化せられず、自ら獨特の文明を成して居る。故に亞細亞は人類の郷土であると同時に、又世界文明の發源地である。従つてアリアン文明の中心は、即ち今日の歐羅巴文明に存するのであつて、希臘民族、ラテン民族、チュウトン民族、スラヴ民族及びケルト民族の文明がそれである。

而して此等アリアン人種は遊牧の人民であつて、最初全く農業を知らなかつたらしい。何となれば初期のアリアン語の中に「耕」と云ふ字もなく、又「秋」と云ふ文字もない。彼等は其氣候を單に“Sama”即ち夏と“Hima”即ち冬とに大別して居た。凡そ農業に於ては春と秋とが最も大切な時期である。即ち種蒔きと刈入れの季節であ

る。然るに其農業に取つて最も注意すべき時期を言表はすべき何等の言葉をも有つて居らなかつたのは、即ち彼等の土地が比較的熱帯に屬し、年中唯其家畜を放牧するを業としたるが故に、時季の區分に就いては殆んど考へなかつた事が知られる。然らば此の「秋」と云ふ言葉がアリアン人種に屬する民族間に何時から使用せられたかと云ふに、實に彼等が歐羅巴に移住して、初めて農業を營むに至つてからの事である。故にラテン語に於ては之を“Autumnus”と云ひ、「實る」と云ふ意味を表し、獨逸語にては“Herbst”と云ひ「收穫」と同意義である。或學者の中にはサンスクリット語に“ajras”と云ふ字あり、ギリシヤ語に“Ayros”と云ふ字あり、ラテン語には“ager”と云ふ字あり、ゴス語に“akrs”と云ふ字あり、又獨逸語に“aker”と云ふ字あり、此等は皆耕地を意味するのであるから古代からアリアン人種も農業を營んだに相違ないと云つて居るが、之等の語は最初何れも牧場を意味したのである事は、多くの言語學者の證明する所である。即ち“^{アゲ}”と云ふ言葉はサンスクリットにて「追ふ」と云

ふ事であつて、“ajras”と云ふのは「逐ひ廻す土地」と云ふことで牧場に當る。今日でも獨逸語で何をやつて居るかと云ふ時“Was treibst du?”と云ひ、ラテン語では“Quid agis”と云ふ。即ち何れも「何を逐ふて居るか」と云ふ意味で、其祖先以來用ひ慣れたる言葉であるに相違ない。且つ彼等は遊牧の生活を爲て居たが爲に、古代のアリアン人種に屬する民族間に於ては土地の私有と云ふ觀念が無かつた。即ち總べての土地は共有となつて居たのであるが、獨逸民族やスラヴ民族は農業を營むに至つた後も、尙久しく此制度を維持して居た。ローマ人は紀元前七百五十年代から土地の私有を認めた様であるが、然も尙數世紀の間牧場は之を共有として、私有の土地を“^{アゲル}ager privatus”と稱したるに對し、其共有の牧場は“^{アゲル}ager publicus”と稱して居た。蓋し牧畜はなるべく大なる土地を必要とする。互に土地を狹隘なる私有地に區分して、各自の所有權を争ふが如き相互の利益にあらざるが故に、彼等が其土地を共有としたのは誠に自然の勢であつた。而して彼等は其共有の土地に互に放牧するに際して、其

混雜の餘り、互に自己又は自己の部落の家畜を紛失せんことを慮り、凡ての家畜に對し其脊に焼印を刻するか、或は文字を塗り附けたらしい。イエーリングは其著「アリアン人種進化史」に於て、アリアン人種が其遊牧時に代其家畜の毛皮に所有者の記號を書いたことが、アリアン人種の最初の文字であつたと云つて居る。サンスクリット語では色を塗ると云ふ語の語根は「*ṛi*」であるさうで、今日文學を「Literature」と云ふは其起原を茲に發すると云ふ。

斯く放牧の生活を營むに就いては、農業を營むよりも更に廣大なる土地を必要とするが、故人口の増加と共に土地を要すること頗る多く、到底一定の場所に全部落が永住すること不可能となり、彼等は萬能を排し新らしき土地を望んで移住し、それからそれへと歐羅巴の大陸を彷徨したらしく思はれる。諸家の説を綜合するに、アリアン人種が大移動を始めたる當時に於ては、已に其根本種族は數百萬を算したるべしと云ふ。以て彼等が如何に恐るべき勢を以て歐羅巴の天地に瀾漫したるかを想像する事が

出来る。而して此の移動しつゝあるアリアン人は、或は海岸なる肥沃の平原に於て、或は奇嶮峻峭たる山間の森林に割據して、各々部落を建て、各々酋長を仰ぎ、以て己に政治的結合を初めたのであつた。

三

如斯くにして次第に歐洲の天地に移動したるアリアン人種は、或は其氣候の影響に依り、或は其土地の形勢に依り、或は其境遇の差異に依りて、各々獨特の發達を遂げたのである。例へば大河の流域なる大平原に出でたる者は、牧畜に徒事すると共に、又自ら農業を營むに至り、海岸に沿ふて移住したる者は、早く他人種の文明に接觸して獨特の發達を遂げ、森林の中に生活したる者は自ら其進歩に於て他民族に後れ、他の蠻族に征服せられた者は、新たに其蠻族の血液を加へ、如斯くにして孰れも次第に獨特の文明を生ずるに至つた。かのギリシヤ民族が他の民族に率先して早くより絢爛た

る文明を生じたるは、偶然に狹隘なる半島に出で、人口の増加と共に次第に放牧の生活に困難を感じ、其地理上早くより往來したるセミチック人種及びハミチック人種の生活に倣ひ、放牧以外の種々なる産業を研究したが故であつた。之に反してチュートン民族やスラヴ民族は、北歐の森林に生活し、地中海を去ること甚だ遠きが故、地中海に發達したる古代文明に直接觸るゝ機會を得ず、ラテン民族やケルト民族を媒介者として僅かに其一端を吸收するに過ぎなかつた故、其人文の發達の遅々たりしは寧ろ當然であると云はざるを得ない。以上の如く各民族は其境遇に依りて多少異つた發達を遂ぐるに至つたが、然かも其生活の根本とする所は同じく遊牧である。而して人口増加し、生活困難となるか、又敵の襲撃を受くれば、其全部なり、又一部なりが遊牧しつゝ、次第に他に移動したのであるから、その遊牧人種たる點に於てはギリシア民族も、イタリヤ民族も、ケルト民族も、チュートン民族も、又スラヴ民族も共通である。この結果としては彼等は自ら禽獸を利用し、主として禽獸に依て生活するの風習

を有した。現に今日の歐羅巴人が肉食を以て常食となし、獸毛を織つて表服となし、禽獸の羽毛を抜き取つて其帽を飾り、皮を剥ぎて其足に穿ち、又家屋の内部に於ても、恰かも我が臺灣の生蕃が人間の生首を以つて其家の裝飾となすが如く、鹿、牛、馬、犀等の如き獸類の首や、或は可憐なる禽獸の剝製を以て其室の内外を裝飾しつゝあるが如き、實に皆之れ遊牧時代の遺風である。彼等の身體が巨大にして、我等に比すれば非凡の精力を有し、幼時より狩獵を好み又旅行を樂しむが如きも、其原因は其祖先の遊牧時代に養成したる遺傳性に存するのである。彼等が如何なる他の人種よりも探險又は拓殖の業に長じ、殆んど天下を蔽ふの概あるも亦偶然でない。一寸考へれば人間の生活とは直接の關係なき南北極の如き地方に迄普ねく足跡を印して居る。故エルンスト・フォン・ハレル博士が其著「植民史上の一大時機」に於て述べた時に依ると、一八五〇年より一九〇〇年に至る約半世紀に於て、歐羅巴人の歐羅巴以外に移住したる者合せて二千五百萬人を算することであるが、之等の移民の大多數は米大陸及

び濠洲へ移住し、面して其多數は今尙牧畜を業として生活して居る。實にアリアン人種は歴史以前より初めたる遊牧的移動を今尙繼續し、當に全地球の上に發展して全獸類の皮を剥ぎ其肉を食はずんば止まざらんとする勢である。試みに次の統計を見よ。アリアン人種の生活が今尙如何に動物に負ふ所の所多きかは明白である。

國名	調査年次	馬	驢馬	牛	豚	羊	山羊
獨逸	一九一二年	四、五三、〇五九	一三、一四七	二〇、一八三、〇三二	三、九三、七〇七	五、八三、四四五	三、四〇、三九六
佛蘭	西一九一二年	三、三三、一四〇	五五、〇七〇	一四、七〇五、九〇〇	六、九三、七五〇	一六、四六〇、七〇〇	一、四八、五三〇
大不列	西一九一三年	一、四〇二、一四六	—	五、七六、九四四	二、一〇三、一〇三	一七、三三〇、二八六	—
愛蘭	一九一三年	六、四一、四八一	二七、六七七	四、九三、六五五	一、〇六〇、三六〇	三、六二〇、七四四	二、四六、三四八
伊太	利一九〇八年	九、五五、六七八	一、三三、〇六七	六、一九、八六一	二、五〇七、七九八	二、一六三、九六六	二、七四、八七六
澳洲	利一九一〇年	一、八〇九、八四八	七、四〇八	九、一六〇、〇〇九	六、四三、〇八〇	二、四八、一〇三	一、三六、七七八
歐洲露西亞(北部高加索を含む)	一九一三年	二、四二、四二〇	—	三、一六五、一五五	二、四八六、七五五	四、二七二、五二一	—
西班牙	一九一一年	五、四六、〇三五	一、七四、四六六	—	二、四七二、四二六	一五、七五、八八三	三、三六九、六三四
亞爾	利一九一一年	八、八八、〇三二	八、五四、二二八	二、七六六、六六八	二、九〇〇、〇〇〇	八〇、四〇一、四八六	四、三一、五五五
智利	一九一二年	四、〇〇、七六六	七〇、三三六	—	一、六五、六七三	四、一六八、五七三	二、七三、二二八

國名	調査年次	馬	驢馬	牛	豚	羊	山羊
加奈	大一九一三年	二、八六、〇〇八	—	六、六六、二二二	三、四八、三三六	二、二八、五一一	—
北米合衆	國一九一三年	三〇、五七、〇〇〇	四、四九一、三三三	五、五七、八三七	六、一七八、〇〇九	五七、四三、〇〇〇	二、九一五、二三五
英領印	度一九一二年	一、五九、八三八	一、五四六、八三七	二、七四、一九〇	—	三三、八四八、〇四三	六、二一九
新西蘭	一九一〇年	四〇四、二六四	四〇四	二、〇〇〇、七二二	三、四八、七五四	二四、一九一、八一〇	五、一六、〇〇〇
ニュウサウ	ウエールス一九一二年	七、七、四七五	二〇二	三、〇〇〇、八三四	二、九三、六三三	三九、〇四四、五〇三	一、五五、〇〇〇
クキンス	ランド一九一二年	六、七、五七三	七、四三	五、二〇、八九一	一、四三、六九五	二〇、三〇〇、〇三三	一三、七七八
南加	洲一九一二年	二、六、五九九	—	三、八三、四二八	六、九、八三三	五、四八一、四八九	六、二二七
グキク	トリア一九一三年	五、三〇、四九四	—	一、五八、〇八九	二、四〇、〇七二	一一、八九二、三三四	三、八六一、八四四
アル	シール一九一一年	三、三六、七六四	四七、七六六	一、一三、三五三	一一〇、〇三三	八、五三八、六二〇	三、八六一、八四八
南阿	聯邦一九一一年	七、九、四四四	四、〇、六四二	五、七六六、九四九	一、〇八一、六〇〇	三〇、六六六、六五九	二、七六二、九七九

彼等は如斯く多數の獸類の肉を屠り、其皮を剥ぎて生活しつゝあるのであるが、若し獸類の皮を剥ぎ其肉を屠ることを「屠獸業」とすれば、彼等歐羅巴の諸民族は當に世界一の屠獸業者であると云はねばならぬ。

唯物論者フオイエルバッハは人間の理性を否認し、「Der Mensch ist was er ist」即ち「人は其食物に外ならず。」と云ふた。吾人は如斯き極端なる言葉に與する者でないが、然かし食物が或程度迄之を食ふ者の精神に影響することは争ふべからざる事實である。夫の馬とか牛とか鹿と云ふ如き肉食獸は其性質比較的温順であるに反し、獅子とか虎とか狼と云ふ如き肉食獸は其性質猛烈にして容易に馴らし難きは、人の能く知る所であるが、人間も亦其如く、歴史なき時代より常に遊牧を業とし、肉食に依りて生活したる歐羅巴の諸民族が、野獸の如き猛烈なる感情を有し、彪虎の如き戰鬥性を有する事は、自然の數と云はねばならぬ。佛蘭西の哲學者アルフレッド・エミール・フイエは、其著「著歐洲各國民の心性」にて獨逸人の慄悍にして鬪争を好むを批難し、「獨逸史の英雄は勇氣を鼓舞するが爲めに人血を啜り、又同胞の心臓を皿に盛るを憚らざるなり。」と云ふて居るが、如斯きは實に獨逸人のみの特性にあらずして、實は歐羅巴の諸民族に共通の特性である。現に佛蘭西人自身の歴史を見るも、其頁の多數は

残忍なる虐殺の鮮血に塗れて居る。ユーゲノットに對する迫害は遂にセント・バーンロミューの夜の大虐殺となり、巴里の街路に横はる死屍のみを以ても一萬を算したと云ふではないか。佛蘭西革命に際してもギョチンに命を殞した者はルイ十六世以下數萬の多數に及んだ。固より斯かる猛烈なる感情は數百年に互るクリスト教の感化に依り、或程度まで變質し、平素は極めて靜蕭なる状態に在りと雖ども、何か外部より強烈なる刺戟を與へらるゝや、其野獸に似たる本性は忽ち猛然として發現するのである。社會學者ルボンが「人間は群集となれば其原始的精神に返るものなり。」と云へる如く、何翁か激昂すべき事件に遭遇せば、其内心に於けるアリアン人種の原始的性質が直ちに反應し、驚くべき勢を以て發作するのである。従て歐洲人は大體に於て、其敵に對して頗る殘酷であり、又直ちに革命的暴動に走り易き傾向を有する。彼等が國際的生存競争に臨めば、直ちに帝國主義者となり、階級的生存競争に遭遇すれば、眞ちにサンヂカリストの如きを産する、又怪むを須むない。故イー・ゼー・ペーン氏ヒストリ・オヴ・ユナは其著「歐

「洲植民史」に於て西班牙人の土人虐待に就いて次の如き事實を語る。

「西班牙人は約五十年間全く亞米利加の土人を征服し、之を奴隸となしたるが、若し少しにても抵抗し、又は不平を唱ふる者あらんか、直ちに之を殺戮したり。如斯くにして西班牙人の横暴に斃れたる者甚だ多く、或者は亞米利加の土人にして五十年間に殺戮せられたる者四千萬を下らずと云ひ、之れを最少に見積りたる者も尙且一千萬を算す。雖然恐らくは前者の計算を以て事實に近しとせん。西印度諸島の如きは、嘗て約六百萬の土人を有したるこゝ明白なり。雖然今や殆んど全滅したるが如く、之をハイチ島のみに見ても、土人の数は五十年間に約一百万より僅々二百に減じたり。此の缺乏を補ふべく、西班牙人は周圍の諸島より盛んに土人を誘拐したるが、殊に著しかりしはバハマ諸島なりき。シヤメイカ島に至つては西班牙が一滴の流血を見ずして征服したる所なりと稱せらるゝに拘らず、英人が代つて之を占領したる頃既に土人の種族は根絶し居たり。僧正ラスカサスの言に依れば、かのコルチスの黒耳其征服に於ても亦殆んど四百萬の土人を殺戮したるが如し。其他の歐洲植民國民に在ても、此種の經驗を有せざるは皆無なり。實に歐洲人の其植民地の土人に對する歴史は赤面せずして讀むこゝ能はず。」

と。以て其残忍性の如何に強烈なるかを知るに足る。又英國の如きは政治思想の發達せる點に於て世界に冠絶し、憲政の運用は他に比倫を見ずと誇るに拘らず、總選舉に

際しては動もすれば革命の如き騒動を見るのである。現に一九一〇年に於ける總選舉に於てもロイド・ジョージ氏の選舉區なるウエールズのカーナボンに於ては、其土地の地主等が命令的に小作人をして保守黨の候補者に投票せしめんとしたるに激昂し、多數の自由黨員及び人民は殆んど革命に等しき暴動を起し、政府は非常鎮壓令ライオットアクトを布きて、僅かに之を鎮壓するを得た。試みに當時のカーナボン新聞の記事を拔萃する。

「子供は泣き叫び逃げ逃び、老人は地上に打ち倒されぬ。猛り狂へる群衆は其傍を通過せんとする小馬車を取圍み、車體を破壊すると共に車上の紳士を引落したり。鎮壓の巡查も暴徒の襲撃を被り、爲めに官帽は奪はれ官服は裂かれたり。暴徒は夜半過ぐる頃より保守黨の候補者なるウンセント氏の親反なるロイド、カーター氏の邸宅に、押寄せ氏が永らく痲痺に在りて目下危篤に迫れるにも拘らず、其門内に闖入して賄賂の暴行を逞ふしぬ。それより彼等は更に轉じて保守黨の選舉事務所を襲ひ、其委員室を破壊し、警官の發砲に合ひて僅かに鎮靜したり。」

と、又以て其暴狀の如何を推察する事ができやう。余が在英中にも此種の暴動は屢々あつた。一九〇九年四月グラスゴーに於てケルチック俱樂部と云ふフットボールの團

體とランガース俱樂部と云ふフットボールの團體とが、蘇格蘭の名譽賞杯を争ふて競技したが、當時この有名なる二團體の競技を観んとて集りし者無慮七萬と號せられた。然るに豫定の番組を終るも勝敗決せず、観客は委員に番組を更めて勝敗を決せん事を請求したのであつた。然るに委員は之に同意せずして散會を宣告したので、茲に群衆の不平は一時に爆發し、激昂の餘り委員の本部に押寄せ、石を投じナイフを振りて亂暴し、然かも尙憚らずして建物に火を放ち之を焼き拂ふたのである。之がため多數の死傷者を出し、警官の死傷者のみにても約六十を算した。

加ふるに彼等の敵に對するや、唯に殘忍なるのみならず、又執拗にして、一度戦端を開けば容易に干戈を收めず、かの十字軍の如きは實に前後八回、約百八十年の久しきに互つたのである。其他或は百年戦争と云ひ、或は三十年戦争と云ひ、或は七年戦争と云ふ如き、其強烈なる敵意と執拗なる復讐心とは輒すく妥協を許さぬのである。今度の歐洲戦争の如きも、當初多數の日本人が想像したるとは大に異なり、互に殘忍

なる殺戮を交換し、又其敵を滅亡に至る迄撃たずんば斷じて止まらざらんとする勢である。

五

歐羅巴の諸民族の感情の猛烈なる事は既述の如くであるが、之に準じて性慾も亦頗る強烈である。曾て日本に遊んだ一英人が其旅行記に次のやうな事を書いた。曰く「日本の婦人は誠に不思議なる性質を有す。我國に於て浴室に男子一人存在する時、過て下女が其戸を開き男子の裸體を見たる場合、下女の態度は恐らく二つあるのみ。即ち驚き叫んで逃げ出すか、戸を閉ぢ皆に媚を凝らし入り來るか、二者の中孰れかに出づべし。然るに日本の下女は、平然として男子の浴室に入り來り、平然として其脊を洗ひ、又平然として出で去れり」と。凡そ物は問ひに落すして語るに落つ。斯かる記事は偶々彼等の性慾が如何に強烈なるかを自白するものである。彼等は單に浴室のみに止まら

ず、普通の室に於ても、男女唯二人同席して、果して過なきを得るや否やを疑問として居る。故に彼等の間に於ては、若し婦人一人の室へ男子が入るか、又男子一人の室を婦人が訪ふ時は、必ず入口の戸を開放するを紳士淑女の風習となす。英國にては下女は主婦の使用するものなるが故に、苟くも紳士たる者は、縦し主人と雖ども、主婦を通ずるに非んば、下女に命令すべからずと云ふ風習がある。如斯き風習も亦主婦の嫉妬心より出でたる警戒に相違あるまい。一體日本人は此點に頗る淡白で、挨拶をするにも三四尺を距て、互に頭を下げ、互に微笑むのみで満足するのであるが、彼等は握手し、其肉に觸れなければ満足が出来ない。日本に於ては男女が握手する時は、相思の情當に燃ゆる時であるが、如斯き場合に彼等は接吻しなければ己まんののである。如斯く性慾に於て甚だ強烈なるが故、其性慾に關する犯罪の如きも、實に我等の想像し能はざるが如きものがあるけれども、それは此處に詳述するを省く。

或者は彼等が古代より一夫一婦の美風を存したるを指摘し、其兩性間に於ける風紀

の嚴肅を誇ると雖ども、それは事實でない。如何にも歐羅巴の諸民族は早くより一夫一婦の制度を採用した。然かし其一夫一婦の制度なるものは、一定の倫理觀より起りに非ずして、全く移動に伴ふ生活上の必要から起つたのである。故に一夫一婦の制度なるものは、アリアン人種の最初からの制度ではなく、彼等が歐羅巴に向つて移動を初めた後に起つた制度である。彼等が移動を始めた當時に於ては尙未だ一夫多妻を不正とせざりしのみならず、移動後に於ても會長其他の有力者は一夫多妻を實行して居たのである。然しながら移動を繼續すると共に食料の缺乏を告げ、一人の男子が數人の妻を伴ふと云ふが如き贅澤なる生活を維持することが出来なくなつた。殊に其移動に際して各部落は共産的生活を營んで居たのであるから一人でも人數を増加することは、其部落の生活費の増加を意味したのである。茲に於てか各部落は其生活の必要上より一人の男子が移動に際して携帶し得べき婦人を一人に制限した。之が一夫一婦制の起原である。故に歐羅巴の諸民族間に於ける一夫一婦の制度の起原は、道德的で

なく、全く經濟的であつた。

更に離婚を批難する習慣も亦アリアン人種に負ふ所少くない。元來セミチック人種は離婚に就いては頗る寛大であつた。舊約書には男子が何時でも、其理由を説明せずして、其妻に離縁状を與ふるの自由を認めて居る。マホメット教の經典にも亦之に類する男子の離婚權を認めて居る。然るにアリアン人種の歐羅巴に移住したる者は、孰れも離婚を批難して容易に之を許可せざる習慣を造つた。然かし此習慣も其起原は、一夫一婦の制度の起原と等しく、移動に伴ふ必要からであつた。蓋しアリアン人種が移動するに際して一夫一婦を強制するとしても、若し途中で男子が其妻を嫌ひて放棄するが如き事あらんか、其棄てられたる女子は途中にて保護者を失ひ、遂に餓死するの外なきに至るであらう。爰に於てか女子は安心して男子に従ひ、長途の移動を共にせんが爲めに、先づ如何なる事情ありとも男子は其妻としたる女子を故なく移動の途中に於て放棄する事無き保證を得るの必要があつた。而して其保證を與へない部落の

男子とは同行するを拒んだに相違ない。そこで各部落は各々女子自ら不正の行爲を犯すにあらざれば、決して故なく之を棄てざるべき約束を結んで、女子の不安を一掃し、以て必要とするだけ多數の女子を伴ふことゝしたらしい。現に彼等の間には男子が部落の約束に反き、姦淫の故ならずして恣に其妻を棄てたる時は、其男子は殺戮せられ、其財産の一部は其妻たりし女子の所有に歸し、殘部は之を部落に沒收する風慣があつた。斯くして時は移り、世は過ぎ、文明の進歩と共に、道德上の理由に依りて、離婚を批難するに至りたれども、其初めはかの一夫一婦の制度と等しく、生活上の必要によりて之を批難したのであつた。

掠奪結婚も亦自ら此間に行はれた。即ち一夫一婦が相携へて移動しつゝある間に、或は女子の死亡するあり、或は幼年の男子成長するあり、爲めに女子の缺乏を告げ、如何にかして之を得んとする餘り、遂に他部落又は他人種より婦人を掠奪するの風習を生じた。今日でも英國のウエールスの山中に於ては馬上に於て妻を授受する風習が

あるが、如斯きも亦古代のアリアン人種が其移動に際して掠奪結婚したる遺風であるに相違ない。又今日の歐米人が結婚式を終るや、直ちに新婚旅行の途に上る如きも、古代に於て其妻を掠奪して逃走したる形式の殘存せるものなりと云ふ。彼等が其妻を携へて出入するや、必ず其肘を組合せ、只管離れざらん事を努むるも、移動時代に於て其妻の他人に掠奪せらるゝを豫防するが爲め、常に親しく手を取りて之を携帶したる風慣の其儘傳はつたものであると云ふ。

其初め結婚は男子の部落に對する義務であり、出産は女子の部落に對する義務であつた。蓋し移動時代に於ては多數の強壯なる男子を必要とし、強壯なる男子の増加は、結婚に依る外ないからである。従て男子に結婚せず、女子にして出産せざる者は他の人々から輕蔑せられた。如斯き風習はローマ時代に於ても尙存し、獨身の男子は其の義務に忠實ならざる故を以て、政府より“*aes uxorium*”と云ふ特種の獨身税を賦課せられたのである。斯く結婚を奨勵して其子孫の繁殖を計ると共に、又病弱にして戰

鬪力を失へる者は、其移動の途中に於て、或は之を殺戮し、或は之を火中に投じたと云ふ。グリムの「獨逸古代法律史」に依ればスラヴ民族やチュートン民族の間に於ては、古來斯かる慘事の行はれし事明白なるのみならず、ローマ人の間に於ても亦之に類似せる殘忍なる行爲の行はれたる形跡がある。彼等は如斯く老弱は之を顧みず、病者は之を放棄し、唯強壯なる男女をのみを互に手を携へて一の土地より他の土地へ移動し、曾て一族を擧げて一定の土地に永住して、家族的團樂を楽しむと云ふが如き事がなかつたのであるから、其社會の單位は自ら個人となり、其間に新夫婦別居の如き風習も生じたのである。之を要するに移動時代に於ける彼等の生活は頗る原始的であつて、唯其野獸の如き精神を以て激烈なる生存競争をなしたに過ぎぬ。若し彼等をして他人種の文明に接觸せしむることなく、其野獸の如き生活を繼續せしめたならば、世界の歴史は如何に慘憺たる頁に満ちたかも知れぬのであるが、天意か偶然か、爰にセミチツク及びハミチツク兩人種ありて、此野獸の如きアリアン人種に一道の光明を

投じ、彼等の物質的及び精神的文明に新生の機會を與へたのである。

六

セミチック人種の起原は明白でない。歴史上推定し得る時代に於ては、主としてユーフラチス、テールグリス兩河の流域に生活してゐた。かのバビロニア、アッシリア、フキニシア、ユダヤ等の諸民族は之に屬するのである。而してアリアン人種が中央亞細亞の山間より出で、遊牧を業としたるに反し、彼等セミチック人種はユーフラチス、テールグリスの如き大河の流域に生活したるが爲め、自ら農業に従事するに至つた。凡そ農業を主とする人種は、單に放牧に依りて生活する人種よりも、文明の發達が迅速なるは自然である。何となれば牧者の生活は農民の生活に比して精神を用ゆる機會が比較的少い。彼は單に家畜を監督し、其乳を絞り、其毛を刈り、其肉を屠るを以て足れりとする。然るに農業に従事する者は自然を相手として植物を栽培するのであるか

ら、勢ひ先づ自然の裡に潜む諸種の秘密を發見せねばならぬ。即ち如何なる土壤を選び、如何なる種子を求め、如何なる時季に播種し、如何なる方法にて栽培し、如何なる時節に之を收穫すべきか、又其收穫したるものを如何に利用すべきか、之等の問題を研究せざるべからざるが故に、自然に精神を働かせ、種々の研究をするに至る。其結果として、或は鋤を發明し、或は鋤を案出し、或は打穀器を造り、或は肥料を發見し、或は家畜を利用する等、精神的にも、又物質的にも、次第に自然を征服するのである。アリアン人種が唯拱手して、其の家畜を監督するの退屈に堪えずして、或は異性を求め、或は賭博を愛好すると正反對である。蓋しアリアン人種は、大體に於て、賭博打であるが、之の點に關しては支那人と類似する。惟ふに支那人も古代よりの遊牧的生活を營み、其境遇の類似する者あるがためにあらずやと思はるのであるが、之に反してセミチック人種は大體に於て、賭博趣味を持たぬ。イェーリングが其著「アリアン人種進化史」に於て云ふ所に依れば、歐羅巴に於ても百人の博徒が集合せば、

182
其中の九十九人迄はアリアン人種に屬する者で、残りの唯一人がセミチック人種に屬すると云ふ割合である由。加ふるにアリアン人種は浪費家である。之は古代より多く勞作せずして収入を得るに慣れた結果であると思ふ。現に彼等は遊牧の時代を過ぎて農業に従事するに至つても、曾て獸類に依りて必需品を獲得したる習慣があるので、更に奴隸を用ひて之を獲得せんとしたる如く、常に手を拱して生活するの惡癖がある。之が爲めアリアン人種の中には浪費家が多く、巨萬の富を擁して其威を振ふも、僅かに一代にして斷絶することが少くない。然るにセミチック人種に屬する者は頗る節儉を重じ、一錢を收むれば一錢を蓄へ、百金を得れば百金を積んで、容易に浪費せざるが故に倒産者を出すことが甚だ稀である。世界に於ける富豪の多數がセミチック人種に屬するは偶然でない。

又彼等は世界に於ける都市の創設者であつた。舊約書創世紀第四章に

「アダム其妻エホバを知る。彼孕みてカインを生みて言けるは、我エホバによりて一個の人を得たりと。

また其弟アベルを生めり、アベルは羊を牧ふ者、カインは土を耕す者なりき。

カイン亦其妻を知る。彼孕みてエノクを生めり。カイン邑を建て、其邑の名を其子の名に循ひてエノクと名けたり。」

と云ふことがあるが、如斯く初めて都市を建設した者は、農業を營める人種であつたのだ。凡そ農業を營む者は都會に生活する必要がない。然るに農業に従事する人種が都市の創設者なりと云ふことは、一見矛盾のやうであるが、然かし理由がある。元來セミチック人種は平原に生活し農業に従事して居るが故、外敵の襲來に遭遇する場合には、山谷の險無く、絶壁の奇なく、殆ど自己を防衛すべき障碍物が無く、一望坦々の平野のみである。茲に於て彼等は敵の襲來を蒙りし際、退却して難を避くる土地を必要とした。而して此の必要は彼等をして都會の建設を思付かしたためたのであつた。從て古代の都會に於て主要なる部分は、無數に密集せる人家に非ずして、其外部を包圍せる城壁である。即ち敵の襲來と共に農民は其所有財産を携へて此の城壁に避難した

のである。故に最初の都市は出来得る限り其城壁を堅牢にし、内部は極めて粗末なる野營準備を爲すのであつた。是れ歐羅巴及亞細亞の諸國に於て、今尙ほ其都市の周圍に堅牢なる城壁を有する所以である。故に古代の羅馬の如きも、其城内に生活することを許された者は、其城外に土地を有する者か、然らずんば商業に従事する者に限られて居た。然かし土地を有せずして城内に生活した者は、土地を所有する者より常に輕蔑せられたのみならず、課税せられたのである。然るにアリアン人種に至りては僅かに村落の生活を營むに過ぎなかつた。チンメル氏の「古代印度生活」を見ると彼等も亦敵の襲來を避ける爲めに“Pur”と稱する避難所を造つた様であるが、然かも此等の避難所は多く斷涯の上又は森林の間に設けられて、荊茨、樹枝、木柵、岩石、溝渠等を以て圍まれたる、粗末なる避難所に過ぎず、敵の退却後は放任して顧みなかつたのである。従て其組織はセミチック人種の建設したる都會の如く永久的若しくは半永久的の性質を有するものに非ず、全く假工的の集團に過ぎなかつた。如斯く彼等

は數千年の間唯一の都會をも有せずして生活し、常に平原に出で、は敵を襲ひ、戰疲れては山間の避難所に逃歸り、禽獸と多く異ならざる生活をなしたので、之をセミチック人種の都會に比ぶれば其差霄壤も啻ならざる状態であつた。

凡そ文明は都會に起るものである。即ち農民中の比較的多くの財産を有する者は、其安全を期する爲め常に都會に生活し、平素は周圍の田圃に耕耘せる者も、賣買の爲め常に往來し、爲に都會に於ては自ら商工業勃興し、精神的にも又物質的にも、著しく文明は發達した。例へば家屋の如きもアリアン人種は永く木造の茅葺きの家屋に生活したるに反し、セミチック人種は早く石造の家屋に生活したのである。現にシベリヤ及バルカン半島の地方には、今尙ほ木造家屋の殘存せるを見る。一寸考ふれば主として山間に生活し岩石の間に避難所を有したるアリアン人種が永く木造の家屋に生活し、メソポタミヤの茫々たる大平原に生活して、岩石を獲得する事容易ならざるセミチック人種が石造の家屋に生活したる如きは、不思議のやうであるが、能く考ふれば

決して不思議でない。アリアン人種は常に巖岨たる山間に生活し、奇岩怪石に接する事多しと雖も、之を切出して建築の用材となすが如き知識の能力を有たなかつた。然るにセミチツク人種はメソポタミヤの大平原に生活した爲め、ユーフラテス、テグリス兩河の沿岸に累積せる粘土を利用するを得たので、之を材料として、或は日光に曝し、或は竈に焼き、堅固なる煉瓦を製造したのである。舊約書創世紀第拾壹章にも次の如き記事がある。

「茲に人々東に移りてシナルの地に平原を得て其處に居住せり。彼等互に言けるは去來礫石を作り之を善く熱かんと。遂に石の代りに礫石を獲、灰沙の代りに石漆を獲たり。又曰けるは去來邑と塔を建て其塔の頂を天にいたらしめん。斯して我儕名を揚て全地の表面に散ることを免れんと。」

茲に所謂シナルの地は即ちメソポタミヤの事である。之に依りて觀るも彼等は粘土を用ゐて煉瓦となし、之を固むべき一種のセメントを得て、之を以て都會を建設し、又塔を建て、大に其建築の能力を天下に誇らんと欲した事が分かる。

今を去る四十有餘年前即ち千八百七十四年に英人ジョージ・スミスなるものがニネベとバビロンの遺蹟を發掘して、多くの粘土版の記録を發見し、楔形文字の研究に多大の貢獻を爲したるは、著聞の事實であるが、彼等は當時盛んに粘土を利用して、種々の技術に應用した事は争ふことが出来ない。固よりセミチツク人種が斯く粘土を利用して煉瓦を造る事を覺えたるは、其獨創であるか、他人種の模倣であるか、分明でない。舊約書出埃及記の第一章に

「エジプト人イスラエルの子孫を嚴く動作かして辛き力役をもて彼等をして苦みて世を渡らしむ。即ち和法、作、輒、および田圃の諸種の工にはたらかしめけるが、其働かしめし工作は皆嚴かりき。」

とあるが、埃及人は早くナイル河の流域なる粘土を利用して、煉瓦を造つたに相違ない。而してイスラエルの人々が埃及に捕虜となつて居る間に之を學び、歸りて他のセミチツク人種に傳へたものではないかと云はれないことはない。現に埃及の漂渺たる平原に聳ゆるピラミッドの中で、最古のものと稱せられて居るサツカラのピラミッド

は、粘土質の煉瓦を以て造つてある。然し乍ら之を歴史上の年代から観ると埃及は紀元前二千七百年以降の文明を記録するに過ぎないが、バビロンに至つては紀元前三千八百年の頃已に高度の文明を有した事を想像し得らるゝのであるから。孰れが石造家屋の創設者であつたか分明せぬが、兎に角セミチック及ハミチックの兩人種がアリアン人種より數千年前に石造家屋に生活したるは明白である。

アリアン人種の中で最初に石造家屋を建築したのは、實にギリシア人である。是れギリシアは地主海に面して交通の便良く、アリアン人種中の如何なる者よりも早くセミチック人種なるフィニシア人と接觸し、又ハミチック人種なる埃及人と交通し、比較的早く其文明を吸收せるが爲めである。其以前に於ける建築は、誠に粗末なるもので、かの有名なるデルヒの神殿の如きも、桂樹を以て建築せられたるに過ぎず、ローマに於けるギスタの寺院と雖も、藁葺の小屋に過ぎなかつたらしい。彼のゴール人がローマに侵入して火を放つや、全市忽ち火の海と化し悉く灰燼に歸したのも、亦其家

屋の木造であつた結果である。故に彼等は火を怖るゝこと最も甚だしく、獨逸語に於て今尚ほ放火と云ふ事と疫癘の傳染と云ふ事とを同一の文字即ち "ansteckung" で言表するが如きも、如何に彼等が火を怖れたるかを證明するものである。然るに之に反してセミチック人種の間には、火を怖るゝ觀念殆んど無く、舊約書の申命記第貳十八章に於て、神の命令を奉せざる者に天罰の來るべきを説き、或は疫病、或は飢饉、或は敵軍襲來、或は猛獸の災禍等、あらゆる災禍を列記したれども、終に一言の火災に説き及ぼしたるを見ない。加之、舊約全書を通じて之を見るも、遂に火災なる文字を發見する事が出来ないのである。是れ實は彼等が已に早く石造家屋の建築を發明したる結果である。斯くて彼等は建築に長じ、技術を修め、アリアン人種に先んじて著しき文明を建設したのであつたが、之が又意外にも彼等の衰微の原因となつた。即ち彼等は如斯き大規模なる文明を起し、地上に種々の建築物を建立せる結果、終に移住と云ふ事が不可能となり、此所に固定的生活を營まざるを得ざるに至り、斯くてセミ